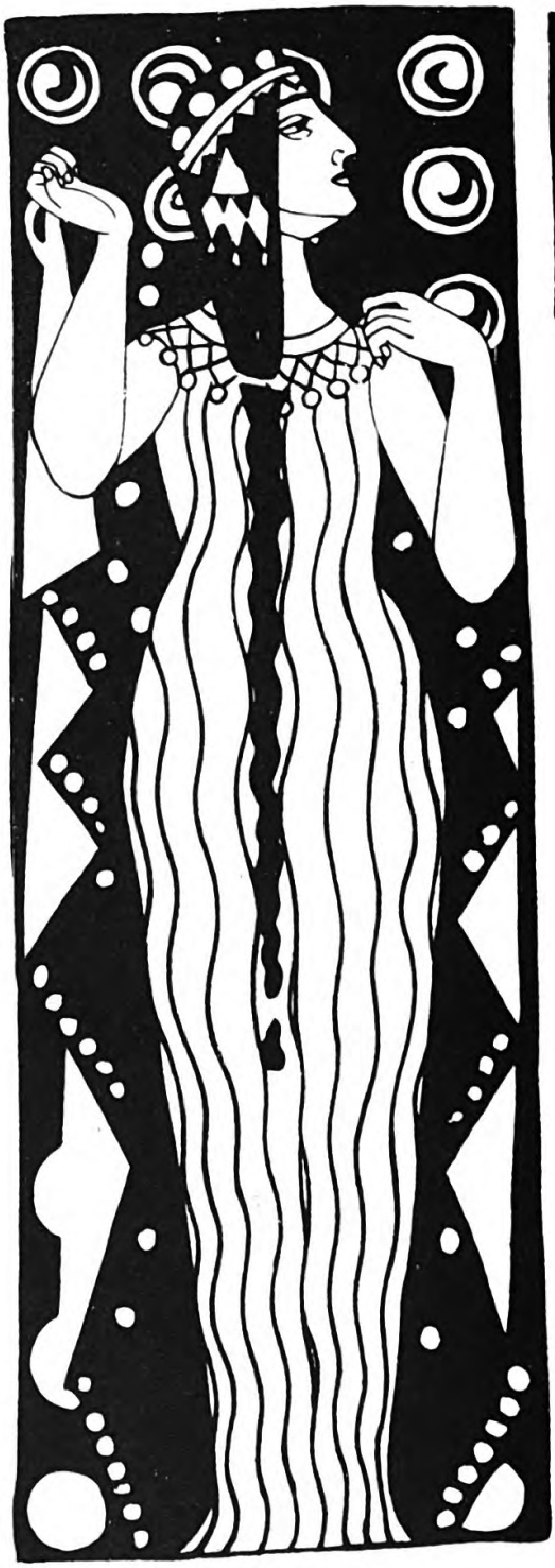
青鞜



第六月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

壽

韜

第二卷■第六號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜 第二巻第六號 目次

叔父ワーニャ（脚本）……一……瀬沼夏葉譯
延壽（史劇）……一六……木内錠
マルゴ（小説）……三五……増田初
りう子樣に（小説）……六一……森しげ
油煙、野の聲（短歌）……六四……三島、橋爪
或る女の戀物語（詩）……六九……小林歌津
アモンティレートの樽（飜譯）……七三……ポオ
習作の三（小説）……八四……杉本正生
客（小説）……一〇〇……小笠原さだ
日記……一一〇……こいそ、紅吉
紫陽花（俳句）……一一九……白雨
編輯室より……一二三……同人

附錄（マグダ）

文藝協會の「マグダ」……一……時雨
讀んだ「マグダ」……六……らいてう
マグダに就いて……一七……ら、ゑ、紅、錠
自由劇場第六回略評……一八……八千代

挿畫 マグダ

表紙繪 長沼智惠

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脚本 叔父ワーニャ（承前）

第三幕

セレブリヤコフ家の客間。右と左と中とに戸口がある。時は晝。

（ヲイニツキイと、ソーニヤとは椅子に掛けてゐる。エレナ・アンドレエウナは何か考へながら、室内を往き復りしてゐる。）

ヲイニツキイ。教授先生は、今日皆に午後一時に、此の客間に集まれと云ふ御命令を下されたのだ。（時計を見る。）一時十五分前。何か皆に零したくなつたのだらう。

エレナ・アンドレエウナ。何か乾度用事なのでせう。

ヲイニツキイ。甚麽用事が彼に……下らんことを書くのと、愚痴と、嫉妬とより外には彼に用事があるものですか。

ソーニヤ。（咎めるやうな聲で）。叔父様！

ヲイニツキイ。うむ、うむ惡かつた。（エレナ・アンドレエウナを指して）。まあ御覽、あのぐた／＼して、さも力の拔けたと云ふやうな歩き振りを。何とも好いよ！ 實に美だ！

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエウナ。　貴方つたら、まあ一日中よくさうぶん〳〵と蜂のやうに唸つてゐらつしやるのね、でもつて、よくお厭きなさらんのねえ。（しみ〴〵と寂しげに）あゝ私、退屈で死んぢまいさうですわ、奈何したら可でせう……

ソーニヤ。（肩を縮めて）。　仕事は澤山あるぢや御座いませんか？若し仕やうとお思召しさへすれば。

エレナ・アンドレエウナ。ぢや例へば？

ソーニヤ。家政を執つたり、農民に敎へたり、又療治をしてやつたりなんか、隨分ありますわ、私等ね、叔父樣と二人、まだ貴方や、お父樣の此所にゐてなかつた時分に、よく町の市場へ粉を賣りに馬車で出掛けたものでしたわ。

エレナ・アンドレエウナ。そりや出來ませんよ、而して興味がありませんもの、百性に敎へたり、療治をしてやつたりなんてことは、まるで理想小説にでもありさうな馬鹿らしいことですわ。さうして、まあ、變なものぢやありませんか、考へて御覽なさい。急に私が、何の動機もなしに、ひよつくらと、百性に敎へ初めたり、治療などを爲初めたりしたら。

ソーニヤ。私解りませんわ、それが別に變だと云ふことは。まあだけれど其中には慣れて來ますよ。（繼母を抱く）。　ねえ、退屈しないでゐらつしやる方がいゝことよ、可愛いお母樣！（笑つて）。　可笑しぢやありませんか、貴方は仕事がなくて退屈なさる、さうして其の退屈と、倦怠とか、四邊にだん〳〵傳染するの、御覽なさい、まづワーニヤ叔父樣を、ね、此の頃はもうまるで仕事を放り投げ

て了つて、たゞもう貴方の側にばつかり喰付いて、全く影か何かのやうですわ。それから私も矢張さうなので、仕事も何も棄てゝ了つて、たゞ恁うしてうか〳〵と貴方の傍に附纏つて、何か話をきかして貰をうと思つてゐるばかり。もう仕事なんぞは厭になつて了ひましたわ。又それから、あのドクトルのミハイル・リオーヰチ様もです、前にはほんとうに彼の方は偶にほかお出がなかつたのです、月に一度お招きするのも容易ぢやなかつたのでしたが、此の節たら、毎日出掛けてお出でになつて、矢張山林の方も醫者の方も一切其方退けて……貴方はほんとうに何か魔神のやうですわ。人を皆這麼に魅してお了ひなさるのですもの。

ヲイニツキイ。何も躊躇することはありやしません（元氣よく）。え、もし、我輩の愛する大事な人！もつと利口におなりなさい！貴方の血管にはルサルカ（水に住む女の靈）の血が流れてゐます、ルサルカにおなりなさい！而して一生にたゞ一度でも自由を得て見なさい。水神の誰にか首丈け惚て、一所に思ふさま、水の深みへザンブリと計りに飛込みなさるがいゝ！而して教授や、我々が呆氣に取られて、開いた口が閉がらんやうにしてお見せなさい！

エレナ・アンドレエウナ。（憤然として）。お止しなすつて下さい、那樣にまで人の氣を亂さないでもようございます！そりや餘り殘酷ぢや御座いませんか！（行かうとする）。

ヲイニツキイ。（彼女を止める）。まあ、まあ那樣に怒らんでもいゝですよ、勘辨して下さるさ、さあ仲直りを致しませう。（彼女の手に接吻する）。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエウナ。天使だつて這麼に有仰られたら、我慢が出來やしません。

ヰイニツキイ。ぢや和睦を承諾して下さつた印に、今我輩薔薇の花束を貴方に持つて來ます。それを朝から貴方に捧げる意で拵へて置いたのです。秋の薔薇！露重げな、しつとりとした美しい薔薇を！

ソーニヤ。秋の薔薇！露重げな、しつとりとした美しい薔薇……（二人は窓を見遣る）。

エレナ・アンドレエウナ。もう九月になりましたのねえ、あゝ奈何して此所で冬を暮さうか（間）醫學士は何處？

ソーニヤ。ワーニヤ叔父様の所にゐてよ、何か書いて居らしつたやうでした。叔父様が行つてお了ひて、まあよかつた、私ね貴方にお話があるんですわ。

エレナ・アンドレエウナ。甚麼(どんな)？

ソーニヤ。甚麼(どんな)つて、（彼女の胸に頭を寄せる）。

エレナ・アンドレエウナ。あゝ、さうか、さうか（ソーニヤの頭を撫でる）さうねえ。

ソーニヤ。私器量が惡るくつて。

エレナ・アンドレエウナ。だけどお前の髪は隨分いゝ毛よ。

ソーニヤ。厭だわ。（自分を見やうとして鏡の方に振返る）さうぢやないのよ、それは恁うよ、若し誰か器量が惡るければ、蛇度人がよくさう云ふのよ、貴方は眼色がいゝとか、髪がいゝとかつて……私はあ

のドクトルを愛してゐますわ、もう六年の間も愛してるの、自分の母よりも、もつと愛してゐるの始終彼の聲が聞えて、彼の人と握手をするのを感じてゐるの、さうして度々戸の方て、彼の人が來たやうな氣がするの、悉うして貴方の所に來るのも、詰り彼の人の話を一所に爲たいからなんだわ。て、此の頃は彼の方は毎日のやうに家へ入らつしやるけれど、何だか私に心を向けてはゐなさらんやうに見えるわ、私ほんとうに煩悶してゐますの、私にや望が些ともないんですもの（失望の體）あゝ心の强い人になりたい……私は一晩中神に祈禱をすることもあるの……私度々彼の方のゐる所へ行つては、話をして眼色に氣を着けてゐるのだけれど……あゝ私にはもう自尊も氣力もありやしません、まるでもう自分を左右する力がないんですわ……昨日も私堪へ切れなくて、ワーニャ叔父樣に皆心を打明けたの、彼の人を愛してゐるつて、今お召使でも、誰でも家の者は皆私のことを知らないものは無いの。

エレナ・アンドレエウナ。それて彼の人は。

ソーニャ。彼の方は些とも氣が着かないやうなの。

エレナ・アンドレエウナ。（考へながら）變な人てすのね……ぢやね、些と？私が話して見ませうよ彼の人に……私用心して謎を掛けて見ますよ　（間）ほんとうに何時までそんなに何方付かずて譯が分らないか知れないんだもの……話して見やう、可てせう！

（ソーニャ首肯く）。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエウナ。それがいゝ。愛してるか、愛してゐないかは直ぐ解る。お前はそんなに慥さない方がいゝのよ、心配もしない方がいゝわね、私成るべく用心して、彼の人が氣がつかないやうに聞いて見やう、たゞ愛してゐるか、愛してゐないかをさへ見ればいゝんだから(間)又若しさうでないならば、寧ろまるで此所へ來ない方がいゝですわ。

ソーニヤ。(首背いてゐる)

エレナ・アンドレエウナ。若し寧そ見なければ却つて其の方が增ですよ、何時までもなまはんじやくに棄てゝ置くのはよくないから、恁うしませう、私今直ぐ聞いて見やう。さうだ、彼の人は私に何か書いた地圖を見せるとかと云つてたから……行つてお前ね、彼の人にさう有仰い、私が些とお目にかゝりたいつて。

ソーニヤ。(酷く興奮して)。後で皆私に本統を有仰つてね……

エレナ・アンドレエウナ。さうです、無論ですわ、さうして事實はたとひ何うあつても、那樣に恐れるには及ばない、分らないでゐるよりは打明けて聞いた方が餘程いゝ、まあ、私に委任してお置き。

ソーニヤ。えゝ、どうぞ、さうして、私申しませう、彼の方に貴方がお目にかゝりたいつて、地圖を見たいつて、ね……(行きかけて戸口の所に來て又立留る)。だけど、解らない方が增だわ……まだ望みがありますもの……

エレナ・アンドレエウナ。何ですつて。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ソーニヤ。いえ、何でもないの（退場）。

エレナ・アンドレエウナ。人の秘密を知つてそれを助けてやらない位、悪い氣持のことはない。（考へながら）。彼の醫學士は彼女を愛しちやゐない、そりやよく解つてゐる。然し奈何して彼女は彼の人の妻となれないことがあらう？彼女は勿論那様に綺麗ぢやないさ、だけれど何も田舎の醫者で、もうあの年輩の人の妻としては、結構ぢやないか。利口で、氣立がよくつて、無垢な乙女だもの……いや、だけれどさうぢやないんだ……（間）。私はよく解るあの可憐なソーニャの心を。ほんとうに彼女の周圍には、皆人間ぢやないやうな、何か薄黒い斑點のやうなものども、うぞ／＼してゐて、たゞ食ふ、飲む、寝るそれ以上には何にもない、何にもない下らんことばかりを見聞きしてゐる、這麼退屈の中にゐるんだもの、さうして這麼中へ、時々周圍の人間とはまるで懸け離れた、綺麗な、教育のある、趣味のある人が來たとすれば、それは丁度黒暗の中に月が出たやうなもの……恁云ふ人の引力に彼女は全く引附けられて、自分の總てを皆忘れることを願つてゐる……さう云へば私も何だか少し彼の人には氣があるやうに思はれる……何だか彼の人がゐないと寂しい、彼の人のことを考へると、自然と嬉しくなる……あゝ、ワーニャ叔父様がさう云つたつけ、私の脈にはルサルカの血が流れてゐる、一生にたゞ一度でも、自分に自由を得て見なさいつて。ふむ、さうかも知れないわねえ？或はそれも可いかも知れない……這麼人等の中から、這麼睡さうな顔の人達の中から、這麼下らん話の中から、鳥のやうに飛び上りたい。さうして周圍に這

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

麼下らん人間ばかりが生活してゐると云ふことを忘れたい、然し私は憶病の羞澁(はにかみ)やだから……良心は屹度私を苛責するだらう……て彼の人が態う毎日此家へ來てばかりゐるのは、こりや何の爲てあるかと云ふことは、私だつても察してゐる、その罪はまさしく自分にあると云ふことも感じてゐる、さうして、あゝ、ソーニャの前には膝を折つて泣いて謝つても足りない譯だ……

アストロフ。（地圖を持つて登場）。今日(こんにちは)は（握手する）。貴方は僕の地圖を御覧になりたいとかで？

エレナ・アンドレエウナ。はあ、昨日貴方はお見せ下さるとお約束なさいましたでせう……貴方只今お暇てゐらつしやるの？

アストロフ。無論暇てす。（地圖を骨牌の机の上に擴げて鋲にて留る）。貴方は何所でお生れてしたか？

エレナ・アンドレエウナ。（彼に助けながら）。彼得堡てす。

アストロフ。而して何所て敎育を受けられましたか？

エレナ・アンドレエウナ。音樂大學校(コンセルワトーリャ)て。

アストロフ。這麼ものは貴方には餘り興味がないてせう。

エレナ・アンドレエウナ。何故てす？實を云へば私餘り田舍のことには暗いてすが、然し書物ては隨分澤山讀みましたよ。

アストロフ。此の家に僕の机があるのてす、イワン・ペトロヰチの室に。私は時々全然疲れて了つて、馬鹿になつて了ふと、何事も棄てゝこゝに遁げて來るのてす、さうして這麼ことをして、一時間

も、二時間も遊んでゐるのです、イワン・ペトロヰチと、ソーニャとは算盤をぱち〱する、僕は彼の人達の傍で自分の机によつて、圖を塗りくつてゐる。此所でお蔭で身も、心もいつも暖められる、沈として蟋蟀の鳴くのを聞くこともあります、然し僕は這麽快樂はさう安く度々は自分に許さない、月に一回位なものです……（統計圖を示しながら）さあ、此所を御覧なさい、これは五十年以前の我々の郡の狀況の圖です、濃い綠と、淡い綠とは林を示すものです。面積の半分は林で塞がつてゐます、綠色の上に赤色の縱横線が引いてある所は、鹿だの、山羊だのなんかの住んでゐた所なんです……僕は此所に土地の植物も、動物も示してゐるのです、此の湖水の上には、白鳥や、雁や、鴨が住んでゐました、さうして老人の話によると、有らゆる鳥類は數限りなくゐたさうです、まるで雲のやうに舞つてゐたさうです。大村小村の外に御覧なさい、彼處にも、此處にも少しづゝの農家や、歧教者の隱遁所や、水車などが散らばつてゐます。牛馬も澤山ゐたのです、それは空色の繪具で見せてあります。例へば此の村には空色が濃くなつてゐます、此所には非常に多くの馬群が住んでゐたのです、さうして各一戶ごとに三匹づゝの馬がゐたのです（間）今度は下の方を御覧なさい、これは二十五年前の狀況です、此の圖になると、深林はもう面積の僅か三分の一に過ぎないのです、山羊はもうゐなくなつてゐます、鹿だけはまだゐます。綠色と空色とは淡くなつてゐます、まづ那樣やうな譯です。それから第三部の方へ移つて見ませう、即ち今日の郡の狀況の圖です。もう綠色はちらほらとはありますが續いてはゐず、點々と疎になつてゐま

す。鹿も、白鳥も、山鳥も皆無くなつて了ひました……先に村から離れてあつた農家も、隱遁所も、水車小舍も跡もなくなつてゐます。一般に云ふと疑ひもなく、斯くして衰滅しつゝある狀況の圖です。もう十年或は十五年の後にはすつかり全滅して了ふやうに見られます。然しこれは文明の影響だとか、舊生活が滅びて、新生活に變るべきであるとかと貴方なんぞは有仰るでせう。さうです、が、若しこの伐り盡された深林の場所に、道路や鐵道が通ぜられたのならば、又製造場や學校が出來たとするならば、私もそれには同意します、さうしたならば人民は一層健全にもなり、富も來り、智力も增して來るでせう、所が那樣ことは何もないではありませんか、郡の內には依然として、沼もあり、蚊も澤山ゐる、道路もなし、貧窮でチブス、赤痢、火災……して見ると此の衰頽と云ふものは、生存競爭に絕えざる結果です、これは怠惰と、無智と、自覺の皆無から生じるのです、凍えた、饑えた、病み疲れた人間が、自分の餘命を救ふ爲、自分の子等を護る爲に、何でも饑を凌ぎ、暖まることの出來るものならば、本能的に、無意識的に之に縋つてゐるのです、明日のことの考もなく、總てを破壞してゐるのです、殆どもう總ては壞されて了つたのです、然し其換りに何も未だ建設されない。（冷かに）。僕は貴方のお顏で察するに、這麼話は貴方には面白くおありなさらんやうです。

エレナ・アンドレエウナ。さあ、どうも餘り深くは解らんやうです。

アストロフ。解り惡いことは何もないんです。たゞ餘り面白くありません。

エレナ・アンドレエウナ。打明て申せば、今日は少し頭が他のことて塞がつて居るのてしてね、お許し下さいまし、實は少しお伺ひ申したいことがあるのてすが、何てすか申上悪くゝつて。

アストロフ。伺ひたいことてすつて？

エレナ・アンドレエウナ。えゝ、伺ひたいこと……別に罪のないことなのてす、まあ掛けませう（椅子に掛る）。用事と云ふのは恁うなのてす、或る若い婦人に關係したことなのてすが、どうぞ一つ眞面目にお聞取りを願いたいんてす、お互に親友としてお話を致します、さうして後はすつかり其切てお忘れ遊ばして下さい。

アストロフ。はあ。

エレナ・アンドレエウナ。それは實は私の家のソーニャについてのお話なのてすが。彼女は如何てせう、貴方にはお氣に入り遊ばしませうか？

アストロフ。はあ。僕大に彼の方を尊敬するてす。

エレナ・アンドレエウナ。それぢや彼の娘の女振はお氣に召して？

アストロフ。（少し考へて）。いゝや。

エレナ・アンドレエウナ。それぢやあともう二言三言お伺ひ申すばかりてすか、貴方は別に何も彼女についてお氣がお着き遊ばしませんてしたらうか？

アストロフ。いや何も別に。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エレナ・アンドレエウナ。（彼の手を捉つて）。貴方は彼女をお愛しなさらんのはお顔でもよく解りますが然し彼女は苦しんで居りますの……お察し下さいそれを、さうしてどうぞもう宅へはお出で下さるのをお控へ下さいまし、どうぞ。

アストロフ。もう僕の時代は過ぎて了つたのです……さうして暇もないのです……（肩を縮めて）。何時になつたら。（彼は具合悪るさうに）。

エレナ・アンドレエウナ。あゝ、いやなお話しつたらない。私までも這麼に胸がどき／＼致しますわ。百貫目の重量さを背に負はせられたやうでした。然しまあよかつた。もう皆お終まで云つて了つたから。さうして……さうしてお歸り下さいまし、どうぞ此家から……もとよりお解りでもゐらつしやるのですから、皆よろしくお察し下さいまして（間）。私さへほんとうに顔から火が出さうでした。

アストロフ。然し若しこれが貴方から二ケ月前に伺つたのなら、其時なら、まだ或は考へて見たかも知れませんが、今はもう……（肩を縮める）。だがその爲に彼のソーニャ様が苦んでゐなさると云ふのは、それは勿論……ですがたゞ一つ譯の解らんことがあります。一體、何のために此の問題について、貴方がまた口をお入れなさるのでせうか。（彼女の眼を瞶めて、人差指を鼻の所へ上げながら）。貴方は狡い方だ！

エレナ・アンドレエウナ。何です？

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アストロフ。(笑ひながら)。　狡い方だ！ソーニャ様が苦んでゐなさる、或はそれはさうでせう。然してす、何の譯でそれが貴方に問題の解決の必要がお有りですか？(彼の云はんとするのを遮つて、元氣よく)。まあ那樣に驚いた顏をなさらんでもいゝです……貴方はよく御存じぢやありませんか、何の譯で僕は恁う毎日々々此家へ入浸りてゐるのでせうか、何の爲に、誰の所に、恁うして來るのでせう、これは貴方はもうとくに御存じの筈ぢやありませんか。猫！可愛い！那樣に僕を見ないで下さい、那樣に。僕はもうよく承知をしてゐます、古狸ですからな……

エレナ・アンドレエウナ。(烟に捲かれたやうな顏で)　猫ですつて？些とも譯が解りませんよ。

アストロフ。貴方は毛色の奇麗な鼬(いたち)です……貴方に犧牲が入るのです！さうです御覽なさい、僕はもう全一ヶ月皆仕事を棄てゝ、何もしないで、夢中になつて、たゞ貴方を追つてゐます。さうして見る所、これは貴方に大變氣に入つてゐられるやうです、大に……さうです、僕は降參したです、貴方は這麼問題の解決を見ないでも、よく御存じなのです。(兩手を拱いて頭を垂る)。降參しました。さあ、どうぞ食つて下さい！

エレナ・アンドレエウナ。貴方はお氣がお違ひ遊ばしてよ。

アストロフ。(齒を噛合して笑ふ)。　貴方は羞澁やですな……

エレナ・アンドレエウナ。いゝえ、私貴方のお考へよりもつとずつと高尙です、私誓つても　(行かうとする)。

アストロフ。（道を遮つて）。僕、今日歸ります、さうして此の後は參りますまい……（彼女の手を捉り、後を振向いて見ながら）。然し我々は何處で會ひませう？ 早く有仰つて下さい……（感情を强めて）。何と云ふ奇麗な顔、優美な姿……一度接吻させて下さい……貴方の薫のいゝ髪に、たゞ一度だけ……

エレナ・アンドエウナ。誓つて私……

アストロフ。（彼女の言を遮つて）。何て誓ふのです？ 誓なんぞ入るものですか、まあ、那樣餘計なことを云つてゐずに……あゝ、何と云ふ美人です貴方は！ 何とこの可愛い手！（手に接吻する）。

エレナ・アンドレエウナ。澤山、澤山、もう澤山……彼方へお出て下さい。（手を引込ろ）。貴方は皆何んでも忘れなさいましたのね。

アストロフ。早く有仰い、何處てす、何處で明日我々は會ひませうか？（彼女の胴を抱く）。是非さうしなけりやならんぢやあないか、ねえ、是非會はんけりやならんよ、お前と、（彼を接吻する。此の時丁度チイニツキイ手に薔薇の花束を持ちて入つて來た。さうして戸の傍でひたと立留る）。

エレナ・アンドレエウナ。（チイニツキイをまだ見ないて）許して下さい……お止し遊ばせ……（と云ひながら猶頭をアストロフの胸に擦付ろ）。いゝえ！（キツとして行かうとする）。

アストロフ。（彼女の胴に手を廻して引留ろ）。明日來なさい、僕の山林管理所へ……二時頃に……いゝてすか？ あ、いゝてすか？ 屹度來ますか、あ、お前は？

エレナ・アンドエウナ。（ヲイニツキイを初めて見ろ）。止して下さいつたら．（酷く極り悪ろげに窓の方に飛び退ろ）。

何と云ふ酷いんでせう……

――未完――

チエホフ作

瀨沼夏葉譯

15

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

史劇　延壽　　一幕三場

人物

源義朝　　源朝長

鎌田政家　　澁谷金王丸

平賀四郎義宣　　佐藤式部六輔重成

大炊（延壽の母）　　延壽（義朝の妾）

夜刄姫（延壽の一女）　　鷲津玄光

侍女六人

場所。　美濃國　青墓宿　大炊長者が館

時。　平治元年十二月二十七日夜半より曉

第一場　夜刄御前の居間

平舞臺、正面は奥に通ずる襖、上手に一小室、障子を以て閉切る。下手杉戸より奥へ。座の中央稍上手寄りに當家の姫夜刄御前、侍女葉末、小萩、楓の三人を相手に燈火（ともしび）掻き立てゝ冬の長夜を貝覆ひなどの遊び事に興じ居る體にて幕明く。しつらへなど豐かなるも綺羅を避くべきこと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

葉末。遂々今度も御姫様が一のお勝ち、次は誰ぢや、小萩殿か。

小萩。いえ〳〵、まちつとで私になつたものを、口惜しや、此一つを出し損ふたばつかりに二の勝まんまと楓殿にしてのけられた。

楓。甘い口車に措かしやんせ、常から折々ずるい事せらるゝ罰てがな。

三人。ホヽヽヽ

小萩。そんなら今一度、今度こそとつくと勝つて羨ましがらせうぞえ、憎手口の返報に、それ楓殿、早う出貝置かしやんせ。

夜叉姫。もう貝遊びにも倦いた、皆がしたくば其方達ばかりでしたがよい、妾は見物せう。

楓。お姫様がお脱けなされては。

葉末。ほんにさうぢや、では何ぞ別に面白いお慰みが……。

小萩。貝合せが御心に入らずは、双子祿なり

葉末。オヽ、よい處へ氣附かれた、楓どの、急いで是へ。

夜叉姫。双子祿も面白うない。措や。もう何にも遊び事はしたうない程に。

小萩。其様に愛想もなう仰せられては、なう楓どの、何か外に珍らしくて御氣の替るやうな御慰みの思ひ附はあるまいか。

楓。さればいな、此程は都大路も合戦の巷と入亂れ、處隔たる此美濃路迄人馬の騷ぎ、ついぞ物見

に出づる折もなければ、浮世めかしき耳も持たず。

葉末。合戰と申せば其後の模樣はほんにどうあらうぞの、街道を往來の人に問へばどうやら御味方の勢多く落ちられたりとか、それにつけ平家がたより驛々に人を馳せ落人めかしとあれば容赦なく引捕へ嚴しき吟味致すとや、扨も頭の殿の御上、味氣ない事で御座りまするなあ。

小萩。とはいへ是のみは時の御運、一時あやうく見えさせ給ふとも、又いつか必らず其旗色を擧げさせ給はん、定めし此度の御合戰、氏の御神の守護もあらうずなれば、さまで思ひ落すことも御座りますまい。

楓。さなれどかゝる折柄をよい機にし、山賊夜盗などの街道筋に出てゝ目立ちたる家とあれば人數を催し、襲ふとや、せめて鷲津殿にても一つに渡らせられなばと思へど……女のみの心細さはかゝる折ふし一段に御座りますなア。

葉末。それに今宵は折惡くつい在所迄出しやりたる下部共も今以て見えず、月なき夜半に雪は深し、大方今夜は戾るまいと早うから門もとざし、要心かためさせては置いたなれど……是は私としたことが、丁と話が橫道に外れて仕舞ふた、サアもう一度、御機嫌なほされて、何ぞ御氣に召された事を、皆がお對手致しまする程に。

小萩。それが宜しう御座りまする、オヽそれ〳〵、年も今宵が二十七日、片手の指も折らぬ間に、新らしい春が參りまする。まりもお遊びなされたり、羽子もおつきなされたり、ちと浮々遊ばし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ませいなア、お前様程の御年榮(ばえ)では何もさうキナ〳〵思はせられずと、氣をわつさりお持ちなされて樂しう遊ばさるゝが母上様や祖母上様に何よりの御孝養に渡らせられまするぞや。

楓。さア楓が一番お對手したら御座りますれば……。

葉末。こりや一層双子禄がかはつて面白う御座りませう。

小萩。（双子盤を取出て）さア〳〵楓をまかしておやり遊ばせ。

（左右より動む。）

夜刄姫。其方衆には何が面白いのぢや、春が來よとて、花が咲かうとて、それで心が慰まると思ふかや、旦暮氣に懸る父の殿の御上、扨よ、御合戰も御味方の敗れになりしとか、葉末、今云やつたは定(ぢやう)か、定(ぢやう)ならば妾は何としたらよからうぞいなう。

葉末。是は又お姫様とした事が何を拵もないこと仰せられます、街道筋を商人連れの物語、ふと耳には挾みましたが正しう其者の確めたと申す譯でも御座りますまい、それからそれへの傳へ聞きを見て來たやうに語る話上手、眞否の程は疑はしう御座りまする。

小萩。さらばもう打しめつた御物語はよい加減にお措きなされませ、追付春にもなりませうならば必らず父上様にも之へ御越し遊ばされ、勇ましき戰お物語のくさ〳〵、母上様やお姫様には何かと數々の御土産　そうなりや旦暮慕ふて居させらるゝ御兄弟の中宮大夫様、兵衛佐様にもやがて目出度う御對面、花も咲きまする、鳥も唄ひまする何と御喜ばしうは居らせられませぬか、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はてなア。

夜乃姫。すりや定かや。

小萩。はいナア。

夜乃姫。誓文か。

葉末。今小萩殿のいはるゝ御聞き遊ばされてか、をりや御物思ひは御親子の御間柄、御道理ては入らせられますれど、何はともあれ御心長う、必らず其内には御吉報の参る事てがな御坐りませう。

楓。兎角御むすぼゝれ勝の御心晴らしには、ォゝ思ひ出しました、私が幼なうして育つた在所のひなびた手振りの一ふし、舞ふて御目にかけまする。葉末どの、小萩殿、濟みませぬが地を唄ふて下され。

小萩。それは一段と興ある思ひより、面白い事て御坐りませう。

楓。賴みまするぞえ。

葉末。小萩。(二人して) 心得ました。(居ずまひを直す)

楓。(小扇うち開き、中に立かりて) さらば御免なされませ。

葉末。小萩。(二人して) (假に狂言の小唄を借る) 七つになる子がいたいけなことよ……

(奥の方急にどよめく。遠くに門を叩くらしき音交る。皆々耳を澄ます。)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

楓。何事て御坐りませう。

葉末。されば、門を激しう叩きまするげな。

小萩。夜も晩し、下部共の戻りではよもあるまいに、何としても無氣味な、まして宵よりの此雪吹に人の訪なふ筈もありませねば、よも只事では御坐りますまい、お二人様には姫上を、ドリヤ一寸見て參りまうかいなア。　（舞臺廻る）

第二場　庭に面せる表坐敷

舞臺低き二重、正面は矢張り綺襖、椽を廻れる庭には石燈籠常盤木の樹立など配置宜しく、軒近に春を走せたる紅梅の朽木ながらに綻びそめたる趣深きなど淸く、總て積雪に閉され居る。上手に當家のあるじ延壽、燈火の下に物の本を繙き居る其傍に侍女二人、今一人の侍女は庭に下りたち下手枝折戸の中に控ふ、外には義朝主從、義宜、重成、政家附き隨ふ。

侍女の一。夜更と申し、此大雪に殊更案内知つての者らしうお庭口より忍びておとなふなど〻はこりや適切曲者に御坐りませう。

侍女の二。何はともあれ開けぬに越すことは御坐りませぬ、都に戰ひあつて以來殊の外物騷など聞きますれば、もしや夜盜などの人數を語らつて參らぬとも限りませねば滅多に御油斷はなりませぬ。

侍女の三。（枝折戸の内にて）嘸かし御難儀の御事とは存じますれど何を申すにも夜陰の事、殊に今夜は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

主人も他行、御宿の儀は平に御許しなされて下さりませ。

重成。すりや。どうあつても一夜の御恩は叶ひませぬか、扨ても笑止！習はぬ山路には行き暮れたり、せめて暫しの間なりと内に入れて息入れさせては給はらぬか、御疑ひもあらんか知らねど、先刻より申す如く、我々同行は此度都の合戰にかり催ふされたる諸國の俄武者、殊に味方と頼む勢は散々に敗られ、末はどうで討死と見た我々生き存命へてあらん限りは、とても今生で妻や子の顔が見られまじと義理も恥も打忘れて東へ下らんずる者、仔細はあらず平にこゝ開けさせられい。

侍女の三。してそれならば尙のこと、内へは入れ申すことが叶ひませぬ

義宣。とは又何故に？

侍女の三。方々にはいまだ御存知なからんか知らねど、假にも落武者と見るならば假令如何なる木の葉武者なりとかくまひをかん段な罪かろからず、尋常に引とらへて差し出さばよし、さもなきにあつてはその分には差措かずと平家方よりのそれはそれは嚴しい御ふれ、殊に驛々には人をつめさせ鵜の目鷹の目で見はり居ることなればそなた衆も其網にかゝつたら最後首がないぞえ、それにこゝは見らるゝ通り人目のしげい街道筋の事なれば忍ぶには餘計たよりが悪い、人目にかゝらぬ其先きにさつさと山路を駈け越えられたがよいぞや。

侍女の一。只今味方と申しゝは。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

延壽。怯しくも胸さわがかすることばのはし。（思ひあり）

義朝。重成、義宣、申すな、此義朝は見苦う戰敗れ、見事我家の軒に迄關を設けられて仕舞ふたわ、ハヽヽ。女にもたゞ一人の姫にも一目と思ふて危い道をこれ迄走せた不覺さ、笑ふまい、我ながら疎ましい未練心、要なき論議に時を移さんは無益、いざ是より引返さうぞ。

政家。御心短かき事を仰せられな、是より引返していづこへか落ちさせらるゝ、東に行かんか逢坂山不破關、西海に赴かば須磨明石、それ／＼嚴しく取かためたれば源氏の者の紛れ入らんやうも有るべからず、此雪と申すに殊更夜陰には及びたり、御行手の程危うしとも危ふし、とまれ、今宵一夜は是に御過しあつて、兎角の御思案に及ばせられい、幸内には心置かるゝ人ありとしも覺えぬ氣なれば某こゝを引受申さう、暫時く待たせ給へ。

（重成義宣に代り門に立よりて內を窺ふ。）

延壽。喃、此方達は何と思やるか、あゝして戀に乞はるゝものを扨も賴まれぬとは情知らずといふもの、殊に常ならぬ軍の爲の落人とあるからは敵にもあれ味方にてもあれ、我門邊に立寄つたが一樹の緣と云ふもの、たとひ山賊にもあれ、此上すげなうは斷はられまい、其門開けたがよい

侍女の一。なれど萬一が時には：：

延壽。案じやるな、妾が承知ぢや。

侍女の一。ぢやと申して……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

延壽。構やるな、早々內へ入れ申しやいのう。
政家。これ、そこなお女中、某が聲はよもお耳わすれはあるまいがな、狹霧どのと推量申した。
侍女の三。や、私の名を知つてぢや、して〳〵貴方様は……はて聞おぼえのあるお聲のやうぢやが……オヽそれ〳〵あなたは鎌田殿……いや〳〵心の迷ひと云ふもの、鎌田殿は頭の殿と御ひとつに今洛中合戰の最中と聞くものを、よもこれへは渡らせられまいな……
政家。漸々の暇取り心が急く、何かのことは內にて、一先づこゝをば開けられよ。
延壽。狹霧早う致せ。
侍女の三。ハア、扨ては疑ひもなき兵衛様か。
政家。しつ疎忽ばし云はれな、壁に耳。
（狹霧戸を開く、政家義朝に目禮す、義朝政家、重成、義宣を從へて內に入る。）
狹霧。ホウまことにこなたは鎌田殿。
延壽。我君か。
義朝。久しう有つた息災でか、見らるゝ通りの狀となり終したぢや。
延壽。ともあれまづこれへ。
政家。佐渡殿にも平賀殿にも終日の働き、嘸御疲れてはし御座らう、こゝをば某授り申せば各々方には奥にてゆるりと寛がれい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兩人。左樣なれば、御免を被りまする。

（是にて重成　兼宜の兩人、一禮して退場。義朝やがて政家を從へ上手にすまひ、延壽侍女下手に退る）

延壽。此大雪に難儀の御道中一段の御疲れ、（侍女の一）こりや、何も支度はあるまいが御寒さ凌ぎに一献これへ。

侍女の一。畏りまして御座りまする。

延壽。あのそれから母上にもいまだ御寝に入らざりせばそと此由を……ナ、（更に他の二人の侍女に向ひ）こゝは妾がもつ程にそなた達は奥へ行つて今のお二人を隨分おもてなしゝやいのう。

侍女二人。畏りました。

（侍女三人共退場）

義朝。大炊も達者であるか、して姫にも。

延壽。ハイ、母にも幼なき人にも變る事は御座りませねど都の風の吹き荒む今日此頃、年は暮れんとすれども其設けしつらふものもなく、幼ないながらも姫には殿の御上をのみ案じ煩ひ、拙々しき遊びもなく、旦暮合戰の事斗り問ふてはせめてもの心遣りと致して居りまする、それも此頃人傳に聞く音信には平家の軍の時を得て御味方の勢散々と聞く情けなさ、身も世もあられぬ思ひに掻きくれて居りましたが、てもようまあ。これ迄御越し遊ばされましたなア。

義朝。ようも戻らぬわ、水の流れと人の行末、げに時の運程怪しいものはない、さしもきのふ迄宗徒

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の兵士二百人其に從ふ軍兵二千余騎とこそは數へたれ、其一門の大將が僅か八騎と迄落ち失せて心細うもこれまで迯つて來たぞや、六波羅攻めの合戰に見事敵に謀の裏かかれ、加ふるに光基季實が輩の憎しとも憎き心がはり、殊に源家一門に取つては頼み多き兵庫頭すら六波羅へ寢返り討、大内へも得入らず、手足と頼む郎等には少なからず討死させ既に義朝も都にて切死せんずとは決せしが鎌田の諫言もだし難く弓矢帶びては敵と見て退かぬ源氏の大將が卑怯と知つて命を惜んで參つた。

延壽。ても御物具の御固めもなく御馬にも召されず。

政家。三條河原より御馬を返させ奉り、ひた走りに駈りしが、早それと耳にやしつる、叡山の僧徒に見とがめられ、既にあやうき御命なりしが齋藤別當のはかりことにて漸々に虎口を逃れ、龍華越にさしかゝるやまたしても憎き横河法師、上下四五百人、人を助くる法師の身にてありながら、落人と見て我こそ功名せんずと逆木引いて待かけたり。

義朝。一重に運の極みの致すところなれど、無慙ともいとほしとも、此義朝には只一人の大伯父、陸奥六郎殿には首の骨したゝか射させて哀れ果敢き御最期、六郎殿には既に六旬の御齡、八幡公の御遺子には此御一方を見參らするのみなりしが、かゝる不慮のわざわひにむざく討死せさせ申したる勿體なさ不孝の罪を今ぞ知る、彼保元の戰に、義朝こそは一人父に離れて官軍につき奉りしが、父に弓引いたる報いが、果ては淺ましくも我と我手に懸けて父を失ひ參らせし大逆道

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今又六郎殿の首見奉るのみか、矢表に向ひたる二男大夫は右手の膝の口をのぶかく射させ、既にあぶみも踏み兼しが父の心を落さじと、さあらぬ體にもてなし、辛くも龍華の麓には出たれ。

延壽。御方にはあはれ一騎當千の兵士(つはもの)と聞き及びし後藤殿、金子殿、熊谷殿は御供には召具し給はざりしか。

政家。それも大將軍の思召の旨にて、重ねて御返報に再び旗上げせんずまで野にも伏し、山にも隱れて命健固に永らへよ、仇死せんのみ武士の花にてはなしともかくもとの御諚に、いづく迄も我君の御供とはやり切つたる兵士も力なく己が在所々々へ引返し、僅に八騎となつて下りしが、不破の關は敵固めたり、小關にかゝりて小野宿より海道を右手に取つて出づれば雪は愈々深く、暗さは暗し、途次(みちすがら)馬にも叶はねば鎧(よろひ)、物の具掻き捨て主從八騎かちはだし。

延壽。木幡の里に馬はあれどもと詠ぜしはあはれみやび男が物好く、これは合戰の世に痛ましき御物語、勝つも敗るゝも時の運とこそ承りて候へど佛神三寶も捨てはてさせ給ふかと世にも賴り細き御ことに御座りまする。して御子達にはいづれへ。

義朝。存ずる旨もあれば悪源太は山道を攻め上れ、朝長は信濃路へ出てゝ甲斐信濃の源氏共を催し來れと其儘道より使はせしが……。

延壽。佐殿も今度の戰に加はり給ひしか、して、もう御いくつにならせられました。

義朝。兵衛佐如何に心は猛くとも十三といふ少年、篠原堤に馬睡りして路次より姿を見失ひたるがい

づれへやら參りし、平家に生捕られんもしたらんには唯々しき大事、すぐさま金王を見せに遣はせしが今以て戻らず。

延壽。いしうも遊ばされし、おとなりとて中々思ひもよらぬ御振舞の程驚き入る外はござりませぬ。

政家。御よ、承はられよ、さても今度佐殿の初陣の御功名と申し、天晴父君の御骨柄うけつぎ給ひし頼母しさ、十三とは誠に少年の御齢なれど、嘉例めでたき源太産衣の鎧讓り申され、白星のかぶとを頂かれ、父君の御馬にひきそへ扣へたまひし御有様の勇ましなんど、敵なだれ入るよと見るまゝにおめず臆せず打向ひ給ひ敵方にもさる者と聞えたる者の首二つまで得させられし目覺しさ。

義朝。我子ながらも兵衛佐は行末頼みある骨格の者よ、何を申しても今ははや歸らぬ我世ぢや　さりながら過し保元には西八條殿へ召されて守護し奉りし身が、此度は引かへていまはしき朝敵の名に沈み果てなん口惜しさは、六孫王よりして七代、此義朝が弓矢たばさみ禁裡を守護の身にありながら、如何なる天魔に咒はれしか、おめ〳〵信頼といふ大不覺人にたばかられたる義朝が一代のあやまり、氏の諸神、祖先尊靈の御怒りの程もおそろしゝ。

政家。殿、さのみは思ひ落させ給はぬもの、一旦朝敵の御名こそは負ひ給へ、又も時しる春に出て給はゞ、御本懐をも達せられ忠勤を勵ませ給ふことも叶ひ候はんを、まづ其迄は大事の御命某つき

添ひ申し、如何様にも守り參らすれば暫しが程を忍ばせおはしまし、御一門の爲一重に弓矢八幡の御神助を仰がせ給へ。

延壽。妾は女の身の甲斐なけれどかゝる折こそ御宮仕への本意をも遂げ參らせたけれ、落付かせ給ふ御行手ははたいづれぞとも、暫らくは此處に御座ありて靜かに春を待たせをはしまさば如何あらん、妾命に代へましても必度殿の御上は守護致すことて御座りまする。

政家。天晴男恥かしき御こゝろばせ、重代の御恩顧被りたるさへ、其日の風に旗色かゆる二股武士の多き世に、女性の御身として此健氣なる御詞を承る、政家ホトホト感じ入りました、なれど何を申せ人目うるさき宿場の事、思ひも寄らぬ難儀の振り懸らうも知れねば明くるをまちて一とまづ我君を奧の方へや落し申さんかと。

延壽。長田殿へ。

政家。それもそれがし一人、只た今程思ひ附たる急場の思案、いづれは皆とも談合の上。

（此時侍女一人瓶子、盃を持ち出づ。延壽酌を取る。侍女退く。）

（雪下しになり、花道より吹雪の中を金王丸に漸う扶けられて中宮大夫の進朝長、重き手負ひの體にて出て來る。）

金王。若君、御心確かに持たせられい、大炊が館も早あれに見えて御座りまする。

朝長。嬉しや、父上もあれにおはさん、今生での御對面はよも叶はじと覺悟して居たれど、いまだ朽せぬ御緣てあつたか、去りながら御仰せの旨をもはたさず、朝長道より暗々引返しゝと聞召さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ばそも如何ばかりの御腹立、金王、如何致したものぞ。

金王。徒らなる御心づかひ遊ばしまするな、某必らずよき様に申上げませうなれば、其儀は御心安う、某とても佐殿を尋ね出し參れとの重き御諚を受ながら斯く仰せにもとりて立歸らねばならぬ仕儀になりました、何かを申すも此處は往來、人目を忍ぶ今の御身に入らせられますれば隨分御急ぎなされませ

朝長。忝じけなし、金王、我若し御身に逢はざりせば、必らずや雜兵ばらの手に生どられ、我身一つの恥のみか父にもこよなき憂目みせ參らさうずもの。

(行懸りて門に至る)

金王。こりや、誰方か御坐りませぬか、金王只今戻りまして御坐りまする。

義朝。(盃を含みつゝ)何、金王が戻つたと申すか。

政家。左樣に見えまする。

延壽。(酌を取りつゝ)誰ぞ居やらぬか。

(重成下手の枝戸より出て來り、平伏し、)

重成。金王殿が戻られましたとな。

義朝。早う開けて遣はせ。

重成。ハ、ツ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（門が開く、互に貌を見合せて、）

金王。佐渡殿か。

重成。金王殿、よく戻られた、此大雪に嘸かし難儀の事で御坐つたらうに、殿には先程から殊の外其方の歸りをお待ち兼ね。

金王。されば、もそつと早く戻らう處、目も開けられぬ吹雪に播き暮れて、先つ日には折々我君の御使ひに立ちて案内しつてる此青墓の宿をいつか路次に違ふて途方もない方角へ迷ひ込み、既に平家の奴原に押取かこまれた處を漸う切り拔けて參りしが……我殿には御安泰でか。

重成。オヽ上乘ぢや、したがあぶない處であつたなう、なれど怪我もなかりしか。

金王。何の雜兵ばらの百二百、手にも足らぬわ。

（金王目配ばせして朝長が内に伴ひ入る。下手に畏まり、）

金王。殿、金王只今戻りまして御座りまする。

義朝。大儀であつた、して兵衞佐をば何と尋ねあて參つたらうかな。

（後ろに朝長のあるに心づききあらぬ體に、）

金王。さればに御座りまする、小關より小野宿の方隈なく尋ね參らせしかど其と思ふ御影も見えず、今は浮世に忍ぶ身をあやうしとは知りながら一里ゆき二里歩く森山の宿に立戻りてこゝかしこ御行衞を尋ねる內、計らず下人共の話を耳に致せば、先程十三四かと覺ゆる若武者の清げに扮

裝たるが、只一騎馬に任せて心細げに落行くを所の者共不審を狹み、『今夜馬の足音しげく聞ゆるは落人にやあらん、いざ我生捕つて六波羅へ差出し存分の恩賞に預らん』と各自に腹卷おつ取つて、打かけ長刀柄長くおつとりのべて走り出て馬の口に取付き落人を馬より下し奉らんとするや、馬上の武者はヒラリ身をかはされ、拔く手も見せぬ太刀の刃風に向ふ奴輩二人迄水もたまらず唐竹割にせられし早速の手業、宛然天狗などのやうにてさうなく近よるものなきを見定めて悠々安河原指して落行きしと承りしが誠に思ひ當る佐殿の御上、是ぞ實に髯切の奇特と感に入つて御座りまする。

義朝。さては若者は首尾よう落延びたと申すな、いしくも打果したり、義朝斯程に流落するとは云へまだ弓家の守護神家門を去り給はぬと覺えたり、有難し、有難し、我百人の子は持つとも賴朝一人にはいかで替へん、惡源太の勇はあれ、彼は必竟東の野夷、其勇や唯勇なるのみ、我こそは一旦朝敵の名に落ちて身を朽ちさせんずとも兵衞佐あらん限りは心強き限り。

延壽。さらば今にもあれ、これへ御越しに御座りませう、不思議の御運の御身を離れぬ兵衞佐樣、これ此上ともに御身に恙あらせぬは必定に御座りまする。

義朝。さもあらんには心安かれど……、金王、そちが後ろに扣へさせたるは何者、殊に重手を負ひたる容子、遂に捨てられ居たる我郎等の蜚にてもありつるか、兎角勞はり遣はせ。

（金王の目にて制せんとするを、きかず）

朝長。父上、御諚にもとりて云甲斐なくも朝長、是迄戻りまして御座りまする。

義朝。何朝長と申すか、我子大夫は先きに信濃路へ向けて打立たせしが、して何者か朝長と申す。

金王。恐れながら其御とがめの段な私より申上まする、若君には兄君悪源太殿と殿の御上意を被られ深き雪路を信濃へこそは打立たせ給ひしが龍華にて重手は負はせられたり、山路の吹雪に凌がれおはしまし、御身も絶々に悩ませ給ひしを麓の里にて折よう某参り合はせ、兎も角一時を是迄御供申したる次第に御座りまする。

義朝。重手とていかばかりか、そもさばかりの吹雪の激しさに臆したるよな、とも軍に倦みつるか、今朝より數度の合戰揉みに揉んで敵をあれ迄引退けたる悪源太とてつかれし人馬に呼吸もつがせ敢ずいまだふみもみざる飛彈の山ふかうさしてそちと共には打立たざりしか、大夫、そも如何程痛手に悩めばとて父の語に背き兄を置きてよくもこれ迄引かへせし、扨てもいみじき功名したりつるよ。

朝長。御叱りてはあれど、安きを求めにとは御情けなし、如何にも是迄支えられ参りしは重き御諚を背きし朝長一期の過り、末代の不覺かは存ぜねど……

義朝。やあ舌長し、云ふな大夫、あはれ幼くとも頼朝ならばよも斯程迄云甲斐なくばあるまじきに、いみじき子持つて我もよき功したりと人に褒られんずぞ、弓矢たばさみ軍に向ふが藝なる武士の家に人と成りながら左程も命惜しくば永く此館に留まりて傷養生など勝手に致せ、父が代り

て打立ん、もはや頼まじ、頼むまいとよ。

朝長。御不與は去ることながら、私が所存の程一とわたりは御耳にかけさせられい、一旦大事の御諚を身に帶びながら 矢傷に惱みて路次よりおめ〳〵引かへすなどゝはあるまじき弓矢の恥と御仰せあれど、大崩れにて膝の口をのぶかに射させ既に馬にも叶はざりしに、うたてや折重なる不幸には陸奥守殿の御別れ、身も世もあらず乘替に掻き乘せられて、憂き近江路を信濃の國さしては落行しも、伊吹の雪下しには一身ならず凌がれたり、創散々になりて、心のみは徒にはやれども身體の自由を失ひ、引くに引かれず、行くに行かれず、もしかゝる處へ敵や押寄せ、名もなき新兵輩の手に生擒られて功名せられんずならばそれぞ誠にゆゝしき恥辱、父の御名をけがし參らするとの悲しさに、自害してや果てなん、去りとも首は京にさらされて、あれこそ義朝が子よと口さがなき者共に沙汰せられとの口惜しく兎角案じ煩らひ居りし處天の與へか計らず金王に廻り合ひ、力なけれど命の際に今一目父上をも見奉り、御安泰の御樣拜して後せめては今生の御報謝に御はかせの露とも失せなん事の望ましさにうしろめたくも是迄は引きて候ひしが、まして創養生せんとにも候はず、總て武士は戰場に臨みて命を思はぬものとこそ聞きて候へ、何條命の惜しき事候はん、早々此朝長を御手に懸けさせ給ひて御憂ひのきづなを絶たせ給へ。

義朝。いしくも申したり、汝は兄弟(あにをとゝ)にも似ぬ大不覺の者とこそ思ひ居たりしが、誠に義朝が子なりつ

るぞ、如何にも望みに任せんず、其に出てゝ心靜かな念佛申せ。

朝長。御許し忝じけなし、其御詞こそは只今の身に何よりの御はなむけ、心も淸々しうなりました。

（此間に延壽の母大炊、奥より出て來らんとして此光景に打たれ襖の陰に暫くためらひ居る）

義朝。よき覺悟ぞ。

（大刀拔き拂つて立ち上る、朝長椽にいざり出て西に向つて瞑目す。大炊堪り兼ねて奥より轉び出づ。）

大炊。殿、暫らく待たせ給へ、（延壽に）まアそなたも其方お傍にありながら之を御留めも申さいで。殿そりや御胴慾と申すもので御座りまする、承はれば御身は重き痛手に煩はらせ給ひ、健氣な御覺悟あつて是迄御さがりありしものを、一言の御慰めもなく剩つさへ暗々御首打果し給はんとは、餘りな、妾は只一人の娘を何にも替へずいとしう思ひまする、幾人持たせ給へばとて御慈しみに左右のあるべしとも存じませぬ、是は餘りに御情けなし、和子樣の御命たつて妾に御預け下さりませ、御傷養生必らず充分にさせ參らせ、たとひ如何樣なる野山の果にもかくまひ申し、時節を待つて世に出てさせ給はんやう計らひまする。よしそれともたつて御命召されたき思召ならば詮なきこと此孀からになされて下さりませ、現在和子樣の御憂目を見るに堪へませうや、是孀が一生の御願ひに御座りまする、ともかくも一時の御命を……サ殿、老先知れるとしよりに辛き目見せて下さりまするな。

義朝。女性の脆い情けから朝長の命强てと云はるゝ、義朝とて肉身親子、父が子を刺す、殺さぬが情

けか、殺すが罪か。

延壽。殿、老いたる母の心の裡も御察しなされませ、子を思はぬ親は親でなく候ふものを。

（愁ひを含んでうつむく）

義朝。心得てある、何の、大炊、只今のは術ぢや、餘りに臆したれば勇ましめん爲の當座の强意見、氣に懸けな、延壽、嘸かし迷惑にもあらんが大夫をば悉皆賴み申たるぞ。

（心ふり氣に延壽を見る）（語氣和やかに、）夜も更けたり、いざ大夫には奥に參りて少時の間なりと心靜かにまどろまれよ。

大炊。さあ御座りませ、はてまア一緒に御座りませと申すに。

（大炊、强いて朝長を引立てゝ奥へ伴ひ行く）

義朝。風の前の燈火にも似たる我子の命一夜の嵐に先なはれ行く落葉の果敢なきにも似たるよ、ても我世にありせば花やかなるべき齡なるを、痛はしき有樣かな、父も斯くして遂にゆくか。

（淚潸然として深き思入れ、侍する將士も言葉なし。……舞臺靜かに廻る）

第三場　夜叉御前居間　（第一場同前）

（上手に朝長水色の寢衣、臥處に坐し、脇息により居る。傍に夜叉御前、人形を抱いて坐り居る。孤燈夢の如く淡し。）

夜叉姬。兄上、兄上には先刻にから私があれ程云ふてのことをちつとも御聞き遊ばさぬのぢやな。

朝長。滅相な、此通りちやんと聞いて居まするに。

夜刄姬。ぢやかて、ついあい〳〵とから返事ばつかり、そら耳走らして御出でぢやもの。
朝長。何の、是は又迷惑な、左樣な事は有りませぬぢや。
夜刄姬。噓々、そんなら先刻にから私がいふたことつい今云ふてのけて御覽なされや。
朝長。賢こい事いはるゝよ、ォヽ何とやらてあつたか。
夜刄姬。それ〳〵御覽なされ、根つからおぼえては居やしやれぬぢやものを。
朝長。夜刄殿　御免あれ、御身は幼なうおはせば何事も知られまいが、此兄の耳には何云ふて下されても聞えませぬぞや、今日が日初めてまみゆる妹御、まみゆるは初めてなれど御身のことは疾から聞き及び逢久しう思ふて居りしが、逢ひ見る此身の淺ましさ、中々思ひ出の種なれば、今はようも承はるまい、凡世の中の人の歎きと云ふ歎きを身一つに受けても、よも斯程にはあるまじいものを。
夜刄姬。其事ならば妾もよう知つてぢや、母樣が仰しやれた、父樣は軍に敗けて逃げて戾らしやれたのぢやといのう、兄上口惜しいでナ、旦暮父樣の芽出たき御開きを母樣とも〳〵觀音樣に願ふて待ち詫びたに、母樣に敎へられて日に十遍づゝ稱ふる名號の……觀音樣も夜刄のいふ事を聞いて下されなんだか、こがれて居た父樣には御目に懸れても却つて悲しい、妾も今から父上の御供して戰爭とやらに行きたうなつた。
朝長。何を云はるゝ、一女童が鎧、鉢卷して戰さに行かうなら、人が何ぼう笑はうぞ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夜乃姫。おゝ笑ふとも大事ない、可笑しくば笑ひたい程笑へ、兄上、情けなくはないのかいなァ。

朝長。口惜しうなうてか、此胸の裡は炎えるやうぢや。

夜乃姫。さらばぢやて、妾も戰さに行つて兄上の敵、兄上に矢射向けた憎い平家の武士(さむらい)に一太刀むくいるのぢや。

朝長。忝じけない、夜乃殿、御芳志は死んでも忘れぬ。

夜乃姫。喃、兄上、兵衞佐殿は十三にならせられしとや、妾とは只だ一つ違ひの兄上なれど、男にてましませば幼なしとてもゆゝしう父上の御供して此度の戰にも趣かれ、敵の首をも數多舉げられ、功名手柄たて給ひしと聞く、妾も男に生れ來たらんには佐殿にもまくまじきに、甲斐無き女の身にはなど生れ附きしやらん、母上も悲し……

(涙にくづるゝ。延壽此時奥より藥碗もちて出て來り)

延壽。若君には未だに御寢なりませぬか、殿にも甚の御勞れに、はや御熟睡に入られました。オゝ、夜乃殿は此處にか、まだ臥床(ふしど)にも入らで、藥末や小菽はどうしてぢや、兄上の御越しなされたが嬉しいさうな、したが御惱に障らう程に餘りおうるさうはさせませぬものぢや、さ、奥へ行つてやすみや、先刻から祖母樣がそなたを尋ねられて居させられたぞや。

(奥の方にて侍女の聲、)

御姫樣はそれに御坐りますかちやつと御越なされませ、祖母樣が御召しに御座りませ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。

延壽。それ見や、呼んで居させらるゝ、早う行きやいなう、楓が困うじて居やう程に。

（夜叉御前名殘引かるゝ風情に立上り、しほ〳〵と坐を退く。延壽見おくりて）

延壽。ホヽ御覽なされませ、年は重ねましても女子共や老人の手にのみ甘やかされて育ちますれば物のいはけもなう。

朝長。何の、中々以て男恥しき心ばせ、男とてはた女とて父君の御血を分けさせられたる者にいづれ恐はなきものをいかなればば此朝長一人宿縁（ゆかり）の數に漏れて斯程に運拙くは生れけるぞ、兄上義平の勇もなく弟兵衛佐の手柄にも劣りて暗々朽ち果てなんず口惜しさは、せめて最期の一と合戰によき敵と引組んで思ひのまゝの駈引せばやと思ひ居たりしがそれさへ叶はぬ望みと成り果てしよ。

延壽。御無念さの程推しはかり參らすれば妾迄もたゞ涙にくれまする。

朝長。さても思へば身はかげらふの生きて生甲斐もなかつし身なれど我なき跡迄弟にも劣り果てたる痴（しれ）者よと父上の御不興あらうず御恨めしさ斯う申さば誠幼きものゝ申事のやうなれど兵衛佐にだに劣れりと御覽じつけられつるが此朝長は口惜しいぞとよ、彼の世に參りて母上に何と面向けがならうぞ。

延壽。御道理に御座りまする、それは誰しも弓矢とる者の意氣地、さはあれど只今は只何事の思しや

らせも御無益、御心靜かに之に御忍び御座あつて御身を恙がなきにかへらしめ給へ、それぞ父上への第一の御孝養、强ち今日のみの御合戰ぞや。

朝長。何と謂はるゝ、此朝長に倘命を賴めとか、聞えぬ事を承はるものかな、女性の情けとは云ひながらさきに大炊殿のなすじ留め立てさへなかつしせば、心安う父上の御刄の露と消えたものを今は恩が中々恨めしいぞや。

延壽。御詞ではあれど過ぎしはよしなき御繰言。

朝長。聞かれよ、御、弓矢の道に捨てられたは申すも恐、凡てにとりて世に朝長程物思ふものはあらじ、取分けて此身をいとほしまれし母上には去年三月別れ奉り、今父上はかゝる流落の御身の上、兄弟も皆散々に行衞を失ひて、今在る此身が明日の運命もはかられぱこそ、御、我一生の賴みあれどう け引いては下さるまいか。

延壽。甲斐なき女の私にて叶ひまする事ならば。

朝長。御はいくつにかならるゝ。

延壽。すがれに間もない七ッ程になりまする。

朝長。あはれ今母しお有さば恰度御身の年榮思ひなしか母上によう似させられた御面差、そゞろ懷かしき心地する、喃、御、武士の子にありながら未練らしいと笑はれまいぞ、年は幾才になりても母は戀しいものな。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

延壽。悲しいものに御座りまする、餘りに我子をいとしう思ひ過されますれば、一人の母故には子は身も心もなきものに致しまする、身は靑墓の長者が愛娘と生れ、人數多にかしづかれ、憂き思ひも知らで豊かに過したる年月、其一筋なる幼な心こそは何にも替へぬ戀しいものに御座りまする、十七と申せし春、ふとせし折柄はからず御父上にまみえ參らせ重なる御慈しみを受くる身ながら仕へ參らするは只空蟬の軀のみぞ、此魂一つこそは誰にも許さじ、よし粉黛に形はいろどるとも胸の裡こそは正身の佛性よ、黑染の色なき袖を心にしめて、靈(こゝろ)の操は佛に誓ひし延壽、世にこれ程の幸福を身にうけながら、可笑しきすね者よと世の人は笑ひも致さめ、殿の御志深きを見奉れば、勿體なきことゝは知りつゝも……心に濟みませねば……

朝長。心に濟まぬ由ありとは、ては我父上より先きに御身に契りをかけつる人にてもありつるか。

延壽。滅相な、何て其樣な譯が御座りませう、十七と申せば早おとなの年、世の娘子ならば、紅白粉に憂身をやつし、いづれ〳〵には殿御の品さだめなども致しませう年頃を、竹馬よ蹴まりよと侍女を相手に男のやうな遊びばかり、たゞ面白い可笑しいで苦もなく過しまする内 殿に宮仕へ致す身となりましたも夢現、嬉しいとも悲しいとも感じませず、母や附人共から押し坐えられた人形のやうな取扱ひばかりされ、他愛もなう過しまする月日に關守なく、つい身に儲けしがあれなる夜叉姫、此時程染々我身を感じたことは御座りませぬ、夕をこむる秋霧のかつしりかつ散じてあるべしとも覺えませなんだ山や水や人の形が一度に瞳を驚かせまするやうに、知ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るれば扨も淺間しき身に御座りました、嬉しいとも悲しいとも思はいで、たゞ此世におはすは殿と母ばかりとのみ賴つて暮しました月日が今更に戀しう御座りまする、知つても知らいでもひとしく浮世の渡らるゝものならば知らいで夢と過すに上こす幸福は御座りますまい、泣いても返らぬ悔いをせめて慰めの御佛仕へ　斯くても思ひ捨てられぬは母故の暗に御座りまする、……是はしたり、私とした事がついした言葉のはしから御尋ねもなき長物語、心の奥底御耳に入れ、はしたなき女と御さげすみ遊ばされな。

朝長。 床しき心ばせを承はるものかな、いかに、朝長の母となつては給はらぬか、我幼なうしてより身かよわく、常は兄弟の遊びにも洩れ、母の膝下にのみ親しみて日影にだに疎き深窓に生ひ育ちしが、今しも誠、其昔のうらなつかしき心地する、實にや御法にも説かれつる、一切の男子をば生々の父と賴み、萬づの女人をば生々の母と賴めとは今こそ思ひ知らるれ、一樹の蔭に袖すりあふも他生の緣ぞと聞くからに、我なき跡も見續け給へ、是なる御經は母が臨終の際に、我を思ひ出でなば取出てよとて筐みに給はりつる一卷、肌の守りと片時も身を離さで持ちたるが、我亡母の一念か、今日しも計らず、こゝに御身とまみえて、今生の緣を結びつる不思議さよ。受け納め給ひて我とも見給へかし。

延壽。 身に余る御意の旨、承りまする、必らず後の世の御手向、御心安う思召されませ。

朝長。 忝じけなし、此世は假の宿と聞く、假の姿を何かは賴まん、一夜の契りも百日千夜にも勝りけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るぞや、頼もしき誓かな、嬉しき法の道しるべ、念佛申さん、今は早や立ち給へ。

（延壽朝長の面をじつと見詰む）

延壽。さらば御免下さりませ、冬の長夜も明近う覺えまする、暫しなりとも御心靜かに御寢なりませ、妾も佛間に參り、御佛への御手向、御經誦し參らせうず。

（立上り、獨りうなづき上手の小部屋に入る、正面より見たる障子あけてあり、おもむろに經机に對し、香をくゆらす）

朝長。一時のぶれば一時の思ひ身を萎やしむる、世にも愚かなる煩惱のきづな次第に身内に食み入るかや、拙なき妄執ぞ、拂へども消え失せぬ甲斐なさ、扨も薄き緣なりしな、親子は此世の契とのみ聞きつれば再びあの世に誰をか見ん、誰をか待たん、遙けき冥途の暗路を心細々消えがてに辿る我身の薄れた影が我と目の先きに浮ぶやうな、よしなき念ひは斷たて叶はじ、迷ふまい、亂るまい、たゞ最期の一念で、思ひは長き恨みを引くといふ、我れながらおくれたり、行手の道は一筋ぢや、（氣をかへ）父上にも御寢なりつるか、郎等共にもさぞかし疲れて深き眠りに入りつらん、今の程ぞ、（膝許の刀をとりて二三寸鍔もとをぬき寛ろげ）ても淺ましき面やつれ、斯る夜に斯くて遂に行くべしとは、期せざるしよ、思へば十七年の短からぬ月日、何の思ひ出て、只水の面に淡き月影ゆらぐと見て、あはれ彌陀如來、迎へさせ給はらばや、

（覺悟の刃を突立てる、それと氣配にさとりて延壽、珠數を手にせるまゝ走りいづ。）

延壽。若君には疾く御生害ありつるか、御痛はしながらとゞめ參らせん術もなく、みす〳〵御覺悟を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

存じながら、……ともあれ殿に、必らず其迄に御心をたしかに持たせ給へ。

（立上らんとする袂を押へ、）

朝長。暫らく　我自害は存念の上なれば、　せめては此上の御報謝に首打ちて給はれ、……情けぞ、早々打取りて父上の見參に……

（奥のふすまより義朝獨り悄然とあらはる）

義朝。いみじき覺悟、我子ながら天晴出來した、世に若き子を先立たせて嬉しき親やある、必らず無情の父と恨んで呉りやるな、其方の母にも面目なし、面かげなら、素直な心ざまなら、似たとは愚か爪二つ、兄惡源太、かつは兵衛佐の賴もしきにもまさりて其方一人の身をいとほしいものに思ひ居りしぞや、强いて命を望みしも、たち難き我恩愛の絆を絶えせんが爲、待てとやがて父も……

朝長。勿體なし、……父上にな……何の恨み、只御先途をも見屆け參らせず……此儘先立ち行く不孝の罪……御、必らず父の御上、我に代りて、賴みますぞや……。

（延壽涙に掻きくる）

朝長。時も移る、今は云ひ置くべき言葉もなし、いざ早……

（促せど左右延壽立ちわづらふ）

義朝。太刀を是へ、父が代りて介錯して得させん、とはいへ可愛や、我故かゝる非業の最期、汝が母

の恨みもいかばかり、可惜蕾の武士を散すことか、今は世になき母の形見には其方をのみ見るべかりしを……

朝長。父上……恐れながら……云ひ甲斐なくましますぞや此期にのぞみて無益の御繰言、此上は誰にも頼み參らすまじ、さらば是にて御暇……給はらん、御、最期の念佛申して給はれ。

(延壽さしよりて手にせる水晶の珠數のはしを握らす、朝長、打ふるふ指先に辛うじて數とりの珠をつかみ)

朝長。嬉しき導きよな。

(嫣然と刄に伏す)

(此時政家、金王丸、義宣奥より慌たゞしく走りいづ、其跡に續きて涙あやもなき夜叉姫走り出てんとするを侍女達に引留められて袂をしたてらる、金王、つと死骸の傍によりそひざま)

金王丸。若君、御情けなし、君幼なくましまして竹馬、搊弓の御對手は申すに及ばず、片時たりとも御傍離れず付き添ひ參らせし某をなど一人置きては行かせ給ふぞ、命常なき戰の場にも死なば一緒と仰せあらざりしや、御約違へさせられし御こゝろのすげなさ……

義朝。嘆くまい、金王、運命(さだめ)ぢや、さてもいかなれば堅田の浦にては大伯父陸奥殿の御首を見奉り、又青墓に落さすらふて、我子を先立つ、義平、兵衞佐の行衞も知ず、さしも一門を誇りたる義朝が、子供數多引具して、殘んの雪に朝日かゞやく内裡の庭、晴の物具かためさせて駒の頭を立てならべし、きのふの勇々しかりし有樣は夢か、けふは見るかげもなき落人の身となり果てゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

賴む子等には引はなれ、身は命ばかりを嘆きていづこへか向はん、いまだしも行衞を失ひつるはさりともの望みあり、我朝長は又いつの世に父と呼ばん、我ながら義朝が不覺の涙、政家許せ予故ぢや。

政家。御心中を推し奉れば某迄も胸がふたがりまする、去りながら、殊に大事の御折柄、殿これに御忍びの由早知りつる者のありて訴人に及びし由、ゆめ御油斷あるべからずいかにも只今當所を御開きあつて、一トまづ某が舅の方へ御立越あれ、兎角の御思案な其上の事、一刻も御猶豫ある折に御座りませぬ。

義宣。鎌田殿の御計らひ一應は然るべけれど、長田殿を賴ませらるゝは如何ぞや、殊に彼は大德人にて世を窺ふものなれば、身にかへても我君かくまひ申さん條、誓ふて受引く可きや。

政家。某とて、人の心も賴み少なき昨日今日だゞ此儘の姿にて主君を守護し參らせ行く、舅の間にてはあれ、馴染も重ねず殊に思はくの程なんど計り難けれども、今となつて急場の思案、一時のがれの分別にすぎ申さぬ。

義朝。疑はゞ神佛をも疑へ、我娘のいとほしからぬ父やある、我何程此有樣に詫びぬればとて少しが程の恩賞などにいかで心の搖ぐ者にてやはあらん、殊に政家には假なれど父、今こそ世に隱れてお住め、氏は爭はれぬ忠致親子の者何條さる腹ぎたなき所存やあらん、疑ふは僻心にてあるぞとよ、去りながら今聞く處によれば既に訴人しつる者ある由、殊更海道は宿々通り得難きに是よ

り内海へは如何にして…… 政家存ずる旨やある、申せ。

政家。されば其御道すがらのことに御座りまするが某も……

延壽。妾が叔父に鷲津の玄光と申すは此わたりに隠れもなき大剛の者、只今にも之に居合はすることならばあはれ斯る折柄屈竟の御力ともなりつらんに……

政家。音に聞こゑつる、鷲津殿は御身の叔父御か。

延壽。母には此世に一人の弟に御座りますれど、大酒の上に心様あらましく、母も犬狼などのやうに强うきらふて居ります故、常から野山を住居のやうに心得、めつたには戻られも致しませぬ。

(此時にて此時、)

御存には預らねど鷲津の玄光、只今それへ推參なし奉れば御前然るべう御計らひ下され。

(奥の槙より巨大なる僧形あたりも憚らぬ氣に顯れ出づ、)

政家。噂の影さすとは、扨も玄光法師、よき處へ。

義朝。玄光と申すか、只今の折柄、推參祝着致す、其方に早速の賴みながら野間の内海へ落行かんず忍びの道は……

鷲津。皆までのたまはすな、御大將、委細は奥にて承り及ぶ、刻下の御進退、たとひ平家の奴原、火水をなして迫るとも此玄光の名を聞かば左右なく近より得るものあらじ、何事も充分に御賴み候へ、受引申さん、某如き見る影もなき荒法師、かゝる折柄にてもあらざりせばいかで殿の見

參にも入り、御用をも承り申すべき、不思議の仕合せや、直様河船へ御越あれ、某柴船に事寄せ、内海迄必度御安泰に御供申さん、方々も御心安く思召せ。

政家。世に賴母しき言葉哉、如何にも殿の御上、賴み申したるぞ。

義宣。一難去つて殘る一難、殿こゝをば如何に、敵は早葭叢の彼方迄近くつめけると、某御跡承りて防矢射るは安けれど、又もや御行手に何さま、不思議の出で來べうも知れず、…… 鎌田殿こりや何とか開きのつけやうは、……

（佐渡式部重成、勇々しき武裝にて、庭表よりおどりいでざま）

重成。殿、それこそ某の覺悟極めつる處、重成に仰せ候へ、鷲津殿がけふ初見參の御奉公にも劣るまじ、いかにも某一人こゝ承はつて防矢射つけ申さん、殿許させ給へ、是ぞ最期の君への忠勤。

義宣。志は去る事ながらいまだ春秋に富む其齢にて、いかで見殺しにはなし得べき、殊に故郷には年老ひたる母も心細う待ちますと聞く、此義は思ひ止り、某にかはりて殿の御先途見屆け給へ、某こそは年にも不足なきものを踏み留まつて切り死せうぞ。

義朝。哀れ、義朝か郎等にはいづれ愚はなかりけるよ、政家何といたす、年少き重成に命すてさせて義朝は何と存生へやうぞ。

重成。こは我君の御諚とも覺えず、斯程世に住み詫び果て給へばとて御心迄弱らせられしか、甲斐なき御心ざまや、今より我君とも賴み參らせじ、幼なきより御傍近う仕へ參らせ、父の世になく

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なりし後はおそれ多けれど君を父上とも……見奉りて一向他念なき御奉公はげみしを……

義朝。許せ、重成、さらば行け。

重成。ハ、ッ、忝じけなし、さりながら是ぞ今生の御名殘　君、つゝがなうましませ。

（貌を見かはして暗涙を呑む）

義朝。其方は何歳にかなる。

重成。二十八歳に相成りまする。

義朝。またも我故に可惜若者の命を失はすか、是非もなき宿業ぢや、なれど死に行くにまして跡に留まる義朝の心を思ひ見よ、重成、義朝は一日が中にかへ難き子を二人迄も先立たせつるぞ。

（奥の方急に騷がしくなる、重成キツト面をあげ

重成。さらば我君、方々にも

（行かんとす）

義朝。重成、最期の引出物ぞ、隨分めざましき働きして名をとゞめよ。

（太刀を渡す、重成涙に咎なくたゞひれ伏して太刀を拜す、振ひ立つて庭手の方より奥をさしてかけり行く）

鷲津。兎角云ふ間に時うつる、早しのゝめにも程近し、とく／＼御用意あつて然るべし。

義朝。さらば參れ、我も追付行かん、其方達は一先づ先きに參りて船の模樣を見屆け參れ。

（玄光をさきに、金王、義宣、政家從つて入る、引違えて慌たゞしく召仕楓出て來り、）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

楓。御二方様には是に御出てに御座りましたか。

延壽。ハテ慌たゞしい其さまは、何ごとぢやちとたしなみやいなう。

楓。つい心がせきませて、御免下さりませ、實は、只今しがた姫上様の御姿を御見失ひ申して御座りまする。

延壽。何といやる、夜叉殿が見えぬとな、して。

楓。さればに御座りまする、姫上様にはひたすら大夫様の御別れを嘆かせ給ひ、此身も共に同じ道にと御身もあらせず御涙にかきくれおはせしを、祖母上様や私共がいろ〳〵となだめすかし參らせしに流石幼なうましませばにや少し御心の靜まりし御模様にて、御聞きわけ遊ばれし由、仰せられともかくも御臥床にうつし參らせ、今つかた　御寢ありしやとそと參りて見奉ればありし御臥床はうつせみの殻……私共大勢がお傍におつきそひ申して居りながら御申譯のない事致して御座りまする。

延壽。彼も是も定まつたる約束事とは思へど母の身も忘れてか、情けないことしてたもつたなア。

義朝。川筋のあたりに心をとめよ、必らず手ぬかりあるな、たとひ迷ひ出でたりともたかゞ女童の足、いまだ遠くは行くまい、出でゝ尋ねい。

楓。畏りまして御座りまする、そんなら御免下さりませ。

（楓去る）

延壽。殿、私にはどうやら姫がもはや此世にない者のやうに思はれてなりませぬ、うき事繁き此身の慰めには月にも花にも替へ難いたゞ一人の姫、それさへ失はれて何しに此世にながらへませう、まこと兄上の御別れを左様に嘆かばなど尼になりとも身をやつして御孝養は申さぬ、恨めしの我子や、母がなつかしうはないかいなう。

義朝。生死の定めもつかぬものを、愚かなる思ひ過しゝて身をそこなはれな、我も心は跡に殘れど日かげにうとき落人の身、明けなばことむづかしからん。

延壽。おゝそれよ、殿は今大事の御身、私の嘆きに御心亂すはあるまじかりつる事よ殿、御許されませ、たゞ縋りまつる守り佛の觀世音、大慈大悲の御誓ひ、一稱一念皆頼みありと聞くからに殿の御行手御安泰に、同じくは我子の上をも守らせおはしませ。

義朝。健固に暮せ、又逢はふ。

延壽。扨ても亦、いつの春に。

義朝。程も有るまい、追つけこの雪の消えん頃、去年の古葉の下萠えに青野が原の名もふさはしきうら若草の春日和、年もかはらば何ごともけふに、引かへて、樂しく語らはふぞ、……去りながら我子にはいつの春か……愚痴ぢや（涙を拂ひ）さらばぞ。

延壽。殿。

義朝。母にもよしなに御身より。

（奥に入る、延壽も悄然と立上る）

舞臺半廻しになり・荏叢を彼方に株瀬川の川瀬を見渡す、つなぎ捨てたる岸の柴船に玄光一人あり。

玄光。えゝ忙しい事かな、せはしい事かな、これてやつとどうやら宿に落ついたと思ふと又ぞろ用の湧いて……足元から鳥が立つやうぢや、夜船も出さいては叶はぬ、都は戰の巷と聞けど、こつちはねつからかゝはらぬ、年の内といふてもけふあすばかり、節季師走はたまらぬ程忙しいことぢや、えゝもう骨も皮も離れ〱になるはい。

（熊と聞えよがしにつぶやきながら、船の用意を終り、邊りに氣を配り、）

殿。

（ひそかに呼ぶ、物の影より義朝主從三人簑笠の忍びの裝にてあらはれ、急ぎ船に乘り移らんとするや、俄然、荏やぶの彼方にてときの聲あがりはげしくいどみ合ふらしき氣はひす）

「重成の聲」

しや物々し狼籍者、我こそは淸和天皇九代の後胤、左馬頭義朝、只今自害致すぞ、汝等代々に傳へて末代の手本に致せ、かまへて我手にかけたりなど功名爭ふまいぞ。

（云ひもあへずドウとばかり潮の如く押寄する鯨の聲、）

義朝。（暗然と涙を呑んて）ふびんや彼も逝くか、我も逝かうぞ、許せ、重成　詑は冥途て致す。

玄光。屆竟の折柄、サ、早う、とかうの御たゆたひは御無益。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（主從四人、後ろ髪引かるゝ思ひにて船に入る、騒がしき物音靜まる折柄侍女二三人　岸の彼方を走せ逆ふ幽かなる影、しのゝめの白きもやの中に見らる）

〔侍女の聲〕。姫様いなう、姫様いなう。

（岸の枯芦雪に伏して聲もなし、）

再び聲。姫様いなう。

（俄然、曉の靜けさを破りてけたゝましき水音）

他の侍女の聲。あれえ、姫様が……

（延壽、家の内より心も空なる如く轉び出て船なる義朝に近づかんとして、走せよるを玄光ともづなをときつと棹をとりて岸を突く、船岸を離る、延壽、雪の上にもすそらしどろに轉び伏しあとより追縋り來し大炊と相擁して泣く）

――沈默――遠き風の音――

――幕――

×　×　×　×　×

源朝長

源朝長は左馬頭義朝の子なり。中宮進に任じ從五位下に叙せらる。父義朝敗るゝに及び從ひて龍華越に至り、横河の僧兵と戰ひ矢其股に當る。矢を拔きて復た戰ふ。青墓に抵るに及びて義平と倶に義

朝の命を受けて兵を甲斐信濃に募る。義平既に發す。然して朝長重創を被り途に風雪に遇ふ。是に至りて苦むこと甚し。已にして發して復還る。義朝怒りて曰く、賴朝汝より幼なしと雖、此くの如く軟弱ならず。汝宜しく此に留る可しと、朝長曰く、兒創甚し、若し追ふ者の爲に獲られば必ず大人の羞を遺さん、願はくば大人手づから刄して後慮を煩はす勿れ、義朝曰く、吾れ、汝を以て怯懦となす、今是の言を聞く、眞に我子と將に是を斬らんとす。大炊、延壽、遽かに之を救ふ。義朝曰く、兒をして激勵せしむるのみと刀を納めて退く。義朝又朝長の臥處に至り、謂て曰く、汝自ら處する處如何、朝長曰く、固く心を決す、唯々大人の命を待つのみと、義朝遂に刺して之を殺し、衣を覆ひて出づ。大炊之を見て其骸を叢中に瘞む。後平賴盛の將、平宗淸墓を發きて首を京師に傳ふ。

平治物語
謠曲「朝長」を參酌す。

明治四十五年四月二十日

——木内錠——

マルゴ

一

マルゴフレキルは或夏の夕べ初めて、甘いまつはるやうな戀の恐ろしき罪惡に其身をまかして終つた。

多くの若い人達が互に手をつないで燃き火の廻りに踊りまはつてる時、彼女は森に通ずる靜かな道を相手の腕に凭りながら歩んだ。相手は背の高い嚴丈な農家の下僕で、クリスチャンネームはチアンヌーと呼ばれた。

ふとした事情で彼は生れてから此名より外に呼ばれたことはなかつたのだ。其は彼の出生の登記の處に簡單に「父母不明」と記されてあるからで。サンステファンの日、農家の小屋の下に誰か貧に窮して見向きもせずに捨てゝ行つたのを、見出されたのであつた。

チアンヌーは今、涼しい密のやうな木の葉の蔭に自分の腕に抱かれて顫へてゐる其美はしい少女を數ケ間も心に憧れて居たのであつた。

彼は職を求めに彼女の父の水車場へ來て初めて彼女を見た時如何に彼が惑はされたかを、道徳的の立場から記憶してゐた。——狂喜せる幻影のその回想が眼前から去らぬ樣に。

彼女はその時、日中の暑さに上氣して、水車場の微細な粉が空中に仄白く漂うてる中に立つてゐた。その束ねない縮れ毛を深き眠りから覺めたはかりのやうに振り亂して、彼女は露き出しの腕を頭の後で拱んで懶げに伸びをして欠伸した。白い齒並は狼の齒のやうに光つて、釦のはづれた胸當の下に處女の肉體は無邪氣に露はれてゐた。貴女は私の憧れてる通りな人だと彼は眞率に語つた。餘り馬鹿げてるので娘は彼を鼻であしらつて殘酷な冷笑をあびせかけた。けれ共その日から彼の生活にはマルゴの影がつきまとつた。彼は、數多の星が暗黑を出て優しく瞬く夜でさへも尙ほ絶叫して或るものを求めんとする野獸のやうに執念深くも見えたらう。マルゴは行く毎に彼に逢つた。その身の上に同情した。そして彼の涙を見、その無言の願ひに感じ、その大きな眼の中に閃く火のやうな意に動かされて、男の戀に答へるやうになつた。彼女は、穀物が水車場の中でつぶされて行くやうにしつかと、男の腕の中に終夜抱かれてゐる自分を夢見た。自分より強い男に服從してゆく已が姿を空想してみた。そして多くの娘達が井戸端で水を吸みながら小聲で話し合ふやうな妙なことをも知るやうになつた。

けれ共水車主の注意が嚴重なので娘は其夏の日迄待たなければならなかつた。

今二人は暗い道を歩きながら之等のことを話し合つて、何の氣もなく幾度か「幸福」といふ語を歌の合唱のやうに繰り返した。時々は云ふべきことがなくなつて終つたやうに、と云つてもつと熱烈な抱擁に身を委せることもし得ないで、唯默して歩むんだ。夜は柔く暖かつた。——半ば幕をたれ込め

た寢室の中の暖かさのやうに、新しき葡萄酒の大杯をひつかけた後の心持のやうに。

木の葉は絶大な平和のうちに靜かに眠つてゐた。石塊の間を縫うてゆく單調な溪流の囁きは遠く聞えた。昆蟲のさゞめきの間に、木々の梢に呼びかはす鶯の歌は響いた。

總てのものはかくれたる裡に生命を有して活動してるやうに思はれた。降るやうな星の光は空に輝いて、黑い樹の幹の間に迷ふ二人の姿を白く點出した。

「どうして二人は斯ういふやうになつたのでせう……チアンヌーさん、貴方は私にもう一歩進めろと仰有らないの。」マルゴは溜め息をつくやうに云つた。

「そんなこと、私にはとても……まあお聞になさい。私は御承知のやうな往來で拾はれたもので、此二本の腕より外に何も持つて居ない斯んな貧乏な奴にフレスキルさんが娘を呉れるものですか。」と彼は答へた。女は苦しげに身悶えして彼の唇に接吻してから打消して云つた。

「そんなことが何でせう。私は貴方を愛してゐますよ。御願ひがあるのですが……私を連れて去つて……」

斯くしてマルゴはセント・ジョンの夜初めて戀の恐ろしき罪惡を犯した。

二

水車主は娘が終日樂しさうに歌ひ狂ふのを見たり、平常のやうに裁縫もせずに房の窓に夢見るやうに坐つてるのを見たりしたとき、彼女の秘密を察する事が能きなかつたらうか。彼女がその離れてる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀人に指を通して熱烈な接吻を送つたとき、それを察して終はないでゐたらうか。兎に角彼は娘を恰も牢屋のやうに水車場の中に閉ぢ込めた。もはや戀も快樂もない。森の隅での夜の密會も駄目である。彼女が通りがかりのものと口をきいたときも、密と房の戸を開けて逃れやうとした時も、父は云ふ事をきかぬ動物に對するやうに娘を打つて、終ひには手を合せて床の上に膝まづいた儘動けないで身體中紫色の創痕だらけになる迄にして終つた。彼女はそのとき服從したやうな風をしたが、内心は全く之に裏切つていた。自分の上に與へられた激しい侮辱に對する怒は彼女の頭の中に響き渡つた。手を握りしめ恐ろしい憎惡の情を顔に浮べて戀の邪魔する父を呪つた。夜は床の中に轉がりながらシーツを噛んで啜り泣いた。

そして何物かをかき抱くやうに身體を延して、身内を顫はすやうな感情の激動に狂氣のやうになつた。聲高くチアンヌーの名を呼んだ。胸を引き裂くやうな彼女の涕泣は眠れる家の平和な靜寂を破つた。その悲嘆の叫びに水車の動かぬ櫂の間から下の出口に滴り出る水の單調な響を打消した。

三

其中に九月になつて、貧乏籤を引いた不幸な青年は聯隊へ入らねばならぬ時が來た。

チャンヌーもその一人であつた。二人は五年の長い歳月の間逢はれなくなる、そしてその悲しい別れの時にも只二人きりで、別れて後の寂しい痛らさを少なくするやうな慰めの言葉をかはすことも能きないのだと考へたとき、マルゴは落膽して終つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

チアンヌーは飢えた乞食のやうに其家のまはりを徘徊した。ある朝水車主が車を修繕してる時に、やつと彼女に逢ふ事が能きた。

「今夜いつかの處に私は待つてゐますよ。其が最後の時です……若し貴女が來なかつたら、私は河の瀬に身を沈めて終ひます」。

男は悲しげに囁いた。

「チアンヌーさん、吃度行きます。誓つて行きます……行かれるやうにするには何か恐ろしいことをしなければならないかも知れませんが……。」惑うてるやうな様子で彼女は答へた。

村は暗黒の夜の中に火を失した。折からの風にあをられて、火炎は不吉な火把のやうに燃え立つた。茅葺きの家根、積みあげた藁や乾草、穀倉などは狼火のやうな音をさせて焼け落ちた。空は北極光に彩られた時のやうに輝いた。フレスキルの水車場も煙を吹いてそしてその焼けた後の灰になつた破壊の跡は深い水に反影した。羊や牛は恐れおのゝいて野に逃げまはつた。犬は吠えたてた。

女共は破れた家具の上に坐して泣き叫んでゐた。此最中にマルゴは戀人の熱烈な抱擁に身を委せてゐた。彼女は自分の腕を男の頸にかけて優しく云つた

「ね、私は約束を違えなかつたでしやう。……私は來やうと思つて水車場へ火をかけたのですよ。皆が難義すればしただけ私の犯した罪が深くなるのです。けれ共貴方が私に逢えて満足して私を愛して

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さへ下されば私はかまいませんわ。」

遠くに何も衰へずに燃えつゝある火を指さして、突然殘酷な冷笑を浮べて彼女は云ひ足した。

「チアンヌーさん、貴方が聯隊から歸つて私と結婚の式をあげるとき、斯んな美はしい蠟燭を點火ける事は能きないでせうね」

斯くして再度マルゴンレキルは戀の恐ろしい罪を犯した。■完■

增田初譯

モーパッサン

りう子樣に

珍らしい方のお手紙、朝の食事をしてゐます時お受取いたしました。紙切小刀のある所へ行くのが待遠しく、封筒をむしり破つて拜見いたしましたの。暫くでしたわね。あなたはまあ田舍に平和な十年をお送りなさいましたつてね。わたくしの十年は內生活の上には樣々な目に逢ひましたが、やはり庖廚の世話をしたのと、それから子供を、體裁好く云へば敎育でせうが、詰まりひねくり廻してゐたのみに過ぎませんわ。わたくしの書いた物ですか。あんな物が恥知らずだから書けるのです。併し恥を知つてゐる爲に書かない人や、書いても苟くも作らない人に對しては、わたくしも恥ぢてゐますわ。折返し御返事を出さなかつたのは、益々御上達なすつて麗しい御筆跡に氣後れがして、書けなかつたのですよ。心の花で竹柏會の記事をお讀みになつて、わたくしを思ひ出して、お手紙を下すつたのですつてね。佐々木先生と宅の主人とは昔からお心安くしてゐますので、こゝへ參りましてから、會のある度に呼んで戴きますの初めのうちは若しやあなたが御出席なすつて入らつしやりはしないかと目を配つてお搜し申しましたが、今年の竹柏會などでは、もうお名前も考へ出しませんでした。併しその內お目にかかられるかも知れませんわ。わたくしの望みはいつも諦めた頃に愜ふのですもの。これ

は妙な迷信のやうな話でせう。あなたはお子様がおありになりませんつてね。さぞお寂しいでせうと申し上げる筈かも知れませんが、あなたの快活な、美しいお氣象を知つてゐるわたくしは、御主人様にしろ、あなた御自身にしろ、寂しいとお思ひなさることなどはおありにならないだらうと思ひますわ。子供と云ふものは次の時代を思はせると同時に望みと恐れとが附き纏はります。夫婦の中を融和させる様な事もあるかも知れませんが障礙になる事も少なくはありません。わたくしの子供の數を言へと仰しやるのですか。さうね。二人の娘と一人の小さい男の子、それからわたくしの前にゐた人の生んだ、わたくしより背の高い長男、それにね、寂しい苔の下にも、わたくしの生んだ男の子が一人ゐますの。こんなに血を分けてしまつたものですから、わたくしは此頃の植物の様な淡い青い色の女になつてゐます。あなた鵠沼の様をまだ覺えて入らつしやいますの。あの日中から両親も兄や妹も揃つて海水浴に出掛けて行きましたので、留守番のわたくしは小説を讀み耽つてゐますと、思掛けなくあなたがお尋ね下すつたのね。海邊へ厭々參りましたわたくしは、お蔭で鵠沼に來てゐた事をどんなにか喜びましたでせう。あの日までは海から吹く強い風ばかりでもわたくしには多少不安を感ぜさせ、無邊際なやうに見える海を久しく眺めてゐると、「海の女」でないわたくしも目に見えぬ或る力で海と結び附けられてゐる様に思はれてなりませんでしたの。餘り月の明るい夜ではなかつた様ですが、鵠沼館の離れへあなたをお誘ひに上がつて、御一しよに海邊を歩きましたつけね。そらあの危い橋を渡つた時でございますわ。あの時は海も鳥も月も只芝居の背景の様に思はれて恐ろしい感じはございま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せんでした。今でも目の前に見る樣に、あの時のあなたの湯帷子の柄お帶の模樣まではつきりと思ひ出されますわ。あなたは慥か處女時代のわたくしの最後のお友達の樣に思はれますの。記憶にあるわたくしのあらゆるお友達は皆あなたより前の方ばかりですの。その後はお話をいたす方があつてもこちらからお尋ねもし、先方から逢ひに來て下さる方があつてもお友達ではありません。あなたのお引合せ下さる樣に仰やる月岡花子さん、未見の人ながらお懷かしい樣に思はれます。どうかそのお方があなた同樣にわたくしに御交際下さる樣に、あなたから仰やつて下さいまし。松野梅子さんと云ふのは、あの中田先生の所へお出になつた方でせうがもうすつかり忘れてしまつて思ひ出されません。お目に掛かつたら、あゝ、あの方だつたかと云ふことになるかも知れません。一體わたくしはなぜ名の記憶が弱いのでせう。餘程大切に思ふ人でないと、人の記憶と名の記憶とが吻合しません。それなら數の記憶でも好いかと云ふと、さうでもありません。それでは取どころがございませんわね。レエテの水とやらで産湯でも遣はせられたのでせうか。それですから書物なんぞも讀んだ甲斐がありませんのね。そんなに忘れるのを悔む程讀んでもゐませんけれど。實際此頃は丸で本なんぞは讀みませんん。心が陋しくなりはすまいかと氣遣はれますの。さやうなら。(完)

——森　しげ女——

油煙

ひと色になほ堪へかねて目閉づる日あれど寂しき野の緑かな

あまりにもつつしみたれば過ちを君に重ねぬゆるしたまへや

なほ深く君を思はぬ報いとて片戀などのはかなさに泣く

われはなほ思はる戀はるこはひとりうなづけばよきあはれただごと

まことかと云ふ驚きの一言に人の怒るも憎からぬかな

聞えつつ耳のふさがる心地すともにいぶせむさみだれの音

昨日より逃れこしてふ話をもなほなしがたき顔にうつ

64

むく
悲みも恨も盡きていたづらに君が影描く白砂の胸
いつとてもはなれやすかる心もて思ふと云へばよろこびし君
簾せし青き光にふるへつつ橘の香の暗にただよふ
消えてゆくわがかたはらに君の泣く夢もおもしろ不可思議ゆゑに
わがことにはやかかはりもあるまじと詰る日なれば否と答へじ
この後をいかにせんかと相泣きぬ死もさやかには見ゆるならねば
わが命一つなるこそもの足らねいみじく思ふ一人のため
ややものに驚き過ぐる性ありてこれより後をはかなき

に附す

わが渡る橋のくづるるおもむきもなつかしきかな朝の川霧

おのが吐く黒き油煙に掩はれつ暗にも劣る焔となりぬ

——三ヶ島葭——

野の聲

露ふくみ青む夕野の木がくれに悲しく叫ぶ杜鵑はも

故郷の山青葉若葉になつかしき山杜鵑啼きそむ頃か

星ヶ岡なやみいだきてさまよへる淺春の日を鶯のなく

傷しき心かさびし二月の黒水仙に落つるなんだは

かゝる時かゝるまとひの恐ろしくわが戀の玉砕くと知りぬ

いたましう心泣かれぬ春たちて木々には花の數多かれど

さ青なる空にもそまずたゞよへる鳥の如くに打ちまどふわれ

春の光かなしや人を思ひつゝ摘む野花になんだ流るゝ

ともすれば捨てられし子の如くにも涙わりなし君よあはれめ

心なき子等にまぢりて物學ぶさびしさに猶堪へがたかるを

現にも夢にも人は忘られじかなしや戀を知りそめし子は

若き日の生命をあげてたゝへつるわが戀の海嬉し果敢し

まなざしの清きが殊に忘られじ死に行ける日の面影おもふ

――橋瓜うめ――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある女の夢物語

薄むらさきの月のしたたり
家も木もそめて……
湖は薄むらさきの小波ふるえ
小波は遠く近く歌ひつゞけぬ
微かなる……歌

ふとやかなるNの頬もかみも
月のしづくにうるをひて……
我が方へ歩み來り……
青く白き玉ちりばめし小櫛を

少さきNは我髮にさしぬ
そは我戀に報ゆる彼の戀の印よと
彼は語りて笑みぬ……我も又

『君、年多しと人は冷笑ふ』Nは云ひき
木蓮の薫る下にて……

しぼめる木蓮の花ひら／＼と
毒血の如く我肩に落ち……
側の年若き友は……
『君にさもにし……』とつぶやきたり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白き白蓮の清らなる方へ
Nは友の手をとりて去り行くを
笑顔もて、毒血の如き我は見ぬ……
されど胸は痛みてすゝりなく
『我年多し……あゝ』

暗の手にふるゝは壁か？
足にひゞくは枯れし木の葉か？
暗——……いつ我は暗きをのがれ得ん？

迴り迴りて、我は疲れぬ……
身は、壁によりて、倒れぬ
『うれしき櫛』はすべりて落ち……あわれ

黒き路に光あり……
木蓮の黒紅き花びら……を見ぬ、櫛のかげ
あわれ櫛はくだけ散りぬ露の如くに……
Nは待てど、我に來す。

■四五、五四■

――小林歌津――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アモンティレードの樽

ホルチュネートから加へられた無數の損害を出來るだけ堪へた私も侮辱された時は誓つて復讐した。だが私の性質をよく知つてゐる人は私が威嚇するやうな言葉を口にしたとは御考へになるまい。己れいつかは復讐せずに置くものかといふこと丈は、實に動かすことの出來ぬ迄、決定した一點で、この覺悟の中には危險な思想を宿してゐた。と言ふのは私自身は罰せられるどころか全く無罪でなければならぬ。報が來るやうな復讐だや恨は晴されない。又敵の心に復讐されたといふことを深く感じさせることが出來ないやうでは矢張りいけない。

フォーチュネートに私の善意を疑はせるのは言葉や行ゐでないとはお分りの筈だ。例の如く私は微笑を續けてゐたので、彼は私の微笑が今、自分を殺さうとするやうな恐ろしい考へであらうとは知らなかつた。

彼は他の點では尊敬されるばかりか恐怖されてゐる程の人物であつたが、唯一つの弱點を有つてゐた。彼はみづから酒の鑑定を得意としてゐた。どうもイタリア人には美術品を眞に鑑定し得るものは

稀てある。彼等の心はイギリスやアウストリアの富豪に對し欺僞を働く爲め臨機の處置をとるとにはかり熱中してゐるからて、フォーチュネートも亦其國人と等しく繪畫や寶石の鑑定こそあやしかつたが酒にかけては本物だつた。この點では私も彼と全く同様でイタリア葡萄酒の鑑定に熟達してゐた。そして事情の許す限りはいつも澤山買ひ込むのを例としてゐた。

私がこの友達に出逢つたのは丁度狂熱の極度に達した謝肉祭の或夕て、あたりはもう薄暗かつた。大變酔つてゐたせいか彼はいかにも親し氣に私に挨拶した。キチッと身にあつた色々の色縞のはいつた装飾服をき、鈴のついた圓錐形の帽子を頂いてゐた。私は果てしもなく握手するほど彼に出逢つたのを喜んで、

「フォルチュネート君、ヤアいゝところで御目にかゝつた。今日はたいした御元氣ですな。時にどうも、あやしいもんてすがアモンティレートだといふから一樽買つて見ましたがね。」

「えッ？」と彼は言つて、「アモンティレートか。一樽ッ？ そんなことがあつて溜るもんか、おまけにこの謝肉祭の眞最中にさ。」

「どうも疑はしいてす。君に相談もしないて、アモンティレートとしての代を拂つたのは全く馬鹿てしたな。併し君は留守と來てゐるし、取引の機をはづす恐れもあつたんて。」と私は答へた。

「アモンティレートだな！」

「どうもあやしいもんてす。」

―アモティレート！」

「して私は其疑を晴さなければならんてす。」

「アモンティレートだな！」

「君かもし御多忙なら僕はリユーケシの處へ行く。鑑定眼を有つてる人と云へばまああの人だリユーケシは私に――」

「リユーケシはシエリーとアモンチィレートの區別さへ出來やしないぜ。」

「だが世間にや彼奴の趣味を君に匹敵するものゝやうに言つてる愚者（わからずや）もありますからなあ。」

「さ、行かうぢやないか。」

「何處へてす。」

「君の酒倉へさ。」

「いや、どうして、其御好意を頂く譯にや行きません。どうも君は御忙しさうだ。リユーケシは――」

「いやちつとも忙しかない。」

「いや、君。御忙しいといふ譯ぢやないが、ひどい寒さて屹度御困りになりますよ。何しろ酒倉は大變濕つぽいてすから。そして硝石が一面に着いてゐます。」

「何にかまはんさ、行かうぢやないか。寒さなんか何でもないよ。アモンティレートと。君は瞞されたんだなあ。リユーケシーあいつなんざアモンティレートとシエリーの見分けさへつくもんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かう言ひながらフォルチュネートは私の腕に凭掛つた。黒絹の假面をつけ、外套の前をチャンと合せてから、私は彼と一緒に自分の屋敷へ急ぐことにした。

家には誰れ一人として居なかつた。男達は皆遊びに出かけてゐた。私は明朝でなければ歸らない、それ迄家をよそにしてはならぬと堅く彼等に命じて置いたのだ。この命令は私の背を見るや否や即刻に彼等の影を一人殘らず隱させるに十分なことを私はよく知つて居たので。

私は男部屋から二本の火把を取り出し、一つをフォルチュネートに渡すと、酒倉の入口の弓門まで幾組かの部屋を抜けて彼を案内した。降り盡すとふたりはモントレソー家の濕つぽい墓場の中に立つた。

友の足取は危なかしかつた。帽子の鈴は歩毎に鳴つた。

「酒樽は?」と彼が言つた。

「まだずつと向ふてすよ。だが、穴倉の壁に閃めく白い蜘蛛の巣に御氣を付けなさい。」

と私は言つた。

彼は振向いて、どろんとした醉眼で私の眼の中を見たが、とうと訊ねた。

「硝石だと?」

「硝石てす。」と私は答へて、「餘程以前から御咳きになるんてすか。」

「ゴホン! ゴホン! ゴホン!――ゴホン! ゴホン! ゴホン! ゴホン! ゴホン! ゴホン!」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

友は咳き續けて暫くは答へることも出來なかつた。が、

「何に構はん。」と遂に言つた。

私は斷乎として、「さあ、戻らう。君の身體が大切だ。君は今金持だし、又人々からは尊敬され、崇拜され、愛慕されてゐる身の上だ。以前の僕のやうに幸福だ。僕にとつちやなんでもないことだが君には障る。さあ歸らう。君は病氣になるに相違ない。だが僕はその責まで負ふ譯にやいかんからね。それに、リユーケシは――」

「よし、」と彼は言つて、「だが、咳なんて何んでもないさ。俺を殺しやしまいし。咳て死ぬやうな俺ぢやないぞ。」

「成程――成程。」と私は答へた。「だが全く僕は徒らに君を驚かす氣は毛頭ないんだ――寧ろ君は正統な忠告を皆取り用ひにやならん。このメドク一杯グイッとやれば陰氣な空氣は何處かへ散つて仕舞ふといふもんだ。」

私は土の上に寢かしてある長い一列の瓶の中から一本拔き出して其頸をかきとつた。

酒を彼にすゝめながら、「飲み給へ。」と言ふと、彼は横目に見ながら唇のあたりまで上げて、一寸躊躇つたが、親しげに私に向つて領く、と同時に頭の鈴も音を立てた。

「墓場に眠る死人を祝して、飲まう。」と彼が言つた。

「して僕は君の長い生涯を祝して。」

友は再び私の腕を取つた。ふたりは又歩き出した。

「穴倉は廣いね。」と彼は言つた。

「モントレソー家は大門閥家ですからな。」と私は答へた。

「君の家の紋章は何だつたつけ。」

「牙を立てゝ踵に噛み付いてゐる暴れ狂ふ大蛇を踏みしだいてゐる巨人の足。それが青地に金で出てゐるのだ。」

「で、家の格言は？」

「加害者は必ず復讐せらる。」

「成程。」と彼は言つた。眼は酒に輝き、鈴は鳴つた。

私の空想も亦酔と共にいよ〳〵燃えた。大小の酒樽の入り亂れた墓地の最も奥まつた凹所へと我々はうづ高い骨の壘壁の間を過ぎて行つた。私は再び躊躇つたが今やフォルチュネートの腕をムザと引つ捕へる丈けの勇氣が出て來た。

「硝石！」私は斯う言つて、「見給へ、だん〳〵硝石が増えてくる。苔のやうに上から垂れかゝる。僕等は河床の下にゐるのだ。濕氣の滴が骨の中にぽたりぽたりと落ちる。さあ、あまり遲くならんうちに歸らうぢやないか、それに君の咳つたら――」

「そんなものは何でもない、さあ行かうぢやないか。だが、まづメドクを今一つ。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は細口の酒罎をあけた。彼はそれを一いきに吸み乾し、恐ろしく光る眼に高笑ひしながら譯の解らぬ一種の身振で罎を上の方に投げた。

私は驚いてその様を見守つた。彼は同じ身振を――この奇怪な身振を幾度か繰返した。

「君に解るかね。」

「いや解らん。」

「ぢや君は仲間ぢやないな。

何？」

「君は共濟組合員(メイソン)ぢやないといふことよ」

「どうして、どうして、どうしまして。」と私は答へた。

「君がだつて？そんな譯はない　君が共濟組合員(メイソン)だなんて。」

「全く共濟組合員(メイソン)です。」と私は答へた。

「ぢや標章(サイン)を見せ給へ。」

「これです。」と私は外套の下から一丁の鏝を取り出しながら答へた。

「戯談ぢやないぞ。」と叫鳴つて、數歩後ずさつたが、「だが、アモンティレードの處へ行かうぢやないか。」

「さうしませう」私はもとのやうに外套の下に鏝を隱して再び彼に腕をさし出した。彼は重く其上に凭

り掛つた。そこでふたりは、又アモンチュレートを探すために同じ道を續けた。低いアーチ形の階段を過ぎては降り、過ぎては降りて、遂に深い土窖に達した。土窖の不潔な空氣で火把は燃えるといふよりも寧ろ赤く灼けるやうに見えた。

土窖の一番遠い奥のつきあたりは他とは多少變つて見えた。その壁はパリの大きな墓場のやうに天井まで高く積み上げた人間の遺骨で蔽はれてゐた。

この奥まつた土窖も三方とも矢張り同樣になつてゐたが、あまされた一方だけは骨がなだれ落ちて、一所にうず高い山を形成りながら地上にゴッチャに散らばつてゐる。其骨を取り除けると壁の内側になほ深く奥行大凡四フイート、幅三フイート、高さ六七フイートの壁龕が認められる。墓場の屋根の二つの大きな支柱の間に單に間隙を作つてゐるばかり、又墓場を取圍む花崗の堅い障壁の一つで背後を塞がれてゐるばかりで、それ自身にはこれぞといふ何の用途もなく造られたもの丶やうに思はれる。

フォーチュネートは自分の消えかゝつた火把を振りかざして壁龕の深みを見極めやうと努めたが甲斐もなかつた。弱い光はこの奥深い極みを見るには適しない。

「這入らう。アモンチュレートはこの中にあるんだ。リユーケシは――」と私が言ひかけると、

「彼奴は無學文盲さ。」と前の方によろめき出ながら友は遮つた。と同時に私はすぐさま彼の踵に續いた。やがて彼は壁龕の奥に達したが、進路が岩に盡きると、當惑の體でぼんやり突立つた。一瞬をまた

ず私は花崗の壁に彼を繋ぎ付けた。壁の面には二個の鐵の肘鉦（ヒヂツボ）か水平に大凡二フィトの距離をもつてゐた。その一つからは短い鐵の鎖、今一つからは海老錠が垂れてゐた。彼の腰の周りに鎖を投げてから、これで大丈夫といふ迄しつかりと結び付けて仕舞ふのに僅數セコンドを要したに過ぎなかつた。彼はあまりの驚愕に抵抗することさへも出來ないのであつた。鍵を取去るとすぐ私は壁龕から出た。

「君、手を伸して見給へ壁の上に、硝石に觸るだらう。實際濕つぽいとはこの事だ。今一度僕は君に懇願します戾つて下さい。いやだと。ぢや僕は是非とも君と別れにやならん。だが僕は何をさておいても自分の力のあらむ限りは君を介抱せねばならんのだ。」

「アモンティレート！」まだ驚きから回復しないで、友は突然から叫んだ。

「左樣、アモンチュレート。」と私は答へて、先きに話したあの骨の山の中で忙しく働いた。まづ骨を側に取り去るとすぐ石や、モルタルを澤山剝した。そして鏝の助けによつて私はこれらの石とモルタルで手ばしこく壁龕の入口を塞ぎ始めた。フォーチュネートの醉が餘程醒めたのに氣付いた時、私はまだ第一層の石も並べきれずにゐた。最初それと知つたのは壁龕の奧から來る低い呻き聲で、といふのはそれが決して醉人の叫聲てはなかつたからである。すると長い頑固な沈默が續いて來た。私は第二、第三、第四の層を積ん上げた。その時、鎖の烈しくゆすぶれる音がした。音は數分間繼續した。其間私はなほ一層の滿足を以てそれを聞きたかつたのでわざと手を休めて骨の上に坐つてゐた。音の全く消えるのをまつて、再び鏝をとつて滯りなく第五、第六、第七の層を積み終つた。今や壁は自分

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の胸と殆と同じ高さにある。私はまたも躊躇つたけれど、火把を其石工事の上にかざして内なる人影に幽かな光線を投げ入れた。

縛られた咽喉から突如として破れ出た耳を突貫くやうな鋭い、聲高い叫聲の連結によつて私は烈しく後へに衝かれたやうに思はれた。暫くの間私はたじろいた。私はおと／＼と震へてゐた。で、長劍をひき拔いて壁龕の周圍を搜索し始めたが、突差に浮んだ考が私を安心させた。私は墓場の堅固な石の上に手を置いて滿足を覺えた。そこで再び壁に近いて、喧しい彼の號叫に答へた。幾度も擬ね答へた私の聲が其分量に於ても又强さに於ても先方を壓倒して仕舞つた。すると内部の叫聲は次第に靜まつて來た。

今や眞夜中である。私の仕事は終りを告げかけてゐた。第八、第九、第十、の層は出來上つた。第十一層も終つた。あます處は只一つの石を置いて塗りならすこと丈だ。私は甚石の重さに苦しみながら、置くべき場所に其片はしだけのせた。然るに今や私の頭髮が直立するやうな低い笑聲が壁龕から聞え來た。あれがあの豪氣なフォーチュネートの笑聲とはどうしても思はれないほど悲しく續いた。

「ハ！　ハ！　ハ！　ハ！　こりやひといいたつらだ全く――すばらしいじやうたんだ家へ歸つて飮みながらこの事に就いてハ！　ハ！――大笑ひせにやならんハ！　ハ！　ハ！――

「アモンチィレトー！」と私は言つた。

「ヒ！　ヒ！　ヒ！――ヒ！　ヒ！　ヒ！――さうよ、アモンチィレトー。だがあまり遲かないか

ね。屋敷には家内始め家族等が皆待つてる筈だ。さ、行からぢやないか。」
「さうです。さ行からじやありませんか。と私は言つた。
「どうぞ、君！」
「さうです、どうぞ！」
けれどこの言葉に對する答を聞くことは出來なかつた。私は焦々となつて、
「フォルチュネート！」と聲高く呼んだ。が、何の答へもない。で、又、
「フォルチュネート！」と呼んだ。が、
なほも一言の答へさへなかつた。私は仕殘されたかの隙間から火把を壁龕の中へ投げ入れた。只僅に一ふりの鈴音がきこえた丈だつた。墓場の濕氣の爲めか、私は心持が惡くなつたので自分の仕事の終りを急いだ。やつとのことで最後の石を置いて、それを塗り上げた。そしてこの新しい石工事の前に又以前の通りに古い骨の壘壁を築いた。以來五十年、いまだ何人も其骨を壞したものはない。彼は安らかに眠つてゐる！

■完■

——ポオ——

習作の三

久潤で光子さんが東京から歸つて來たといふ事が、淋しい私と、順しい中川さんとの間に、春のやうな暖かい悦びを與へたのであつた。

狂ふやうな、熱の高い光子さん、何ういふやうな顔をして歸つて來るだらふ。私は會ふ迄夫れを思ひつづけた。光子さんは疲勞の一夜を伯父さんの許で寢て、朝、待ち兼ねたといふ風に、俥に乘つて中川さんの家へ、中川さんと私とに會ひに尋ねて來たのである。

私と中川さんとは、八疊の一室で中川さんの飜譯物を讀み合はせてゐた時だつた。鹽せんべいに煮出した紅茶。蘚苔と繁つた庭樹の緑が冷たい朝の光を享けて、硝子戸で閉めきられた此一室は、初夏らしい朝冷えを感じるのである。稻荷祭もとつくに濟んで、世間も唯靜かに考へて行かうとする、冷たい、而して爽(さはや)かな季節だ。

此頃、佳い空の光線を浴び乍ら、友達と會ひ、踊るやうな胸を認め會ふ。私は光子さんの姿を中川さんの隣の席に見つけた時、悦びの弱い震るへを感じてゐた。

『遂々、歸つちやつた。私は矢張り駄目ですよ。』

光子さんは、其綺麗なよく洗つた涼しい眼を伏せて、相變らず熱し易い胸に、自からも苦しむといふ様な聲を出す。

冷靜を粧ふやうな順しい中川さんも、光子さんに逢ふといふ事が、生活の或る部分を亂調にするほど悅ばしかつた。中川さんは房を出たり這入つたりしては、此熱烈な苦しい友の爲めに、料理を考へたり、何うしてもてなし慰めやうかと思つたのである。

『辛かつたでせう。』

私は、此言葉の外に、光子さんと語る端緒に用ゐる佳い言葉がなかつたから。

『ええ。隨分、苦しかつたのです。』

と昨日にまで逼つてゐた過去を、ずつと腦の中に廻轉させて、信じ合つた友の前で訴へるといふ様な眼をするのである。そればかりか、信じ合ふ友の前に、苦しい經驗を語るといふ事は、あまりに痛切な慰めの爲めに、然う悲しく泣けて行くのである。

『先生など、迚も私の職業ぢやないでせうがね。』

此、一語が、染々と自分の自分を省みさせるやうで、光子は已了後何が續かないのだ。

『夫れもさうでした。』

私は冷たく微笑して。

『夫れに又、あんな事件も作りましたから。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ああ、お手紙で悉かり解りました。先方の方もちと酷いと思ひました。』

私の此、後の語は光子さんには直ぐ其儘受け入る事は出來ぬらしかつた。戀人の仕ぐさが酷い、それは他人の見た言葉だ。

『私がつまらないからですよ。』

烈しく進み入る事はしても、又退いて謙譲をもつ、之れが光子さんだ。

此時、中川さんも房に入つてゐて、光子さんの爲めに新らしく茶を進めた。

茶を進めて了ふと、中川さんは何うしたのか、私つと吐息をついて、静かに自分の茶を飲む。

『京都を立つ時、私は戀なんか能きる女ぢやない。爲ない、とも思つてゐましたよ。』

怎う中川さんの方を見て光子は遂々兩袖で顏を蔽つて、烈しい感泣を覺えるのである。私は中川さんをちらと見るなり、はつとして俯いた。然し、さういふ時でも極靜な理智を有つた中川さんは、吸ふために移した、彌生の火を見つめ乍ら、

『さう思ひ逼つておそひになると、私共で返辭に困つちまいますよ。』

中川さんらしい語だ。と私は思つて、

『光ちやん。』

中肉の、優しい肩に私は手をかけた。

『あなた方に私しは濟まないから。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

非常に自己に烈しい光子さんは、友人の前へ出ると、直ぐ是れだ。
私は、若しや狂ふ人ぢやないか知らと心の踊るのさへ覺えた。唇を嚙み締め、柔かい自分の手を自分で握りしめなぞするものだから。

『そんなに、正直に仰しやらんでも好いぢやありませんか。』

かけた手を其儘、肩をゆすぶりなぞするのである。

中川さんは、靜かに若い二人を見下ろしてゐながら、彌生の烟りを見つめてゐた。

『そんな事をいふと、私らの方は又、あなた以上に罪が深いわ。』

中川さんは、又中川さんで、

『然てすとも、さう固くなられると、此れから困りますよ。私らまで。』

と彌生を灰の中に差し入れ改めたやうな態度で、

『私はまた、光子さんの様なお話しや經驗をきくと、若い友のために身を彩つてゐるやうな氣が爲ます。些とも自分が淋しいと思ひせん、あなたと今夫れを言つてゐましたつけね。まさをさん。』

中川さんは私を見て恬う微笑も顏を漂よはせて……

『ええ。伺ひました。だけど、其處が中川さんの觀方ですね。私が中川さんだつたら、私の仕ぐさだとか、光ちやんの此處の事件にでも噴とするふしは澤山あります。だのに、夫れが若い友達が自分の周圍にあると思ふと、恬う心丈夫だなんて、中川さんは私共から飛び離れてゐての様です。』

光子さんが、無言で俯いてゐるから、私は極、喋り都合が好かつた。
『其處が、年齢ですの。』
中川さんは、さも姉に位する事を痛む容子となり、其くせ、内心の愁ひは迚も若い二人では解つてゐまい、といふ風に。
『そんな悲しい方面から見ないで、もつと笑談めいて光子さんのお話しをきき度いですね。きつと面白いでせう。』
光子を慰める巧な辭だ。私も笑つて了つた。
『何して、笑へるやうな話しぢやないのですよ。まさをさんの樣に、』
恁う言ひ差して、私を覗て、つと言ひ澁るのである。
『私のやうに何てす。お手輕な事件ぢやないつての。』
此私の一言が、悉かり二人を笑はせた。
『さうですとも、』
涙を收めると、光子も又、輕るく口を利けるんだつた。
『そんなに、私は輕佻ですか知ら。だけどね、私は先方の心持ちを考へますから。强い態度を持つてはゐるが、私のために爲てゐるのではないか、恁う思ひますからね。』
『さう、さう、それは正直な處もありますよ。』

中川さんは會心らしく笑つて、

『其邊は光子さんも似てゐてですね。兎も角も、何事でも見下さす様な態度が取れないで、すぐ犧牲にして考へて見るといふ人は、つまりは淋しい人ですよ。ね、』

『ほんとうにね。不仕合せね。』

私は又、二人の微笑にのぼるやうな言葉を撰んだ。

光子は、當時くして居う中川さんの眼を見乍ら、

『あなた、やつぱりお貰召し上がる。』

『えゝ、えゝ。』

中川さんは婁らしい眼付きをして、

『中川さんの事は、一等三田といふ方が知つてらした容子でした。あの人には御厄介になりました。』

そろそろ、話は東京の學校に移つて行つた。中川さんの照會のために、乏しい學歴でもつて自分と同年位ゐの人を教へに行つた。其飾つた幸福も、苦しい戀のために惜しげもなく振り捨てゝ歸つて來た。此意味に於て、中川さんには何れほど切ないか、光子の中川さんの前ではさう輕るう戀の話しも出來ないのは、中川さんが何處までも友の爲めには自分を棄ててかゝるといふ好意の前に戰のくからだ。何うかすると、暗い處を見詰めやうとする中川さんは、全身の苦悶を味つて善い人生の方へ自分を

誘引い、頻りと靜かに自分を責め懲らし、悶死さへ仕兼ねまじき氣分になるんだつた。夫れが中川さん自身では、些とも不自然ぢやない。さうしなければ、暗らくつき絡ふ世の中の影が耐らなく身に逼つて來るからだつた。

其處へ行くと、私等の心は空洞だ。爲たい放題、笑ふ、泣く、まるで吹きすぎて行く海の嵐の象徴だ。

夫れを靜めたい、考へ度い、恁う强ゐつけるから好い觀方をしない、無技巧でゐられない。何うかすると、光子さんもさういふ感じのする人だ。

『ああ、三田さんにお會ひでしたか。』

中川さんは久しく教鞭を握つてゐた東京の教員室に種々の印象から拔き出す友人の顔を思ひ浮かべ、感慨に沈むやうな眼付をするのである。

『あのXの方は三田さんの照會だつたぢやありませんか。』

中川さんでも、やはり、話すとなると中心の事件に落ちる。

『ええ。ええ。さうですの。照會して頂きました。』

『一體、何を爲さる方です。』

『え?專門ですか、筆を握る方でもないのです。』

光子さんが戀人として撰んだ人、何麽人だらふ、私も恁う露骨に考へるのである。光子さんは次第

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に顔を俯かせ、耳珠を紅く爲ながら聲を低めてゐた。

『あなたはまだあの手紙では、自分の苦痛を洩らさないで考へてゐるとありましたね。だのに、語つてお了ひてせうとまさをさんが言ふのでせう、Xの方にはよくお會ひになるんですか。』

『一度、逢つたきりでした。』

『おや、おや、はかない事ですね。』

『さうねえ。』

中川さんも、冷たく笑つて、又彌生を一本摘み上げた。

烈しい悶を感ずる人、恁う私共は見てゐるのだけれども、行爲の現はれた部分は存外沈着がある。餘韻がある。光ちやんが何處となく惹き入れるやうな匂を感じさせるやうな點も、考れば此れだ。

『お土産です。』

少時くしてから、光さん子は靜かに袂から白色の小さいボール箱を取り出した。更らに桐の小箱に入れた銀製のメタルが、二人へ一つ宛分たれた。

朝だと思ふ内に、いつか已う午のやうな日光か射し込んで來た。三人は暗い處から、明るい世の中を見詰めやうとする烈しい力に飢えてゐる如く、眼ばかりをかゞやかせた。

光子は少し心を沈めると、中川さんの仕事に眼をつけて、原稿などを拾ひ讀みするのだ。

『中川さんは、でも精力がありますわね。』

――中川さんのやうに、ああ靜かでも困る。些とは勇氣を燃えさせなければ。でも彼れでも聖書を火に烙べたんですつて。己う是にも彼にも、熱するだけは熱して了つたのでせうか知ら。灰色の中川さん――

光子は中川さんの原稿を見ながら、私と恁んな話を交してゐた事を思ひ出した。今となると、夫れが羨ましい。凝乎、敎へを明るい眼で見上げて行からとするやうな、靜かに理智を育ぐくませて行かうとする中川さんの、たとへ夫れが冷灰になつた形ちにせよ、羨ますには居られないのであつた。

中川さんは、此度の生徒は文字に智識がないので敎へ難い。その變り、理性を確乎と握つて生れて居る人達ちだから、存外此方と氣分が對ひ會ふ。

恁う、二人に言つて、敎育家としての苦痛を、之は又、自分一人で瞑想せなければならぬといふ强い心持ちも見せてゐた。

恁ういふ話をきくと、光子さんは中にも、殊に消えたく思ふのである。親切な中川さんの照會に依つて、態々東京まで出かけて行つて、前途を見て頂きませう、恁う友人の中で語つた。己う又元の默阿彌姿て歸つて來る。之が漂浪てなくつて何うしやう。

丁度中川さんを親の位置に据え、其前て自恣を見せつけてゐるやうなものだ。苦しい、又私は考へ出すのであつた。

中川さんは些と用事のあるらしく座を立つので、光子と又向ひ會つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此室の椽側を、おきんといふ女中が洗濯物の竿に赤い紅絹布れを擴げて夫れを搖り廻しながら格好な木の枝とに渡さうと思つてか重さうに白い腕をむき出して通つて行く。光子さんの白い指と、膝にのせた白紙がぱつと仄明るい光りに映えて、其色は、茶飲茶碗の白い中までに落ちて來た。

『御めんやす。お天氣がええものどすかいな。些と洗つときまへんとな。』

殆、獨語のやうだつたから、二人とも返事もしないでゐた。袷の鼠色の裾が、綺麗な足のうらにちらちらと絡ひついた。私は其人の耳珠の邊りに直然と垂れてゐる後れ髮を眼に遺しながら、

『あの女のために、中川さんも苦しいいでせうよ。』

此、漠とした一言も、もう敏捷な光子さんには解つたらしかつた。青葉に渡す竿の音を耳に爲ながら、ふと其女から續いて現はれる中川さんの兄の事を考へ及ぼすのである。さうだ、多感な光子さんは一時中川さんの兄の爲めにも苦しんだ人だつた。

何處まで光子さんは寥しい道を歩くんだらう。私は又深い愁いに沈んで行くのだつた。

『一雄さん、まだ此處に入らしやるのですね。』

光子さんは耐らぬやうになつて、自分から口をきり出した。

光子さんの意りでは、已う一雄さんなどに暖かい要求の心が遺つてゐるのではない。そんなものは熱し易い光子から悉かり消えて了つてゐるのである。光子さんは、自分を思ふと同じ形ちて、又、心

を通はしてゐた過去の人の上を考へる容子である。

弱い、苦しい人だ。其くせ、愛に烈しい人だつた、恁う光子さんは心に考へるらしかつた。夫はほど、或る意味に於て光子さんは一雄さんを知つた女だ。

『中川さんのおつ母さんも中々ですよ。何うしても夫人さんが出來ないんですね。』

『一雄さんも、さうですか。氣の毒な方ねえ。』

『ですが、種んな事業に手を出してゐて。』

『夫れはさうでせう。そんな事は成功する人でせう。』

光子さんは俄かに笑つて、而して、中々、他人の上ぢやない、と思ひ返す樣な眼付きをした。

中川さんが這入つて來ると冷たいおすしが各自の前に並んだ。

光子さんは、恁う胸にあまる、といふ感慨のために、好きな夫れも舌に上らない。ミルクも入れない紅茶をたゞ飲みつゝけてゐたのである。喰べる時は喰べる、語る時は語る、といつたやうな中川さんは、默して、折々微笑しながら、其他の料理をも箸を入れるのである。

『一雄さんも御機嫌よろしいさうですね。』

光子は何と思つてか少し頭を下げるやうな風をして。

『ええ。何ですか。私には打ち分けて話して呉れません。』

よく兄の心持ちを聞いて呉れ、恁う光子に迫つた昔しを思ひ出した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『中川さんも中々苦しいですね。中川さんのはまた、私なぞと方面の違つた苦痛だから。』
と私は杉箸の爪かあかい色を見つめ乍ら言つた。

『ほんとうにさうでせう。』

光子さんも和して恁う言ふ。

『ちつともさうぢやないのです。我家のためにはあつてもなくつても佳い私です。』

謙譲な、静な顔をして、眼を伏せて言ふ。

何處かで、木を斷り挾さむやうな音が爲た、二人は顔を見合せて庭の方へ眼を向けると、

『なあに、植木屋が這入つたのでせう。』

中川さんはつと椽側の方へ立つて出るので、私と光子も痩れた足を伸ばして、冷たい板間に思ひ思ひに腰を下ろしたり、立ち盡したり。

青葉は、淡紅い輪廓を彩つて、もう強く青光に焔えるほどでもなかつた。椎は一枚一枚垂れ下つた葉を、日光に貪る如く震るへてゐた。

私は、徒らのやうに光子の美しい頸脚に自分の手を當てゝ、額越しに顔を覗き込んだ。中川さんも夫れを見て立つてゐる。

『まあ、しつかりとなさいよ。』

恁う、中川さんは慰めるやうに、急つてゐる友を哀れに思つてか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『さうですとも、考へないで被居しやい。痛たわねえ。』

此、何げない二人の言葉も、光子の心には浸み入るやうに思へたのだらう。已う其涙多い眼が濡れてゐる。何うして、友でなければ心を告げるものは、と其顔に言はせて。

でも、何うしても考へずには一寸もゐられない。些との間も、自分と、自分の歩みを忘却して了ふ事がならない。恁う光子さんは反抗する樣な眼をして若し忘却する事が出來たらば、私はあの戀を確乎と掴んでゐる、今頃、友が戀しくて此冷たい靜かな、京都に歸つて來るやうな愚かな、弱い眞似はしない。光子は又、泣き出したいやうな悲しげな聲を出して、

『だつて、私しは、自分に思ひ餘つたから、いつそ、汽車から飛び下りやうかと思ひましたよ。』

『まあ、さう激しないで、靜かに考へて御覧なさいよ。』

中川さんも側へ膝を下ろして來る。光子さんは直ぐ夫れを抱くやうにして、

『中川さんのやうに、何うしてさう靜かにはなれますか、中川さんのやうでなくつても、此人のやうにでも佳い。』

『私のやうだ、といふと輕薄になる事だわねえ。中川さん。』

丁度、午報が、三人の頭上に渉き渡つた。

『今日は私し失禮しませう。』

光子さんは驚くやうに立ち上るので、私も、

『まあ、ぢやあんまりあつけないぢやありませんか。』

『えゝ。だけど……』

でも光子さんは、二人から言はれた言葉も一人で考へて見度く、日光を見るに耐えないやうな苦痛の疲れ、夫れも静かに眠らせ度かつたらしい。

『ぢや送つて上げませうか。』

『えゝ、さうして頂けば。』

で、私だけは電車までと言つて光子さんの後ろに尾いた。私のパラソルの中に顔を突き合はす様にして歩いた。、、けあげから下つて來る電車にインクラインで上らうと光子さんは言つて、人氣の少ない、潤つた木影を撰つて歩いた。

『あの人はね。まだ新宿にゐます。いづれ結婚するんでせう。』

羞らつたやうに、光子さんは俯き乍ら言ふ。其人の名は木村、だとも言ひ足て。

『でも、一體男といふものは何麽ものでせうね。』

恁う又、思ひ出しては耐えられぬといふ形を聲に爲る。

『愛は同樣じでせう。』

私は成可く光子さんに日影を與へた。夫れでも赫とよく照り渡る日である。

『私はいつ迄になつても、戀せずにゐる、といふ事は出來ないでせうね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『夫れに誰人でもでせう。私など御覽なさい……』
光子さんがあまりに正直に、私を見上げたのでふつと言葉を途斷らせた。
『中川さんは靜かですね。』
光子さんは、頓て長い吐息を洩らしてから。
『いいえ。靜かぢやないでせう。』
私は遮ぎつて言つた。
『あの人は、只、洩らさない。何處までも自分一人で思ひ返さうとしてる人ですもの。あの人にも昔しから二つあります。聖書を火に私べたのと、己う一つは先方から貰ひに來たのと、』
『中川さんのやうな人でもねえ。つまり烈しい同情なんですね、戀といふものは……』
『さうですね。』
私はふと、考へて行く靑い楓の枝を覗上げ乍ら、戀を失つた後の世の中、といふ樣な事を考へ出した。私だとか中川さんのやうに、灰色の、冷たい望みもない、屍のやうな人にやがて光子さんも這入つて行く人か、何故人はこう牡丹の花の日光に震へるやうに、若若しい靈で戀の前に燃える人でゐられないのだらう。冷たい人生を見つめる爲めに、戀を棄てる。
私は何げなく光子さんの柔かい手を握り交した時、電車は響きを立てて流れて來た。光子さんは白い裾まはしを、草履の緒に纏(もつ)らせ乍ら、飛ぶやうにして車の上に這入つて行く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此人を、只の一夜でも、靜かな夢を結ばせ度い、而して新らしい戀の刺戟に、めぐり會ふ迄に、其疲勞に沈んだやうな眼を、元の若若しい色に變へさせ度い。

己う一度、あの人を戀の手に返し度い。だけど、夫れも、あの人には苦痛をまさせるやうなものだらう。さうだ、何故あの人達ちは戀を苦痛のかげに追ひ込めて考へてゐるのだらふ。

■五月六日小鏡に洲はる我淋しき瞳を見つめつゝ■

——杉本正生——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「オヤ　もう十一時だ！　ぢあお暇いたしませう」。

女は机の上の置時計を見ると大行な聲をしてこう云つて身仕舞を直し始めた、妻君は大きな目を見はつて女の顔を見たが、

「まア　貴女　こんなに遅くなつてお歸りになるとおつもり……どうして今夜はそんなに强情をおつしやるの。」と睨む様な目つきをしてしつかりと其袖を握つた

「だつて今夜は……私も歸り度くはないのよ、だけど今夜はどうしても駄目なんですのも」

と甘へる様に云ひながらじつと女は時計を眺めた。

「……ほんとうに私も歸へ度くはないわ……」

から引かれる様に云ふと立上りさうにした腰をまたそろそろと落ちつけてグッタりと座つて終つた。

「ね、貴方、是からまア牛込くんだり迄歸れるものですかね、第一、こんな美しい人が夜道を歩くなんて　あぶないわ　ねえ貴方。」

妻君は戯談らしくこう云つて一寸夫の顔を見ると笑つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「アラ！」
女は瞳黒を見はつて妻君を打つ眞似をして見せながら「そんな事をおつしやれば猶更 私 お暇してよ戲談じやないの。」
女はこう云ふと今度は思い切つて立上つた。そして後の帶に手をやつてなで見ながら、
「全く今日は先程お話した樣な事で上つたのですから……家で心配しますからね。」
と聲を改めて云つて亦坐ると兩手をついた。
「まア、憎らしい方ね、どうしてもおいやなの……人に床まで取らしい置いて。」
妻君は呆れた樣にかう云ふとすねた目つきをしてつんとした。そして、
「ですから 明日私も御一所に此邊をさがそうと云ふのじや有りませんか、此邊には氣の利いた家がいくらも有りますよ。ね、そうなさいましよ、ね、」
「エエ有りがたう。また近い内に伺ひますわ。どうせ家が見つかる迄は來なくつちやならないんですもの。」
「まア、未だあんな事を……」
妻君は焦れつたそうに云つて口をつぐんで終つた。そして火鉢によりかかつたまましましと女の顏を眺めに居たが、
「イイエもう否けません、いけません。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と首をふつて、
「今夜はどうしたつてお歸ししないから。さうお思ひなさいな　さアさア度胸をきめてお休みなさいましよ。ねえ床入つて色色お話しようじやありませんか、ね、お話が　どつさり有るんですからさ。」
妻君は急にはしやいで口調で云ふと女の手を取つて無理に立上つた。
「だつて、今夜は……全く困つちまうわね。」
小柄な女は體格の好い妻君にだきすくめられて蓮葉な笑聲を立てながら引きづられる様に立ち上つた。
要三は長火鉢の前にあぐらをかいて貧乏ゆすりをしながらさつきから何所かくすぐられる様な妙な氣持をして默つてジツトと二人の女の様子を眺めて居た。妻君は女の手をシツカリと握りながら、
「サアお歸りになれるものなら、お歸りなさいましな。」
と笑ひながらこう云つてからかつた。
女は手をつかまへられながら笑つて居たが、
「私、家で叱られたら貴方の罪にして終ふから好うござんすか、エ、それでも好くつて？」
女はこう云ふとわざとらしい表情をして流目に要三の額をチラと眺めた。
「いつ迄もそんな云ひ掛りをして居ないで宿る事におしなさい。」
要三は笑ひながらも目に女を押へる様な強い色を見せて妻君に向つて云ふ様な口調で云つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

長い間眠つた樣な靜かな生活になれた要三の心は不意に明るい光線が心の中迄もさし込んで來た樣に感じた。

始めて女の顏を見た時には別れて居た間にすつかり年をとつて終つたのに驚いた、肩の肉づきなどが細すぎる程無くなつて終つて何となく淋しい暗い陰がつきまとつて居る樣に感じられた。

が、それもだん〳〵とかうして向ひ合つて顏を見て居る内に話の調子に乘つて手眞似をするくせや、笑ふと小供の樣な笑くぼが片頰によるのなどが昔とさして變つては居ない樣にも思はれて來た。

要三は自然と女の心に吸ひ込まれてゆく樣に感じられた。

そしてかうして自分の妻と氣樂そうに仲よく話などをして居るのを見せられると何んだかだしぬかれた樣なこそばゆい氣持がしないでも無かつた。

二人の女は互にまきつく樣に寄り合つて柱によりかゝつて何か戯談を云つて居たが久らくするとまたそろ〳〵と火鉢の傍によつてきた。

「オヽ　寒くなりましたね、お天氣が變るんじやないかしら……」

「そうね……　降られちや耐らないわ。」

二人は鐵瓶を下して火をかき散すと目白押しの樣に四ッの手をかざした。

要三は丸々とした妻君の手のそばの青白い細つそりした女の手をジッと眺めた。ジッと沈んだ顏を

しながら心では女と新井あたりで宿つた夜の事などを思ひ出して居た。
「貴方、もう十一時半ですよ、早くお休みなさいましな彼方に床をのべて置きましたから。」
妻君はフッと眞面目な顔に返ると遂ひ立てる樣に夫の横顔を眺めた。
要三は妻の聲を聞くと何とも云はれぬ不愉快な氣持がして來た。馴合つた同士の仲に不意に知らぬ旅人か何かに顏を出された樣なとけ合はないいら〱した心持がして來た　て否だつたので返事をしなかつた。
「此邊は靜かでいゝわね。」
「エヽ、それにね、割合に新しいお魚が食べられてよ……　牛込は全くお魚は駄目ですね。」
「エヽ　全く！　私　お魚のおいしいのが何よりだわ。」
女等は眠むさうな顏をして時々こんな話を續けて居る。
要三は不意に凧の糸が切れた樣に立ち上ると、
「オイ　寢るんだ！」
と險の有る聲で云つた。それから
「じや、房子さんお休みなさい。風邪を引かない樣に……」
とわざとニッコリして情をこめて眞向面にジッと女の顏を眺めた。
「有りがとう　ではお休みなさいまし。」

女は男の目を大膽に見返すと取すまして丁寧に頭を下げた。
要三は妻君が襖をピッシャリしめて出て行くと今迄つぶつて居た目を開けて茶の間の方をジッと見つめた。
妻の姿が目の前から取りのけられると始めて心持がゆつたりしてきた。
人に隱しておいた物を取り出して見る樣な心持でソッと女の姿を新しく思ひ浮べた……
「まア、そう　ちつとも知らなかつたの。」
と茶の間から細い透る女の聲が聞えてきた、と其あとからしきりに調子づいた妻君の話聲が續いた。
要三はそんな時には目を見はつて相手の顏をジッと見つめて居る女の樣子が襖をすかして見る程ハッキリと思ひ浮べられた。
……女を想ふ情が潮の樣に胸におしよせてきたけれど女があまり平氣な樣子をして居るのを見ると忌々しい樣な氣もされた。
あんな二人の仲であつた事なぞは夢にも知らない樣な顏をして……それで心からあんなに平氣で居るのだらうか要三には女の心持が解る樣で解らなかつた。
彼の時分から見るとそぶりと云ひ言葉づかひと云ひすつかりくずれて終つて居る、
もうどこと云つて張りつめた調子の高い生氣は見られはしない、そして何となく色々な昔景が女の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蔭に隠れて居る様にも思はれる。
　然しその様な事は女に對する要三の心持を少しも損ねなかつた。却つて昔の自我の强よい空想許りを逐つて居た時の女よりももう隠しても隠しきれぬ暗い蔭のつきまとつて居る今の女の方が不思議な程なつかしく胸に映つて居る。
　要三は彼の當時お嬢様のお相手をして居る様な何かしら女に壓迫されて居る様な感じがしてどうして心持がとけ合はぬ様な始終あきたらない心持のして居たのなどを思ひ出して見た。
　そして長い間關係の有つた頃の女よりも今日半日向ひ合て暮した女の面影の方が幾倍も濃い印象が心に殘つて居る。女の云つた言葉やそぶりが要三の心に深かく喰ひ入つて離れない。
　要三は此儘女と自分との間が路傍の人となつて終ふのとはどうしても思へなかつた　二人はやはり昔の様な間柄でなくてはならない様な氣がして耐らない。
……二人の間にはもとより何の約束も責任も感じて居たのではなかつた。唯いつともなく近づいてまたいつか離れて終つたのであつた。
　もう一度、今度こそはしツかりと女の心と自分の心とを結びつけて終ひたい！
　要三は猛然と何かに向つて行く様な心持になつた。そして女を憐れむ様な情がしきりに起つてきた。
　要三は小鳥の様に今女が自分のふところに飛び込んで來たのだと思はれた。自分に背いた女が再び

自分に歸つて來た樣な喜びが胸に滿ち／＼た。
此まゝ女は長く／＼自分の家から離れないのではなかろうかとそんな氣持もしてきた。

　要三は手足を長々と伸して目をとぢるとジッと耳をすました。女の聲だけでも聞こうとした。健やかな體の溫るみは直ぐ夜具の中にこもつて自然と胸の中迄もあたゝまる樣に思れた、と何とも知れず柔らかな淋しさが迫つてきて、要三は女の體を思はずには居られなかつた。女等は時々何かしら寢床の中で話し合つてるらしい聲が聞こえて居たが、いつか其も聞こえなくなつてシンとして終つた。

　要三は家の中に物音が絶えるとますます／＼心の目が大きく瞳を見ひらいて來る樣な氣持になつた。そして何かを見きわめ樣、捉ろうとあせつて居る樣でもあつた。

　不圖、もう大分更けて終つたらしい頃に自然と要三は目がさめた。すると何か大切な時間をむざむざ眠つて終つた樣な後悔する心が起つて來た。

　要三は久らくジッと眞暗な天を井見つめて居るとハッキリと宵の内の有樣が浮んでくる。とわけもなく神經が興奮してきてかすかに手足がふるへて居る。要三は今自分の感じて居る心の狀態を思ふと自分ながら馬鹿／＼しくなつてくるけれど、それでも其を押しづめる事も出來なかつた。

　要三は久らくまじ／＼しながらまとまりのつかない空想をして居たがフッと起き上つた。そして靜かに襖を開けると茶の間を通つて行つて女の寢室の戸をあけた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蠟燭の灯の様な弱々した光は室つ中一つぱいに煙の様にたてこめて居る。

要三の目には壁の色も女等のかけて居る夜具の色も見わけのつかぬ同じ様な黄ろい濁つた色に包まれて見えた。

室の中に體を入れるとよごれた空氣は生ぬるく要三の體をいだく様に身にまつわつてきた、そして女の寢息と油臭ひ髪のにほひがかすかにたゞよつて居る……要三はそれさへなつかしい様に思はれた。

二人の女は夢さへも見ては居ないらしくいかにも自惰落なそして無智な柔弱な動物かなぞの様に正體もなく眠りこけて居る。

お互に脊をむけあつてがつくりと束髪のくづれて居るのも知らずにねむつて居る二人の姿を要三はジッと眺めた。らんぷの光は妻の影にさへぎられて女の片頬と小鼻の所にわづかに黄色な光りを投げかけて居る許りで目のふちから下の頬には暗い蔭がゑぐつた様に流れてゐていた〳〵しい程やつれて見えた。

時々深い寢息をする度に肩から胸がかすかに浪をうつて居る。

要三は女の寢顔をつく〴〵と眺めて居る内に心をしぼられる様な苦しい氣持がして來た。

自分と此女との間には何か深いか因縁が有つてどうしても離れられぬ様に結びつけられて居る様にも感じられた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あー」

かすかな吐息が妻君の口から洩れるとクルリと寢返りをして白い顔をこつちに向けた。

要三は思はずハッとして急いて障子をあけると眞暗な廊下に出た。

側屋から出て來ると要三は何氣ない風をしてまた女の寢室を通つた。

妻君を見るといつの間にかまた壁の方を向ひて終つて居た。女はジッと身動きもせずにさつきのまゝまで眠つて居る。そして細い小さな手を二ッ重ねて枕の傍に投げ出して居た。

要三はふと其を見ると腰をかゞめて恐しい事でも犯す樣なむづ〳〵した心持をしながらソッと其手を握つた。しなやかな手は昔のまゝに柔かい……要三は不思議にもはかない或悲しさを女の身から受取つた樣な心持がしてきた。ジッと女の顏を見つめながらせめて夢にでも女の心に此自分の心持を通じさせてやり度いと思つて其手を握りしめた。けれど女は全く何にも知らぬ樣に安らかな寢息をして居る。……

要三は床に入つてからもカッと興奮した神經は中々眠られそうでは無かつた……。

……小笠原さだ……

—— 客 ——

日記の中より

○

四年前に別れてそのまゝのお蝶さんに會ふべき其日が來ました。うれしい様な、けれ共彼の華やかな姿、そうして四年の間、せつせとみがきあげた、なほ美しいお蝶さんを思つて見ると、女らしい不安に、かうぢつとしちやあ居られない様な氣がして、立つたり居たり、そゝくさして居ました。お午ちよつと前に、車に乘つたお蝶さんの丸まげ姿を、家の門の前に見た時、私はまつて居た其の人に、會つた様な氣がしませんでした。お蝶さんは、處帶の道具を、あつちこつちに持ち運ぶことに、つかれ切つた様に、氣力のない血色の惡い顏になつて仕舞ました。もうあのかるたに敗けて、泣いた昔の娘時代の動き廻つて居た目は、どつかに消えて仕舞つてました。

座敷に入つて、お蝶さんはどうも、誠に無沙汰致しまして……」と、丸まげを下げて挨拶をしました。一番形とても、いふんでせう、馬鹿に大きくて重さうに見えます。兩手をついて、物を云ふ時に、額の處に、皺をよせて上目を用ひながら、上から落ちてでも來るのが、氣になる様な風でした。

別れて會はなかつた間に、お蝶さんは「どうも誠に無沙汰を致しまして……」と、丸まげの頭をさげる術も、覺えたものとみえます。

お母さんの腰巾着て、お母さんに何か云はしちやあ、桃割の頭をひよこ／＼下げて居たあのあどけない四年前の姿が、レンズの奥にしまつてある私の目にやあ、〇〇一代記のお芝居でも見て居る間の様な、心持がしました。

お蝶さんは、父とも話しました、母とも話しました、私にも話しかけました。私はあの昔の美しい夢の風呂敷をお蝶さんの前に、開け様としました、けれ共、お蝶さんはそれよりも、母と話す方が、面白いらしく見えたので、私は如才なくその風呂敷包みを、引からげて、裏庭の方へ引あげて來ました。

私は立ち乍ら、ようくお蝶さんの顏を見ました。さうしてあの淋しい唇から、もれる何も聞かないでも、一四年の間の姑さんにする氣苦勞といふものが、よく讀めました。よく讀めた私の後姿を、お蝶さんはどんな氣持で、一見送つて居たんでせう、くぼんだ、うるほひのある目で、ぢつとみて居ました。

夕方、大變に早く／＼、歸つて行つてしまひました。

皆てしきりにとめたんですが、小供が待つて居るからと云つて、聞きませんでした。

お蝶さんの、横須賀の一家へ歸つて今頃は、小供に添乳をし乍ら、久し振りで東京に出て來て、目や耳に觸れたこと、そうして私の事なんかも、考へて居やしないかと思ふ頃、私も床の中で、お蝶さんの身の上を想像してみました。

すつかり眞人にもたれかゝつてしまつて、蔦か、朝顏の蔓の様

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な、女も、まだ居るんです。
十二時がさつき鳴つた、もう眠らなくちやあ、ならない。私は寢床の中でお蝶さんから貰つた、白い縮緬のきれを、何に使はうかと考へてみました。

○

こゝ、伊豆山へ來て三日目になる朝、私は姉さんと二人で、山を下りて村のお祭の賑かさに、醉ひ込み乍ら歩いてみました。
風といふ風、涙といふ涙、色といふ色、それ等を、春らしいいいといふ眼鏡からのぞく樣に、ただもうのんびりと、すつきりと、さらく／＼と、するのどかな穏やかな日です。
海邊に立つて、振り返つて見ると、なだれになつた坂道に、青い綠の幕を、櫻色の幕とを、ながした樣な色彩です。そうしてその青い綠の幕と、櫻色の幕とを、人といふ黑い色で、縫ひ合はせて居る樣に見えます。この邊の人達は、今日と明日の、お祭をこの上ない樂しみにしてゐるんです。そうして夢中になつて、あの急な坂を上つたり下りたりして居ます。淺黃と樺色の旗が風にゆられて、緩くひらり、ひらりとして居ます。あれが俄造の芝居小屋だそうです。村人の歡樂の一手販賣なんでせう。爪先を上げて、また山の上の御寺へ歸つて來ました。本堂で和尙さんが、カヽポコ、木魚を鳴らして、お經を讀むで居ましたから、邪魔にならない樣に、わざと後を通りぬけて、自分達の部屋に入りました。
机の上に手紙が二通。一つは姉さんに、一つは私に。その返事を書いて夕方、また山を下りて來た時に、丁度新道に出きつた處で眉毛をおとしてぞろりとした男に、あひました。さうして後から、女や小供が、多勢口々に「武夫さん々々々」と呼び續け乍ら、ついて來るんです、ぞろりとした男は、時々振り返つちやあ、何か、かんか愛嬌を、振りまいて居るらしう御座いました。
私は側に立つて居たおぢいさんに、こんな言葉を聞きました、「あの男が今日の芝居で武夫さんになつたじあ」と。大方は不如歸でもやつたんでせう。
道の端には、無趣味なこれ等の人達を、よろこばせるいろ／＼な、都のすたれ物がこゝには光りをはなつて並むで居ります。綿縮緬か何かの襦袢の袖から出る骨つぽい若衆の手が、盛んに小錢をつかむで、振りまいて居た。かうして大海を知らずに暮す、井の蛙は却て幸なのかも知れません。

○

二三日前に、電車の内で美ちやんに會つた時、今日の踊りのお浚に行く約束がしてあつたんで、お午から出掛けました。
兩國で電車を下りて、川のへりを、あちこちうろついて居ました、お午から行くと約束して置いたその約束通りに行くのが、妙に極りが惡い、またさうすべきものではない樣な氣になつて、時間つぶしの爲になんです。

〇〇〇へ入つて行つたのは、丁度三時頃でした。

もう場内は一つぱいな人で、後の方へ座らせられました、入つた時には、小さな小供が「將門」を踊つて居たのです、きらびやかな幕、沈靜といふことの塵ほどもない處、三本の絲が切れたかと思はれる冴えた撥の音、それ等の内に、私はベツトリとどろけ込むでしまつて、一時自分といふもの ゝ知覺を、忘却して居たんです。そして知覺の忘却をくゞりぬけて、第一の事は、其の原因の反感を起すことなのです、いはゞこれが私 のくせの樣なものです。すべての物に、動搖のない秋の晩、遠い尺八の音にまきつかれ乍ら、枯れた野原を倒れたまゝかすゝきをふみある 時のことを、思つてみずには居られないんです。

自分がかうした渾沌たる内に、居ると云ふことを知覺するには「反感」といふ水を、頭からあびなけりやあならないのでした。

冷たい水を、びしやりとあびてはきりとした私の肩を、ポン〱と輕く叩く何かがありました。振りむくと螢下 地に結つた美ちやんの、頭から上だけが、居並ぶ人達の肩越しに 見えたのです、「こつちへいらつしやいな」と、肩先をつまむで引つぱられましたまゝに美ちやんについて、廊下へ出ました。そうして樂屋のうらの方へつれて行かれました。

「れ今日はゆつくりして行つてもいゝんでせう」と螢下地を、大事そふにいじり乍ら云ひました。

でも私は五時から、文藝協會の方の有樂座に行くことになつているから、そんなに長く居ることは出來ないのです、もうぢきに歸らなくちやあ。

「そんなら私の蝴蝶をみたら歸つてもいゝの、それまでは歸さない」と美ちやんは、まるで强談です、見てくれといふんじやあなくて、見なければならない義務でも私にあるかの樣な風です。

「私の番が來るまでこゝに話していて頂戴」と云つて樂屋のいろ〱の支度や、身づくろひをして居る人達を。あれが何處の雛妓で、かれが何町の娘、それが〇〇屋の妹と、そんなことを數へてくれました。一體私はお踊のお浚なんかに來たのはこれが初めてなんです。たゞ好奇の眼をみはつて數へられる方をみむく許りでした。美ちやんの番が來ると、私の側を立つて、鏡の前に座りに行きました、顏を造り乍ら、隣りの此糸になる女と、話をして居ました。美ちやんが黑い裾模樣の着物を着けて、紫の頭巾をかぶつた時、私は廊下を傳はつて、見物の席へ來たんです。

美ちやんが、舞臺に出た時、見物はわれる樣 に手を拍きました。私はあのむつちりと肥つておしげの ない顏が、いかにも六代目によく似てゐやしないかと思ひました、そうした顏が、江戸紫のきれに包まれて、居るてです、此の絲にな つたのは、歌舞伎座の門之助の樣な顏立の人です、

二人が新内の流れる樣な節 につれて、もつれ合ひからみ合ひなよやから身振、手振は、皆を夢の國に 誘つて行きました、私は蝴蝶がすむとすぐに、のぼせた顏を外の風にあてゝました、

兩國橋の上に立て、ひやりとした風に頰のほてりをぬすまれると同時に、もうさつきまでの私ではなくなつてしまつたのです。

これから有樂座へ行くのです、今迄とまるでちがつた趣味の方向に進むで行くのです。

これを書いて居る今は、そこから歸つて來た許りの所なのです。趣味の半日の日記を、こゝまで書いてしまふと、もう目がつかれ切つてしまつたので、殘つた分は明日のことにして、もう床につかふと思つて居ます。そうして今夜の一寢りて、あのマグダといふ女をすつかり忘れて仕舞い度のです。それについて私の寢る前に、これだけのことを書いておきます。

○

「叔母さんはもう歸るの」と、立ちかけろ私の袂を、四ツになる可愛い姪の手が、おさへてくれました。ほんとにくれましたと云はなければ、すまない樣な氣がするのです。そうしてあの芝居の○○別れの場つていふ樣な事を思ひ出して、自分もあゝ云ふ風に行きつ、もどりつつていふ樣な身振がしてみたい心持になつてしまひました。仕方なくそつとかくれて、出て來たのです。

後で私の可愛い姪は、さだめし私をさがして姉を困らせたことこらふと思ひ乍らも、三の輪行の電車に乘りました。

紅吉さんの所の二階の人となつてからは、極めておとなしい、つゝしみ深い女となりすまして、だまつて皆さんの話の聞きてとなつて居ました。

一體私は、ひとりなかに出て自分で話すよりも、人の話すのをだまつて聞いて居るのが好きな性の女なのかも知れないのです。何處へ行つてもあゝなんですから。

きつとあの時の皆さむは、ありやあおとなしい人だと思つて居るにちがひない。

そうして、私はあのお膳を運むだり何かした女の人だ大變氣に入つたのです、たゞ何といふことなしに、くろく\撫でまはし度樣な、好きさなのです、それからも一人前の袴をつけた小さな男の子。それもまだ目に殘つて居ます。

可愛い口から「かづゑさんゝゝ」と呼ばれるそのかづゑさんになつてみ度い樣な氣もしたんです。そして樂しい心持を抱きつゝ歸つて來たのが、もう七時に近い頃でした。―こいそ―

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

或る夜と、或る朝

九日の夜る——

時千の今朝の手紙が氣にかつて仕方がない。——拾九日の晩迄には、儘さんと、會はればなりますまい、私の命は短くなつた、けれど私は貴女の爲めに、眞實の私の心、母より、子供より又、私の、夫より貴女を想つてゐると云ふ、その心が、通じる時本當に、本當に通じる時が、もうそこに來た、そこに見へる、と思ふと私は、涙も出ません。……死、……勿論私は、私の想像してゐない、不幸ないやな場合が來たら、私は死と云ふ手段より離れません。けれど貴女は、死なせやしない。誰か貴女をけ…れど儘さんは、一體なんと、云つて話をずるでしようもし、おとなし素直に、家に又歸へりたい、今迄は私が全く惡い、お母さんにも又、子供にもお前にも本當に濟まない、赦して下さい、惡かつた、計し言ひ出して、安全な落着はかり願ふような男だつたら……あゝもういや、いや、私はその男を殺してやります。

全く、殺してしまいたい。

私は罪人になる、……けれど私は、貴女だけと住める事なら、……噯紅さんも一所に殺したい、私は、私は、高潮しきつてゐます、……『死と生』……私の肉體は、ずたずたに、裂れそうです。——

今夜、とにかく逢つて見ないと、いけないと、思つて煙草を懐に入れて、マッチを探がしてた處時子が來た。青い顔して大きな眼を座えたまま室の前にだまつて、立つてゐる。

『お入り、どうしたの、』と手を引張る刹那、いきなり首につかみ着いて泣き出した。じめじめする涙の跡に、ホツレ毛のかゝる氣持惡さをどうすることも出來なかつた。

一體、ありやどうする氣て來たんだろう。一口も話もせず只泣いた、歸へつてしまつた、あの狂態お正は、心配して散髪屋の先まで追ひのけて行つれが、足が早いので追ひ付けないと云つて、歸へつて來る。

さんざ、馬鹿にされた樣な厭 味な、口惜い樣なおかしさをこらへて、すぐ手紙を書いて送る。——今の狂態はありや何事ですか、私はあゝしたお芝居氣たつぷりのものを、無料（ただ）て見せつけらよゐのは大嫌い。氣味の惡い、すごい、青い血走つた貴女の今夜の樣子は、どれもこれも、みんな厭氣をました計りてす。

貴女に、今、色々書きたいがよします實は今夜私は、今朝の手紙を見て心配と、不安だつたので、出かけるつもりてした。とにかく貴女には、まあ當分、會はない、逢いたくなりま

した。——あゝした女でもなかつたが、…………今迄やつて來た面白かつた私の仕事が鮮血の中に吹い込まれてしまつた。私はシストランの女でも情緒にしたい。

九時過ぎてゐた、けれどふみにしられた感情のつぐないに淺草に行く。銘酒屋の女と、自分の女が一つに合つた樣な氣がしたから、廻らずに仲店に出た。カラコロロロカツと面白い聲を出す、おもちやを買つて、鳴らし乍ら小間物屋の家をたづれた。

祥ちやんの戀してる、娘は火鉢をかゝへて、小說物を讀むでゐた。ザイツト立つて視線の合ふのを待つても見たが、ひよつと馬鹿らしさがこみ上げて、引かへした。

雜居屋の、くすぼれた三階の明りが、妙になつこくなつて上る自分獨りの勝利を願つて。十一時歸へる。女から電報が來てゐた、——カヘツタ、ナイテハイナイ——

とろんとした眼を恐ろしそうに、氣づかはし氣にお正はのぞく、いゝの、お苦勞だつたれ、さあ、お休みと云つて障子を閉め切つて電氣を消した。一度に、まさまざまの妄想に襲はれた。暗い枕元の棚から手探りてウヰスキーを下して飲むだ——疲れの出るのを待つて眠る。

十四日の朝さ——

死ぬ迄、自分自身が悅むで、嬉しがつて書き殘す日は、來ないだらう。私も來てほしくはない。日記と云ふ物がもつと秘密にしたわせひ、そして堅實なものなら、私は昨夜の凡てを書きたい。けれど今凡を書くに、私は、あまりに臆病だ。あまりに、初心だあまりに、子供らしい。

自分の日記にすら自分の今のこの樂しい、この嬉しい、勝利の凱歌をしらせるのが、いや。私はこの日の續くかぎり日記はつけない。人と話もして見たくはない只——何處迄も何處迄もこの溫味がこのぬくみが、このさゝやきがこの胸の痛ましさが：嘘、暗い夜の眞暗な室のさゝやきどれだけ初心な私を心を痛ました? けれど黑い拂眞黑い線が消えかゝりそうなMABOROSHIの上に引かれたら……私は、どうしたらいゝのだろう。抱擁接吻それら歡樂の小唄は、どんなになる事だろう!?。こうザイツト胸を押へて思出しても、私の血は煮えくり返へつて 盛んな音をたて狂ひ廻ふ日記に落すインクのおびけたこの顏へ、はにかむ樣な、このじたゝり。何處から何處迄も血が走つてゐる血管のふくれた、うなりぃ： 嘘、願ふ、事の激しさ、

私の心は、全く亂れてしまつた、不意に飛出した年上の女の爲めに、私は、こんなに苦しい想を知り出した。少年の樣に全く私は囚はれてしまつた。疑 をはさみながら、異しさを味いながら、私は、見えてゐる暗い處に、だんだん引きづられて行く、けれど赤い花が咲いてゐる毒の有る赤い花、あゝ私は毒の有る花を慕つて、赤い花の咲く國を慕つて、暗い途な、どこ迄歩ませられよう。不意にあらわれた、年上の女、私は只それに

よつて、生きて行きそうだ、又、行かればならぬ、冷たいと思はせて泣かせられる時も來るだらう、けれど私は、戀しい、私は如何なる手段によつて私自身の勝利が傷けられても、その年上の女を忘れる事が出來ない、DOREIになつても、いけにへとなつても、只　抱擁と接吻のみ消ゆることなく與へられたなら、滿足して、滿足して私は行かう。この立派な私の仕事が消えずに續かる迄、私は日記捨をてる。血の動かずなる迄、私が私の凡を忘れてゐる迄。そうして私は逢へない年上の女に、さまざまの日記をつけて置く。　（十四日の朝終りの日）

拾一日

銀の小壺に、露西亞更紗で袋をこしらへた。灰色の壁に張りつけてゐた木版畫を今朝から東の窓ぎわの壁に移す。

富本氏よりお祝ひに下すた黑い壺（木版）は、古代模樣の絹しぼりの中に留めつける。

和蘭陀時計の齒車か動かなくなつた、一つ一つ、丁寧にとりはずしてアルコールでふく。午後三時、永井さんがウヰスキーなつて訪ねて來れた、十八日の晩に瀨濱準吉氏と京都に立つといつて。SALONの好い奴も澤山もつて。五時歸宅。

夕食をすまして、『讀賣』の切拔を始めた。未明の『愚鈍な猫』は赤い硝子の箱にしまつた。

木下李太郎氏の『誘惑及び模索』を讀みかへして、少からず、氏に對して感服する。

松井さんから手紙が來た、有樂座の『舞臺稽古』について。九時頃H氏來訪。ウヰスキーとベルモットを交ぜて飮む『讀賣』の『好きな女』『嫌いな女』で大分話がはずむだ。拾一時少し過ぎて歸へる。富本憲吉氏と、らつてう氏に手紙をかく。

拾二日

今朝、室の眞中に黑い毛氈（モーセン）を引いて横になつて煙草を飮むでゐた。

するゝ酒倉の樣に思はさす隣りの家の屋根に、黑い烏猫が朝の淡い日當りに目を細めて私の室を、のぞき込むでる。

銀の小壺をぶつける眞似をした、はずみに內の煙草の粉がこぼれて眼に入つた。

八日

プリムダの花とシネラリヤの紫を買つた。

十日

讀賣の文藝欄の『故郷』の合評に、ペンリシグトン夫人の評が出てゐた。

東儀氏のケラー博士について『日本の俳優が外國劇の役柄を表はすには常に困難を感じてゐるのだが氏の望はそれと好く調節されて居る』この點は、同感だつたので朱點をつけて置く。

拾四日

拾二時にRとHとY氏が歸へる。

Rが『朝飯の時刺身がないとお馳走らしくない、そしてお飯

もおいしくない」といつてゐた。十五分程前に氣づいてゐなけりや、とんだ不機嫌な處を拜見しなけりやいけなかつたのに。……歡樂の跡の淋しみは、非常につらかつた。

ミーチングで疲れたのに、一晩眠むらなかつた爲め、げつそりしてしまつた。

今朝起きて、眼が痛いとかはれたとか、云つて大さはぎやつてゐたのは、R氏と自分だつた。エマーソンを讀み乍ら二時半迄殘る。

三時過ぎ萬年山に行く、薄暗い本堂でR氏が青鞜の研究會の掲示をしきりと張つてゐた。今朝あれから歸へつたら、家の人に、非常に疲れてゐるらしい。目がやせたなんていはれたので眼鏡をかけたと云ふ。

疲れた、弱々しい眼を揃へて、いつになく、はにかみなくR氏と話合ふ事が出來たのも、どうやら黑眼鏡のおかげらしかつた。

青鞜社研究會の看板は中々見事至極神妙にかゝれてゐた。R氏が書いたと云ふ事だけでも人が知つたら見物人が澤山有ろうよ、と云つて笑つた。

午後五時終る。

Canto III And as a man Whom Sleep hath seezed I fell. 迄。

今日青鞜社の門標を打つた。萬年山の住職の名札はその爲めに位置が違つた。R氏は、なんだか氣樂になつたと今更らしく優しい事を云ひ出した。追分町で別れて歸へる。

N氏より葉書が來てゐた。

早速返事をかいて出して來た。

眞赤い八百屋のトマトをいくつもいくつも、あんまり手心のよくない包丁で立ち破つた樣な集りて、本當におもしろく思いました。

人から、よく伺つてゐた貴女に始めてお目にかかつて、やつとはつきり致しました。貴女が私を好奇心で見て下さいました通り、私は好奇心でいくらかお待ちいたしておりました。

けれど私自身が聞ひた貴女は『太平洋』に出てゐましたによりお目にかゝつて少しでも貴女を見せて頂いた事について大變に嬉しく考へてゐます。『支那の馬』はやつぱりお忘れになりましたれ、私、もしやと氣づかつておりました。

『馬』は茨佐男さんに渡して置きました。「おかき大阪から荷物が着いたち『虎』をもつて行きましようになつた或處には煙草をかむで吐き出した樣ないやな處も有りますが……」私は、こゝらですつかり敬服してしまつたらしい。

いづれ近い内に紅吉として伺ひます。

十五日

苺を買つて、ビールを抜く。

私は今日一日、黒いテーブルの前でおとなしい仕事をした。

六日

妹を戀してゐた、とK氏から大きな聲て葉書をよこした。そして、妹も又僕を嫌いてもなかつたと云ふ意味も、ほのめかして。

K氏をよむて、さんざ毒づいて、冷笑して、そして切りさいなみたい樣な氣持にもなつた。

目の色迄にごらせて女を戀した、信實男よ、

私は限りなくお前がいとしい、可愛いゝ、と小さな紙切れに書いて、捨てた。

信實男から戀をものされてゐた、妹から、また金絲鳥の卵のかへらないこと、と目白が今脳て死にそうになつてる事を、きづかはしそうに知らせて來た、この妹にあの男がと思ふと、大きな聲てマグダ樣に笑いたかつた。

——紅　吉——

紅吉の夢　——五、一一八の朝——

ハダカの太陽が(丁度ゴホオの描いた樣な)直角に光つてゐる。下には大勢の裸體女が、停車場に着いた時のあわてさ程度で動いてゐた。

一番、最初に立つてる女は、丁度生薔の樣な色とそして艶を有つて、紅木綿を腰部に卷いてゐた。二番目と三番目の女は、眞白い皮膚とそして眞赤な乳首を、かしげてゐる。後の赤裸の女は、どれもこれも眞黑い皮膚で、何人と數へる事も出來ない程黑い塊りになつて立つてゐた。

手と足と、首が時々動くので人だと知つた。

紅吉は、銀のムチをもつて、一人、一人、女の前に立つた。そして、胸の軟かい肉を、冷たいムチでたたいてゐた、刹那、眞黑な棒が幾本ともなくそれらの夢の畫像の上に・走りかぶさつた。

その時夢のりんかくが・はつきり長方形に見えた。私は、なんか暗示されたのぢやないかと考へてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

紫陽花

恙ありと違約紫陽花に使來る

包みしを探りあてし秘事紫陽花に

戀ききし雨に灯さて紫陽花の

埋立地建築も半ば青田凪

夢の告氣病みしが青嵐の旅に癒し

冲釣りの鮹(たこ)値切ればつく子初鰹

惡戯の陷穽(おとしあな)も磯の梅雨晴れや

潜ぐを習ひし男一人鮎漁の戻るさに

諸聲耳につく日頭痛を罌粟に寢し

閑居熱にうなされて覺むれば青鷺の

蟄居面會を斷つと便りあり青嵐の宿

新婚を温泉にさけし青嵐の旅

人生觀ぞ不安なる罌粟散りて（戀を得て白雨にこの句あり、——K——）

——白雨

編輯室より

■私達同人のミーチングを先月の十三日午後一時から、根岸の紅吉の家で催した。

今年の新年宴會の記事で同人の二三は非常に怒つたり、困つたりしたことを知つてゐる。

勿論我儘な男達からは强烈な皮肉と、嘲笑と、故里の兩親からは多くの誤解を、ものされてゐる事も知つてゐる。

それで憶病な女は、見合す事に贊成した、この記事を書くについて。然し憶病が生むだ大膽は、是非執る可き仕事の一つとして、我儘な男の前に、又其他の人々の前に、さらけ出させる事に勇氣を與へた。

私は、此の記事を書く前に、私達同人がミーチングの晩に、日本酒と、麥酒と洋酒の一二種を大膽に飲み合つた事を話して置く。

正直で憶病で、そして初心な私達には、飲むだお酒けの名前を踩せるだけの勇氣が缺けてる。悲しいことには。

黃色のお酒。桃色の酒。靑く光つた洋酒と書いて置いてもかまわないが。私達は、何處迄も私自身を僞られなかつた。今の場合。

私達同人は、決して世の人の叫ぶ樣な新らしい女ぢやない、私達は反抗と虚偽を全く知らない。空虚な私達の今の生活には同人のみんなが泣いてゐる。私達は、世間の人に、私達の生活を話してやりたい。何處迄も眞面目に、正直に、仕事を執つてゐる私達なの。集つた同人は十三人。みんな水道の水とサイダと、そしてラムネや、蜜柑水に醉はされそうな人ばかりだつた。それでも私達同人は紅吉の「陶器」と、初舞臺だつた林氏のマリーとの成功をよろこんで祝杯をあげた。さうして同人自分自身の勝利の生活に祝福の祈りを捧げる事は忘れなかつた。

紅吉の案内狀は、恐ろしく丁寧なものだつた。

桃色のお酒の陰に、やるせない春の追憶を浮べて春の軟い醉を淡い悲しみで、それからそれに、醒めて行く樣に、私達は新らしい酒瓶から第二の盃を搬び出した。そして私達の仕事に異大な祝福の祈を捧げ乍ら靑いお酒を汲み合ひたいと思ふ。

來る十三日午後一時から紅吉の家で同人のミーチングを催します。

紅吉は、黃色い日本のお酒とそして麥酒と洋酒の一二種とすばしこやのサイダを抜いて待つて居る。

けれどMENUは、めいめい一番好きなものを食べ合ふ方がいゝと思ふ。

それで紅吉は、最も善良な、貴女の庖丁使となつて、それらを作つて置きます、十一日の夜迄にすきなものゝいくつでも知らせてほしい。紅吉は、その日、その夜の來るのを、小供

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の樣に數へて待つて居る。さよなら。

葉書一枚に、一々書いて出した紅吉は、同人中での律義者である。

これだけの案內狀に、まだ紅吉の家として、繪圖までついて有つた。紅吉自身は、「疲れたる代書人と云つてゐた、その當時。一時が三時近くなつても、元氣のいゝ同人がみんな集らない。紅吉は、隨分、うろたへたさうだ。夕方に近い頃、十人と一人集つた。紅吉の室は、隨分にぎやかだつた。文藝協會の『故鄕』と自由劇場の『タンターヂルの死』と『道成寺』について、Rと、Hが赤くなつて話してる、

赤い血に染まつた手が山の上から見えた時の事が夜床に就いてから眠らせなかつたとHが云へば、Rも、『そうだあれには、少し氣味惡さを覺へた』と云ふ。

誰かが隅て大きな聲て、自由劇場て此の間桃色の火事が有つて、きれいだつたと皮肉ると、Mは宮戶座て此の間キネオラマの火事を見たと笑い出す。

和蘭陀時計の下ぢや、TOMNと笑さんが小さい聲て話してる。眞黑い机の上の支那馬をいぢくり乍ら、Tと紅吉は『日本畫と洋畫と繪かき』なんて話をしてゐる、時々大な聲を飛出させる紅吉の顏をヂロッにらむのは、叔母さん役のY。

神經質のNとHは新年宴會の記事の事でまだ心配そうに、色んな評判をいつてゐる。

そして、今度の記事は、なるべくおとなしやれなぞ紅吉に話したので、紅吉は『驚いた、この神經質やさん』と云つた樣な拐てHの顏を見つめてた。

夜が來た。紅吉は、嬉しそうな顏つきて二階の一室に同人を案內した。

本當のミーチングは開かれた。同人は一番に、男と女の健康を祝した。それから、同人みんなの執るべき眞面目な仕事について最も盛んな祝福の祈を捧げた。

■先月の十四日に同人の中野氏からこんな葉書が來た。

今日は東京へ歸るつもり。「拾二日には、大阪の靑鞜社員の方々の好意て箕面へ遊びに行きました。

加藤みどり氏にも、逢つた。子供を連れて來られた若は人。

動物園に杜鵑の鳴合せ會が有つた、雨が隨分降りましたつけ。十日の夜には、旅宿へ木村幸子氏と岩野氏が訪つて見えた、話が前後したが拾二日には加藤氏、「おもたさのキユラッソーを飮み、バナナを食べビールを飮むて話した。夜も九時迄岩野氏の家て遊むだ。

この葉書も出していゝのか、いけないのかまだ。中野氏に、會つてゐないので、解りにくいが。本人の葉書を出した方が一番都合がいゝと思つて無斷拜借に及むだ。

中野氏は今月の上旬に大阪に立つた。

大阪の同人に會つて、面白い日を幾日かむかへた中野氏を在京

社員みんなが羨やむでゐる、

■紅吉は案外ずるい奴だつた。
研究會の揭示を書く筈に決めて置いて、遂々上手に逃げ終せた。正直でない筈のらいてうに雜役を、かづかせたのに、珍らしくらいてうは正直な人間になり終せて三昧の結果、今萬年山の裘に出してる看板にあのヤセ腕をたたいて、書き上げた。平常はさて置いて今度の仕事は、同人みんなで賞めて置く。

■有樂座で『マグダ』の妹になつたマクイは、同人の林氏。どつかの新聞に松井氏に、ついての有材だとかいて有つた。けれど本人はなかなか、あゝ見えても野心家らしいから、『ついて』位いぢや落着かないだらう。

■三四日前同人のMが紅吉の家に行つた、
そして色んな話の後から小說號の表紙は、本當に厭な表紙だとMが云い出した、そして誰？と聞かれた時紅吉は、只壘の目ばかり數えてゐた、Mは全く紅吉の書いた事を知らない人なので一層困つたそうだ。

■此の前の研究會、(阿部さんのダンテ神曲)に庫裏で大變話聲が聞えたので內心、みんなが氣にかけてゐた、すると、らいてうは立つて、間の戶を閉めて來た。會が終つてから紅吉が、『非常に氣がきいてゐると思つて感心しちまつた』といつたら、らいてうは、『實はあんまり眠くなつたから一寸立つたのだ』と云ふ。大方そんな事でもなけりや、氣がきく道理がないと思つた。

■林さんから、葉書が來た內に曰く『橫に倍の白雨、縱に倍の紅吉』と人の惡い事が書いて有る。
一層のこと、上野のパノラマと淺草の十二階とでも書いて來れたらよかつたに。

■靑鞜社の門標を十四日に打つた。
あんまり、きれいな標札なので紅吉はらいてうに、『人がとると、いけない』と盛んに心配してゐた。

■或る男が『君はペルモツトとウヰスキーを交ぜた樣な人だ』と紅吉に敎へた。
それから紅吉はいつも、兩方交ぜて飮むでゐるさうだ。

■小林氏は有名な江戶趣味、又有名な自稱江戶趣味だ、來月あたり、深川の年寄り藝者と少年の、戀を作つて出すとか云つてゐる。
なんでもいゝ。ただ內容の有るものだつたら、近い內に、自分自身の生活をするそうだ。
皆で遊びに行つて江戶趣味でも味つて來たい。

■どの新聞を見ても近頃は『女』と云ふ字にいろいろ變つた文句を書きたてる、
曰く　新しき女、好きな女、嫌いな女、曰く　寬の女　曰く　夢の女　曰く　女按摩
今度は、どんな女が飛出すか一寸面白い話の種だと思ふ。

■白雨は、らいてうのことなら、いうは白雨のことを、編輯室から

書きたがつてゐる。

けれど、それが兩方共に不利な事なので二人してとゝちかが書きかけたら、かきたてゝやろうと今盛んに、兩方がにらみ合つてる。そのうちどつちもを知つてる紅吉がなんだか、さきがけの巧名をとりそうだ。

■十五日發行の文章世界の青鞜社の老孃諸君へと言ふ記事を第一に見出したのは近頃過敏な紅吉だつた。らいてうは例のやうにフウンと受取つて暫くたまつて見詰めて居たが、こりや廿歳から廿二歳までの男がかいたんですれと言つて、青鞜社に對してこんな熱心な男のあるのはありがたい、うれしいと言つて眞面目に感心してゐた。そして創業當時から考へると青鞜社員も確に昨今意氣銷沈の姿だ。

今の處は何でもいゝからもつと本氣に、一生懸命にならればいけない。

眼の球の飛び出る位な三十棒を腦天に加へてくれるやうな親切な御仁はないかなあと嘆息してゐた。

■木内氏は戯曲の方に余程氣があるらしい。本號の喜劇延壽も其一端を示されたものだ。或人の話ではこれは二三年以前から書かう〳〵と思つて居たのをいよ〳〵この四月の休暇を利用して書き上げたのださうだ。同氏の爲めによろこびてゐる。そして第二、第三と發表されむことを同人等は期待してゐる。

■らいてう氏の圓窓より頁數の部合で本號には缺くことになつたが、實のところ氏は昨今右手で仕事をして、左手でラブをしてゐるので大多忙なのださうだ。

■氏といへば全く奇妙な音のする頭の所有者だ。一氏と同室で一日を過した程の人で其音に惱殺されないものはない。ことは何か考へたり、書いたりしてゐる間かひどい。側の者がヒヤ〳〵する位ださうだ。

■芳名を公表することは故あつて暫く遠慮するが同人の某氏はこの間新橋のステーションで小さな手鞄をすられた。警官が一體中には何と何がはいつていたんですと言つてもどうしたんだか容易に返事をしない。よく〳〵きいて見ると、其中は氏が命の眼玉がはいつてゐたのださうだ。眼玉をすつたスリこそさぞ驚いたことだらう。

■紅吉と勝ちやんは此の頃淺草の銘酒屋の女にのぼせてゐる。昨日も二人で出掛けたのださうだ。今朝もこんな葉書を受取つた。「私は悪い身體を無理に無理して、勝ちやんと出た、何處に、何處に、私は苦しい苦しい心の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にゐつた。銘酒やの女を見に行つた。…私は立派な男で有るかの樣に、懷手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、歸つて來た、その氣持のいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたなら…とあてのない樂しみで歸つて來た。私は元氣だつた。」とこんな趣味がいつまでつゝくことが見ものだ。

■青鞜社は今度本郷區駒込蓬萊町萬年山に移轉しました、原稿及其他の物もそちらへ御送り下さい　電話は大塚（下谷）三七七六番におかけ下さい。

■青鞜社研究會は毎週火金二回午後三時より五時迄萬年山の事務所で致して居りますから社員外の御婦人でも御希望の方は御出て下さい。いよいよ始めて見ると開始前の希望に反して出席者が案外少ない、殊に在京社員の不熱心なのは誠に殘念に存じます、本部のものがいかに骨を折つても人のないところには研究會は成立ちません　皆さんの御奮發を願ひます。

■毎土曜日の午後を面會日と定めて居りますから社員の方は御遠慮なく本社へ御話にお出て下さい。

■本社の基礎を強固にする爲多少に係はらず寄附を歡迎致します

■社員は毎月十五日迄に社費三十錢振替にて御拂ひ込み下さい

■入社御希望の方は原稿に添へて御申込み下さい、

■社員は隨時原稿を本社宛に御送り下さい。原稿は十行二十詰のこと。

■皆樣も御承知の通り與謝野さんは五月五日に新橋をお立になりました、原稿はあちらから毎號御送り下さる約束です、らいてうと紅吉とは本社を代表して當日新橋迄御見送り致しました、

■富山敬子氏への御入社承知しました。

次號豫告

習作の三（小說）	杉本正生
叔父ワーニヤ（脚本）	瀬沼夏葉譯
かさね（小說）	岩岡一枝
一幕物喜劇	上田君
飜譯	ポオ
俳句	白雨
評論	らいてう
未定	與謝野晶
未定	紅吉
乳（小說）	阿久根俊

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■寄贈書籍及雜誌

ブルネ　ビヨルンソン著

矢口　達譯（新陽堂發行）

イプセンのものは非常な勢で我文壇に紹介された今日イプセンの友人であり、又等しくノルウエーの詩人であるビヨルンソンは殆どまだ紹介されてないといつてもいゝほどである。思ふにビヨルンソンの作はイプセンよりも郷土的であるだけそれだけ他國人に容易に解されなかつたのであらう。自分はイプセンには味ふことの出來ないノルウエーの自然と生活を目前に見せてもらへるのを殊によろこむでゐる。島村氏の序文、吉江氏の跋がある。

自然（雜誌）

『創作』の後身として生れたもので、若山牧水氏平賀春郊氏等によつて經營されてゐる。詩と短歌を主として有るらしい。地方にヨタレの社友が持つ爲でも有るまいが、田舍ぢみた處もそこゝに見える。

新らしい希望に生れた雜誌の創刊號としては表紙が面白くない。けれど牧水氏の『手紙にかへて』を見て、少なからず自分達のことを考へて御同情をした。

三田文學
下町
北方文學
心の花
シバヰ
劇と詩
東洋時論
ザンボア
層雲
六合雜誌
俳味
十善寶窟
女子文壇

モザイク
早稻田文學
白樺
みづゑ
スバル
藝文
歌舞伎
紅塔
アララギ
ホトヽギス
短檠
學燈
新人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

附録

マグダ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事務所移轉

本郷區駒込蓬萊町萬年山內

青鞜社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

イレエネトリイシユのマグダ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文藝協會のマグダ

「故郷」といふ脚本について、全く不識であるといつてもよい位に、不用意で見物したが、それでさへよく理解する事の出來るやうに、まつたく好く、まつたく立派にズーダーマンの「ハイマート」（島村先生譯）を、文藝協會の諸氏は演じられたと思ふ。

前回の時評判の高かつた「ノラ」よりも、此處の所演の「マグダ」の方が、どれほど響が私自分に強いかといふことも、同感の念の鋭い私を舞臺へ引附けてしまつたのに相違ない。それは私ばかりではあるまい。ノラの心地に同感し、ノラの心地と同樣になりつゝある人、ならうとしてゐる人は多からうが、なつてしまつた人は極めて僅少なものであらう。さうなるとマグダの立場に――道德上の事は別として――家庭の新舊思想の衝突に、あゝまでの結果は見ないとしても、今日の人で多少觸てゐないものはなからうと思ふ。まして文藝を愛する女子に、其愁ひの味を知らぬ人はなからうと、言つてもよいかと思はれる。

マグダは更に誣られた結婚をこばんで家を追はれ、拾二年ぶりにて故郷へ、名と實と、誇りと、追懷のいたみとをもつて歸つてきた美しい歌劇女優である。そして久しぶりで歸つた家で、思ひもかけ

ぬ追懐の痛手を、新らしく刳り廻され、あまつさへ父を怒りの爲に死なせてしまつた。マグダが懷しがつて歸つてきた故郷は、中一夜、たつた二日間のあいだに、自分の土地が生んだ美しいマグダ、一代の花形の人氣者、そして一面には十二年間他郷にのみさすらふてゐた歌劇女優を、暖い手で抱きはせずして、歸つて來るか早々、十二年前マグダの家出をした折にのせかけた、黑い無慈悲な大きな手の掌を、マグダの一家の上に被ひひろげたのである。

私はマグダを可愛想だと思ふと同時に、マグダの父をも可愛想な人だと思ふ。私がマグダならば喪心のあまりに發狂するであらう。けれどマグダはかなり自己心が強いからそんな事はあるまい、けれどあれからのマグダを思ひやると、さぞ淋しい、さぞなさけない思ひに、あの嬌慢な笑みは二度と見せられなかつた事であらうと思ふ。

そのマグダになつたのは松井すま子氏である。ノラで名をあげた女史は、今このマグダを演じおふせて、立派に當代一の女優であるとの、極印をうたせたようなものである。ノラの時にはまだまだ生硬な處が多くあつた。熟したところと熟さないところが、所々にまじつてゐた。此度はすつかりとそれがなくなつて、俗にいふひれがついてきた。落附きも貫目も加はつて、藝と一所に容貌も一段立上つたように見受けられた。

すま子氏の演じ方は、押しつけようとするような力がある、其點は東儀氏と正反對だと思はれる。何處かに緊張したところがある、甲高な一本調子で押通すためかもしれない。マグダのような性質の

女がもつてゐる、甘へた心地と、親子の中の情とを、も一息優しく見せたならば——聲だけでもすこし柔らくしたなら——結末の悲劇が、もつと、もつと深く私達の胸にきたてあらうと思つた。をしい事にすま子氏のマグダは歸つてきた第一歩から、すでに喧嘩調子にきかれた。衣裝はどの場のもみんなよく似合つてゐた。袴(スカート)が長いのでつぎ足が目立ず、背も高くなつて立派であつた。私は見てゐるうちに、あの冷靜な光りを宿したあの目、マグダの誇りと媚を表し得たあの目、あの力强い瞳の色が、すま子氏を生々させるのだと思つてゐた。

林千歲氏は美しい女優である。もすこし、もすこしと思はせるところは多いが、初演の人として瑕のないところをとる。須磨子氏と並びたつて、協會の花となられることを祈る。

和泉房江氏のアウグステ（マグダの義母）と、都鄉道子氏のフランチスカ（アウグステの妹）は、マグダほどむづかしい役柄でないかはりに、損な役廻りでもある。殊にアウグステは扮する人の立場ばかりではなく、マグダと其父親との間にはさまつた、人の好い氣の毒な繼母である、アウグスタ其人があの場合に、親子の仲へはさまつてどうしようもなかつたように、房江氏も役の演出しようがなく、手持不沙汰の氣味であつた、それは無理もない事である。あゝいふ役は、柄と藝の奥行だけで見せる、どつちかといへば老巧の人のとるものであらう。都て藝は動きの多いものの方がやりよいといふ事を知つて、房江氏にあれよりも多くを望むのは無理であらう。それから見ると、道子氏のフランチスカの方がよつほど演りよいものと思ふ。道子氏は手一ぱいに演じた。それがために突込みすぎて、

喜劇になる處がないでもなかつたが、まだ若いのは仕方があるまい、それにひとつは、言葉のなまりが耳立つたからであるかもしれない。然し役に對して努力された熱心は、すま氏の次においてよいてあらう。そして氏だけは鬘をもちひぬ自頭のようであつた。

土肥氏の藝風は東儀氏と違つて、むしろ松井氏と同じ風に見られる。力をこめて堅いものを削つてゆかうとするように見える。それが爲め力がはいりすぎて癖がつくことがある。此度のシュワルッエ中佐がそれである。舊思想の嚴格な老人を出さうとして力を入れられたために、ハムレットの時でもかなり目についた首の振り方が、此度は甚しいほど激しく搖りうごかされた。そしてツッと腰を後へひいて胸をそらした具合が、フロックをとつて、ヅボンを股引にしたらば、すつかり日本のお百姓の頑固老爺になる恰好であつた。さういふのは全く失禮であるけれど、あの頭の動し方は多すぎたと思つた。其割に卒中で顫へるようになつてゐる手の方は、其時折より外顫へは目につかなかつたのである。

東儀氏は憎いほど落附きはらつて、さらさらと輕くやつてゐる。いつでも餘裕がある。といつた風である。其爲にやや輕目になることがある、此フォン、ケラー博士がさうであつた。マグダの私生兒が自分の子であるといふ事を、初めてきいた驚きが、さもさも豫知してゐたようで、あまり上の空のように見えた。いかに輕薄な人物でも、困つた時には心から矢ッ張り困るのであらう。ずつと上つつぺりでいつたので、自分の立場に立直つた時に、持前の輕薄な、功名心の盛んな、利己主義な、鐃

舌な才子の立場に盛返すのがをかしみになつた。

森英次郎氏は牧師になる人かと思つたら、二役とも女形に廻されてゐる。テレゼといふ女中と、エルリヒ夫人といふ、マグダを訪ねてくる仕出しのような夫人である。女形になるなら房江氏のする、中佐の後妻になつてよい人であらうと思つた。評はない。

陸軍中尉のマックスは林長三氏である。氣組みも心地も好く出てゐた、氏として此役は、今迄のどれよりも出來が好い。但し「伯父さん」と勢ひこんで呼ぶ、言葉の調子(アクセント)が氣になつた。

佐々木積氏の牧師ヘフターデキングは、やり憎い役を、最もよく演じられたと思ふ。それは一々にいへは缺點もかなりある。あれだけに獻身的な、牧師として最上な善良な人格をもつた人物として、そして慢じきつてゐるマグダさへ、牧師にだけは說得されるだけの、親しみと優しさと、畏敬されるあるものを供へた人物としては、顏の作りが稍若々しかつた。何處かにおかしがたい威嚴が、自然にあるようにしなくてはなるまいと思つた。けれど沈着で、底にマグダを愛してゐる血の冷きらない、そして獻身的な人はかなりに寫しいだされてゐた。これは役柄の相違があるかもしれないが、「ノラ」の時に、森氏が扮したランク先生ほどに印象は殘つてゐない。

――しぐれ――

讀んだ「マグダ」

自分は讀んだ「マグダ」を書く。

尤も文藝協會の芝居も見たは見た。けれど例によつて自分の部屋で、自分獨りで勝手に讀んで、勝手に考へた時のやうには心に何も響いて來なかつた。

「ノラ」の時もさうだつたが今度は更にさうてある。ためにマグダに對する同情がともすれば反感に變じやうとした。これも多分は觀劇中の自分の心状態に罪があるのであらう。人込みの大嫌な自分は芝居も嫌いなものゝ一つに洩れないのだから。

罪悪を超越し、自主自由の生活を誇りとするだけの人格の强さも、大さも、高さもなく、どこか薄つぺらで、わるくすると單に浮氣な、あばずれとばかり見えやうとする「觀たマダダ」を評する氣にはなれない。

讀んだ「マグダ」にしたところが自分には問題劇とは受取れない。これを問題劇として見むには眞理に對する情熱に乏しい。自己の思想を徹せむとする峻烈を缺いてゐる。この點に於ては到底「ノラ」に及ばない。思ふにこの作者は「ノラ」の作者の如く緊張した内生活を有つて居ないのではあるまい

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

須磨子のマグダ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か。

新舊兩思想の衝突を問題とすることは己に舊い。(一八九三年の作といふことではあるが)今日の我々に何の新しい問題も提供せねば解決も與へない。我々は皆其程度こそさま〴〵だが、故郷に、家に、親に對しマグダと同じやうな位置に置かれてゐる。しかも是等を單に頭腦の問題とする時代は過ぎ去つた。兩者の衝突に驚異の眼を放たむには最早あまりに慣れ過ぎたことを自分は恐れてゐる。

併し思想と感情とは必ずしも歩武を同じうするものではない。新舊思想の衝突を打破したる人にもなほ新舊感情の葛藤は依然として存ずる。頭腦に於て新しき人も、ハートに於ては案外舊い。

「マグダ」がそれだ。全くそれだ。

彼女は所謂新しい女かも知れぬが、眞に新しい人ではない。新しい女ではない。

マグダによつて味はれた感情の中には昔から幾千人の女が已に味つて來たものが少くない。彼女を新思想の代表者とせむにはいかにも力なく、生温い感じのするのもこのためだ。

マグダは過敏な神經を有つて居ない。マグダに若しヘッダほどの神經があつたらかうはならなかつたらう、又なれもしなかつたらう　マグダが本心女らしく、やさしく、可愛らしく、思はれるのは一つはこの爲ではあるまいか。

自分は「マグダ」を問題劇として見るよりも、新思想の主張と見るよりも、そして其當の問題や思想に價値を見出すよりも却て女主人公の複雜な、豐富なはでやかな感情に、單純な到底拔くべからざる親子、姉妹間の愛情に、母親に對する子供の力などに動かされた。「マグダ」はどうしても頭腦に訴へるやりも直に胸に響く戯曲だ。

全體マグダの家出からが「ノラ」とは全然違ふ。ノラの所謂自覺なるものゝあやしい、眞に醇熟して自己の内部より發したものと見るよりも外部、境遇の壓迫にあるとは言ふものゝ、良人が出來得る限りの大讓步にも耳さへかざす、自己を敎育し、完成せむ爲めに愛する子供をも振り捨てることを自からの意志を以て敢てしたのだ。自から眞理なりと信ずるところに從つて決行したのだ。それ故、そこに可成り手强いものがあつた。けれどこれはまだ十七の小娘で、結婚問題が直接の原因になつてゐる。軍人堅氣の極めて偏狹な、通俗的人生觀を抱いてる父が自分の夫として撰んでくれた生やさしい田舍牧師を拒絕したゝめ、父權には絕對に服從すべき娘として、生意氣、我儘、高慢、不埒等のかどを以

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て家を追はれたのである。多血質な勝氣な、派手ずきな、娘はどの道こんな固苦しい、理解もなくして無暗と嚴格な父の家に適する筈はなし、繼母との間は面白くなし、其上自分自身には多少の野心がある、目的をもつてゐるのだから、却てこれをいゝ機會位に考へて、追はれるまゝにまだ世間知らずのマグダは案外平氣で、無分別に浮世の暴風の眞只中へ飛び出して行つたのである。マグダの如き氣質の女ならば自覺などなくとも斯くの如き境遇の下にあつて、斯くの如き行動に出るのは寧ろ當然のことであらう。彼女自身も後に「知らぬ他郷へ私を追ひ出して、自分で稼いで自分で生きて行くやうになさつたのはあなたぢやありませんか」と父に言つた通り自己の中心思想から出た行動ではない。だから自分で自分を知らない、マグダにとつては自然であるだけ自分の行爲を自からは意識してゐない。

もし彼女が自覺したとすればそれは輕薄才子フォンケラーの肉欲の犧牲となつて私生兒を上げてから後である。マグダは世間の嘲笑を身一つに受けながら、私生兒を抱いて自分と子供の爲めに食を求めねばならぬなかつた。子供の爲めにはあらゆる艱難辛苦を經驗した。經驗せざるを得ずして經驗した。無責任なケラーに對する憤怒と、父なき子供に對する母親の愛情によつてよくも堪へた十二年間の苦鬪がマグダを一人前の獨立した女とし、大藝術家とさへ呼ばれるまでの女にしたのである。

マグダは罪によつて、罪の結果なる私生兒によつて自己を大きくした。

この點から見ればケラーはヘルマーよりも女にとつては親切な男だ。有益な男だ。少くも時として我々を偉大ならしむる爲めの方便として必要なものかも知れない。けれど望むに及ばない、ケラーは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

到る處に生存してゐる。

マグダは言ふところ强くして其行はいつも人情の前に脆くも敗れるのは、かうして浮世の酸さ、甘さを嘗め盡した苦勞人だといふことも一つはあらう。半分は好奇心で、半分は臆病なー半分は悲しいやうな、半分は高慢なやうな氣持で、自分の國の人々に御前達の狹い道德の外に立派なもの、正しいものがあることを見せつけてやらうといふ勝ち誇つた意氣込で歸つて來たマグダも每夜自分の家の前へ忍んで來ては藝術家である自分も打忘れて只素直な心に悲しい淚を流す女となつた。

誇りを以て、私は私ですもの私を無くしてなるものですか、ですから私はもう家なんかはありません、私は行かなくちやなりませんと言ひながらも牧師に說かれてはとうと留つた。老いたる父の名譽を回復するためには、又愛する子供の爲めにはケラーとさへ（捨てられた後の苦しかつた生涯は忘れて、只過ぎ去つた昔の初戀の夢のやうなたのしさを思ひ出したなつかしさなども多少は心に動いてゐたかも知れぬが。マグダはどこまでも女らしいハートをもつてゐたから。）結婚しやうといふ氣になつた。

彼女は私は決して自分を曲げない。それより外に道はない。とか、私が一番いゝのは私が私一人でやつて居るといふことだとか、小さくなるなんてことは不得手だ、相手は必ず負かしてやらなくちやならない――歌つて、歌つて歌い負してやる――一人殘らず私と同じ氣持になるまで歌つてやる、それ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が私の歌いかたて、それが私の生きて行く道です。歌ふと生きると、私に取つては同じ事。愛も、憂も、喜ぶにも嘆くにも、私と同じ事をさせるまで押して〳〵押しつけてやる、それを承知しない者は呪つてやる。歌い負かして――地べたに平伏させて、奴隷にしてやる、私が手すさびのおもちやにしてやるなど丶言つては居るが、自分にはどういふものか只彼女がかうした十二年間の苦闘を察し、其苦闘を尊敬し、そこに價値を認めると共に、寧ろ同情の涙を以て聞くべき言葉としか響いて來ない。

マグダにとつて唯一の神聖なるもの、眞生命とするところのものは決して藝術ではない、矢張り母としての愛であつた。藝術家としての自分の生活を續けねばならぬとは言ふもの丶實は一人の父なき子供の爲めてあつた。萬人の尊敬を受くべき彼女の藝術も彼女自身にとつては其子供にパンを與へるものに過ぎない。しかも彼女は已に疲れ果てゝゐる。生活の爲めに精も根もなくなつた憐れな奴隷てある。其の心に立ち入つて見れば家なくして迷へる憐れな魂てある。今彼女は自分の爲めにも、子供の爲めにも故郷を求めてゐるのだ。

私は彼女が家や、父に對してとつた讓歩的態度を、生温ひ調和、妥協の精神を見逃すことが出來ない。併しマグダの讓歩も故郷の犧牲的努力も甲斐がなかつた。父はマグダが最後の「お父さん、是までに私が身を許した男はあの人一人だと思つていらつしやるの」の一言に見事打たれて、はかなく消え

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。マグダは「あゝ、歸つて來なければよかつたと絶望のあまり嘆息した。

父は死んだ。マグダに殺された。(間接に)父の死後マグダはどうしたらう。マグダのマグダに戻つたらうか。再び自由を得たらうか。新舊思想の到底調和すべからざるを示して、舊思想の敗北なよつて、新思想はいよ〳〵勝利を得たらうか、否々、私はさうは考へられない。彼女はなほ「故鄉」を望むてあらう。不安を增した後のマグダ更に、切に「故鄉」を求めるに相違ない。

この時、彼女に眞の「故鄉」を齎すものは誰れだらう。矢張り牧師を外にしては他に見出されない。社會の大多數の信仰のつながる基督教を代表する牧師は何といつても劇中の理想的人物となつてゐる。自己主張者たるマグダに反し、彼は犧牲的精神の代表者である。マグダに對する失戀の結果、自己の意慾を擯斥してかゝる新生涯に這入つた彼はもとより人生に就いて經驗する處が少い。人間の暗黑面を知り拔いた人ではない。人生のどん底を潜つてあらゆる罪に淨められた人ではない。其愛すべき單純は複雜の後に來たものではない。それだけ其人格に深さも、强さも、大さも足らない。みづからも語るやうに「死人の平和」の誇りを遁れぬところはありながらマグダに故鄉を齎す人としては飽き足らぬ感はあるけれど、しかもなほ大きくなる爲めには罪を犯せと說いたマグダ其人より實際は確に大きい。私なき淸淨の心はあらゆるものを抱き入れることが出來る。彼は舊思想の中佐をも、新思想のマグダをも共に同情、理解した。彼の言葉は自己の外何ものも容れられぬマグダの心さへ動かしたではないか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さうだ、牧師は迷へる人間に「故郷」をもたらすものでなければならぬ。人の子を父の家に歸すものてなければならぬ。さりながら、さきにマグダを彼女自身を外にして舊思想の根據地ともいふべき地圖の上に描かれる故郷に、マグダの肉身を生んだ家に置かうとしたのは間違つてゐた。又マグダにしたところが歸つて來たのはあやまりだつた。しかも人情の前にともすれば首を垂れたのはあまりに弱々しかつた。兩者を調和せむとの試みは最早無駄事である。失敗である。

マグダがたづねる眞正の「故郷」は、かゝる故郷を失ひ、家を滅し、父を殺した後に見出されるものでなければならぬ。

牧師は後のマグダに眞の故郷を、さ迷へる精靈に歸るべき屋家を、背ける子に眞の父を暗示する人てあつてほしい。

併しそんなことはなほ容易にマグダの上には實現されないことであらう。私は彼のマグダを思つて又、暗い心に沈む。

――らいてう――

■完■

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

マグダに就て

拝啓マグダに就いて少しばかり何か申上ぐる筈に候ひし處ちと不快にて休み居り候ため—それにまた實際マグダは私ひとりで左程力瘤入れて申上ろほど何事にも候はず。芝居で見るマグダより更に稀薄に深さも何もなくなる様なのかもの惜しい氣が致して見まいと存じ居り候處一夜だけ參り申候。日本にて演ぜられたるものとしては上乘のものに候べく、おもしろく見せてもらひたるをありがたく思ひ候　少くも自巳といふものに思ひ至りし程のものならば田子作のおかみさんも行き當り申すべき新舊思想の衝突に候。日本にも「ザラ」に有之べく今更マグダを見せられて、形を見て驚いた處で始まりも致すまじく、むしろ參事官のフォンケラーが犧牲を償へるには——など茶話申候　それは冗談なれてあの位の甘物などを珍がる故なるべく候。あの邊ならばマグダも女らしく、可愛らしくて結構に存候。もしマグダが昔か、今ならばも少し突込た華々しい光焔も吐き、も少し自己に徹底も致したるべくど存候右御斷りまで。

——ちゑ——

○

テレゼが花束を持つて室に入つて來た時マリイが大變に脊が低く見えた。あれて、靴のカカトて一層のヒを入れたのだ、と協會の或る人が云つてゐた。

今度の芝居で林長三氏が一番の味噌をつけてゐたらしい。序幕のマリイと語る處の堅くるしさマリイと相愛の仲とは筋を讀むか、セリフを聞かなけりや一寸解りにくいだらう。

二幕目でマグダに、フォンケラーからの傳言(コトヅケ)を思出して二三歩進むで後に引返へす時丁度舊芝居に出る、かけ出し奴の身振の樣に思へる。下に引きつめた緞通がはがれそうになるのが心配になつた。

さしあたり宮戸座あたりの夜興行に出そうな厭味たつぷりの中尉殿だつた。

シユワルツエの土肥氏とフォンケラー博士の東儀氏はなんといつても舞臺をしめつける人だ。三幕目に自分の興味全體をそゝぐ爲か、此の所の東儀氏と土肥氏の間に、毛一本のすきの無かつたのに驚いた。

シユワルツエがマグダとケラーの樣子を疑つてケラーに詰問するあの時東儀氏の顏色が變つた。

自分は人が皆東儀氏と土肥氏を感服したのと同じように感心して歸つた。

人格で色で動いた土肥氏、眼と指先きで生きた東儀氏いづれにしても重鎭はどこ迄も重鎭だつた。

第一幕が二幕にあたつた時は午後の四時から夜にかけて、第三幕第四幕は翌日の午前十時頃から午後にかゝると、筋書に有つたので光線に氣を着けてゐたがはつきり成功してゐた。

見下す窓の外に有るパックが下に列べられた青と白の十二三個の電球によつて、隨分たくみに色彩られてゐた。

たしかパックは、赤い屋根の家だと覺える。

文藝協會の色彩は、自由劇場の色彩と全く變つてゐるのが嬉しい。

けれどガタガタの汚れた、きたないパックだけは諸事儉約してても今後少しゼイタクにやつてほしい。見る度に、、本箱の上の石膏像が落ちそうに思えていられぬ心配してゐたが此の間終りの日に遂々、マックス中尉がケラーをにらむで出る時あんまり戸を強く閉め切つたので、下に落ちたそうだ

けれど東儀氏は澄まし切つて椅子の上に置いたそうだ。舞臺裏ぢや島村先生、さんざ氣をもむでゐらしたら、今度土肥氏が又、ほかに移したので舞臺裏と觀劇席が兩方で苦笑したそうな。

松井氏のマグダは、今更らしく書く必要もない讃賞に毎日、合評が出されてゐるのを讀むで一々頷しそうに、もつともだと氏の藝術に驚いてる自分だもの。けれど只氣の着くのには實際驚くの外ない。

あれだけ忠實にあれだけ眞面目に、自分の身體を働かせてゐる人は恐らく無いだらう。

序幕でマリイがドアーを開けて『ゐる事になつて?』と顏を出した、あの時マグダが胸をつかれた苦をはつと手で押へる。少しの事でも私は感心して見てゐた。

技巧、藝術、生、働、これらの事を皆一所にして賞めて置く。そして野心家の多い中で小さく負けないて、だんだん大きく育たれる事を祈つて置く。

ズーダーマンの作は餘程芝居氣がたつぷりだ。『故郷』の中でいらない人物がヒョロつくのがひどく目についた。中尉なんか序幕だけでゐらなそうなのに。そうした點から私はイプセンをとる。

——紅吉——

○

私は今「故郷」を一息に讀み通して了つた處です。一度芝居で見た印象が未だ記憶に新らしいので、緣もゆかりもなく突然脚本に打つかつて讀んだと云ふより大變氣が乘つて殆んど引づり込まれるやうな調子で、讀んだと云ふよりは寧ろ讀まれた方になつて了つて居たかも知れませんでした。あすこはあゝいふ風に演たつけ、あすこはあゝてあつたけなどゝもう一層新らしく芝居を目の前に見る氣持で今更床を敷き詰めた靑い敷物の上をなまめかしくはひまつはるマグダの淡紅色の長い上着の裾が再び想ひ浮べられるのでした。

芝居を見て來た人の一人が斯樣な事を云つて居ます、

「マグダ見たいな女はまだ／＼今の日本には居ない、勿論ノラのやうな妻君もだが……そしてあの阿父樣は古代過ぎる、あの性格は日本の現在によくある型だがマグダの育つた空氣の中に生存させて置くには餘が生過ぎて居る、娘の方は現在の社會を飛び離れて居るし又阿父樣は十八世紀の殘りかすの干涸びたやうで調和を缺き過ぎはしまいか」と――勿論深く考えた人の言葉でもなし、其場丈けの云ひたい三昧な駄言に過ぎませんけれど。

此前ノラを見た時も一寸幕間で廊下へ出ると商人體をした一人の年增な男に一人の靑年が、

「どうですれ、分りましたか」と其所感を尋ねますと、其人は委細承知の體で

「エヽ／＼まアあゝして家を出て乞食にでもなるのでせうよ」つて洒々した答へでしたつけが、全くですれ、違ひありますまい、けれども乞食には恐れ入りましたれ、

ノラでは家出が劇の終局になつて居ますけれど、マグダは……それは娘でしたけれど兎に角やつてのけて表面は立派な成功者として又勝利者として父の家に歸つて來たのでせう。

マグダは本當に新らしい女でせうか。

自由劇場第六回略評

評などゝいふものは幾ら公平に書くつもりでも、天性の好き嫌ひといふものがあり、又、如何しても自分に近しい人、或は一度でも顔を合せた事のある人のものはさうもきだうに悪く言へぬのは人情であらうと思はれる、夫に悪く言はうとすれば筆を曲げて言ひさへしたらどんなにも悪く言へるのであるから、此處には好いと思つた處しか言はぬ事にするつもりである。しかし夫が好い處の全部であるとは言ひきる事は出來ない、其外にも好い處が澤山にあるかもしれないのである。

第六回はやはり帝國劇場で二日間開かれた。第一は萱野二十一氏の「道成寺」、第二は小山内薫氏の譯「タンダヂイルの死」であつた。第一の作は同氏が一度スバルへ「清姫」して出された脚本を改作せられたものであるが、讀んだ時と同じに一息毎に恐ろしくなつてゆく處が作者の力であると思つた。舞臺稽古を見た時には餘りに血の色が恐ろしいので、あれを只形容丈に墨かなんぞで染めたらと思つたが第一日第二日と見てる中に例へ夫が黒くても恐いのは同じであると思つた。それが恐ろしければ恐ろしいほど好いのではないかと思つた。そして三日見ても少しも夫に慣れる事が出來なかつたのが嬉しいやうに思はれた。左升の僧妙信が和尙の恐ろしい所業を見てから、作者の「聲音悉く變じて」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と言ふ趣が好く見えて居て殊に其邊が好い出來てあると思つた。夫から三人て上手へ入る時、いつ迄も後を氣にして居るのが舞臺の氣持を破さないで好いと思つた。又五郎の僧妙源は、頭がぼう〳〵とした處氣の落つかぬ處とが好かつた。荒次郎の僧妙海は、沈んだ聲が好い。そして作者の注文にもある此三人と若僧とが、好く氣を揃えて演つてるので、恐ろしさに自然自然と身を寄せる處を好くし活し得たと思つた。壽美藏の若僧。光線のかげんで目がひどくくぼんで見えたが、紫のやうな衣の色は若々しく見えて好かつた。恐怖におそはれて四人ひしと集まつた時。突如として此人が離れる所も「甚だしく唐突に身を動かして」と言ふ本文の趣がたしかに見えて居た。和尙の役と言つてもぢつと兩手を握り合せて堅く立つて居るのは恐れを抱く人らしく見えた。悲鳴は自ら咽を押へて出してゐるのだとか聞いたがほんに氣味の悪い聲であつた。清姬の怪は初日の時に衣裳がごそ〳〵と音を立てたのが反つて鱗の音のやうに聞えて凄く思はれた。秀調の女鑄鐘師依志子はいつも、西洋物の時に出る西式な白廻しが余り無かつたのは嬉しかつた。夫に瘖走つた聲が此女として大變にふさはしく思はれた。左團次の和尙妙念は額の拔き上つた眼の大きな顏のつくりが物凄く出來た。若僧に飛びかゝる時の背中を丸くした形、荒々しい息づかひの處は、實に物凄いと思つた。夫から若僧を殺しにかゝる時の何とも言へぬ大きな恐ろしい聲が、三日聞いて三日とも慣れる事の出來なかつたのには、たしかに今までに無い強い感じを與へられた。夫から私が最も好いと思つた處は、依志子が死んでから、赤い光の中にやゝ背を屈めてぢつと上目づかひに立つて、いつの間にか兩手を拜むやうな形に組め合せて居る

處であつた。之も三日とも、いつ此手を合すか發見する事の出來なかつたほど、演者は無意識にその手を合せて居た。その人の性格に就いて演者の微細な苦心は斯ういふ處にあるのであらうと思はれた。

第二の「タンダヂィルの死」は隨分難かしいもの丶やうに思へるし、舞臺にかけてどれ丈に見えるであらうと思つたが、只讀んで見た以上、何ともしれぬ恐ろしいやうな、悲しいやうな味の見えたのには演者が甚だしいはき違へをしては居ないといふ事が分る。はき違へ、之が一番新らしい芝居をやるのに恐ろしい事であると思ふ。アグロワアルが若し、此芝居で最も強いもの丶やうに演つたら、どんなものであらうか、忽ち此劇はこぼされて終ふであらう、亦、さうやつても別段、驚らぬ人がまだ〳〵ありさうなのには、なか〳〵舞臺監督、演者の苦心も一通りでは無いと思ふ。背景の中では一番に第五幕の處が好かつた、夫から城内であつた。廊下も廣大な石の柱が人間を哀れむやうに高くがつしりと立つて居る處が好かつた。

かつみのタンタヂィルは、寫眞ではあるがマアテルリンク夫人の演つた時の子役と如何にも氣持が好く似て居た。殆んど只他の人によつて動かされて居るやうな人物であるが、好く優しい上品な子供になつて居た。ながらあれ丈の樣子を一寸眞似の出來る子役は他に無さそうに思はれた。浪子のベランジエエルは心の優しい人といふ處丈は見えて居た。松蔦のイグレエヌの横を向いた時の咽から胸にかけた邊の形は實に好かつた。かう言ふものにかけて女形の第一てある。今までは兎に角、今度は女

優を側に置く事であるから、どんなかと少しでも氣にしたのは氣の毒のやうであつた。あれなら立派な形である。其中でも最も好かつたのは廊下の處で寢まきの儘燈火を高く上げて走けてゆく形であつた。死に向つても少しも恐れぬ氣持を、無邪氣に顯はして演じてゐる處が人に計れぬ此優の力であると思つた。左團次のアグロワアルはおごそかにタンタヂイルを守護し、靜かに姉娘の言ふ通りに從がつて一度は死を防がうとして立つたが、とても力の及ばぬのを知つて默してしまふと言ふ有様が前後不揃ひでなく演じられたと信ずる。同じ人の第三の侍女は、語尾を消してる處が女らしい白に聞かせやうとする苦心である。壽美藏の第二の侍女「もう夜中でせうねえ。」と言ふ處が何とも言はれぬ感じを與へた。荒次郎の第一の侍女。室の中に這入らうとする時に手をぐつと向ふに出した形がある恐ろしい力を持つた者らしく見えた。

* * * * *

非常に急いだので言はうとした事も言はずに終つたかもしれないが、これ丈が私のほんの空つぽの頭で見た自由劇場印象のある部分である。

——岡田八千代——

Through me the way is to the city dolent;
through me the way is to eternal dole;
through me the way among the people
lost.
Justice incited my sublime creator;
created me divine omnipotence,
the highest wisdom and the primal love.
Before me there were no created things,
only eterne, and I eternal last.
All hope abandon, ye who enter in!

—Inferno. 111—

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢——郵稅壹錢五厘——
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
○廣告料 (一頁)拾五圓 (半頁)八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る(但し一割增のこと)
○本號に限り 特價金參拾錢
郵稅金壹錢五厘

明治四十五年五月三十日印刷納本
明治四十五年六月一日發行

禁轉載

編輯兼發行人 東京市本郷區駒込蓬萊町萬年山內 青鞜社內 中野初
印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍

發行所 東京本郷區駒込蓬萊町萬年山內 青鞜社 (電話下谷三七七六) 振替東京口座一一六〇番
發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂 電話本局(一一二四 三三八)
大賣捌 盛春堂、北隆館、東海堂、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靑鞜研究會

社員外の婦人も聽講が出來ます。（事務所の方へ御申込下さい）

ダンテの神曲（火曜日）　阿部次郎氏

モーパッサンの短篇（金曜日）　生田長江氏

毎週火、金の二回、午後三時より五時迄

會場は本郷區駒込蓬萊町萬年山（勝林寺）

會費一ヶ月金五拾錢

なほ委しくは事務所の方へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

善き讀物　珍しき讀物　面白き讀物に充つ

女子文壇

一日發刊　八年六號

六月號（普通）

定價金拾五錢　送料壹錢五厘

三味線論

▲三味線樂の價値……理學博士　田中正平

▲三味線と德川期のにほひ　文學士　佐々醒雪

▲三味線は彈く姿勢が好い　文學博士　幸田露伴

▲地唄と江戸唄……文學博士　須藤南翠

▲且耕し且歌つゝ農村の歌人　文學博士　佐々木信綱

▲ある男の日記……森川葵村

▲思ひ出の傷ましさ……イブセン

▲紅燈夜話……竹久夢二

▲化粧問答……藤波芙蓉

◎生活難は憂ふるに足らず……山路愛山

所謂生活難問題の解釋……若き婦人達の未來の覺悟

▲愛憎（小說）……小笠原貞子

▲青葉の頃（紀行）……三宅やす子

▲六月の光（小品）長曾我部菊

▲二つの心（和歌）原田琴子

◎婦人と新聞紙……千葉龜雄

▲南洋の思ひ出（一少女が南洋の孤島に生活したる珍しき記事）花山院貴美子

▲一高紀念祭を見る……森江つゆ子

▲耳袋（奇談、珍談山の如し）……猿丸太夫

▲新世帶一諸道具見立相撲番附

◉誌友の創作は益精選せり、批評は懇切、投稿は自由なり

東京市京橋大鋸町　女子文壇社發行　（振替一七二九）　賣捌全國書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊 藝文 雜誌

明治四十五年 六 月 號 六月一日發行

定價一部郵稅共廿二錢。半年分一圓廿錢。一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學內京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

有効無効　文學博士 谷本富

島津齊彬公の西洋文物採取及蘭人歡迎に關するポムペ氏の紀事と照國公文書との比較　文學博士 內田銀藏

百味譜　文學士 藤井紫影

頤和園詞　王國維

過去（メエテルリンク）　竹友藻風

簡牘檢署考（完結）　王國維

職業の尊界を論ず（完結）　文學士 高田保馬

能樂の源流を論ず　友枝照雄

再び唐寫本唐韻につきて　岡井愼吾

書籍一割引（書目進呈）　鷄聲堂書店

發行所 東京小石川原町六 振替東京一三五三 電話番町二六〇八 鷄聲堂

心の花

第十六巻 **六月號** 第六號

萬葉集講義　佐佐木信綱
初夏の國　川田順
御嶽路　石榑千亦
幻の華　白蓮
少アイヨルフ　草野柴二
苔（小說）　森の女
遺書（シュニッツレル）　吹田蘆風
ゆく雲　釋宗演
曙會の夜　新井洸太郎
玉川　竹柏會同人

汎く愛誦十首を募る詳しくは六月號を見よ

定價一部一税共十三錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢

東京日本橋區本石町一ノ一　**竹柏會出版部**
振替東京四三〇〇番

水彩畫研究の專門雜誌

みづゑ

毎月一回
三日發行

一部郵稅共金二十五錢

第八十八號・六月三日發行

口繪

裏畑（水彩畫原色版）……坂本繁次郎
臺灣沿岸（同）……石川欽一郎
谿（同）……故大下藤次郎
パンチー（同）……相田寅彦

太平洋畫會
展覽會合評
水野以文　後藤工志　赤城泰舒

記事

調色に就いて……石川欽一郎
個性を失ひたる繪畫……齊藤與里
頬杖小言……水野以文
其他寫眞版（展覽會出品畫）數十葉

發行所　東京市小石川區關口駒井町三
振替貯金口座東京六九六三番
大下春子方
春鳥會

毎月一回一日發行

一冊二十五錢郵稅一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百四十四號（六月一日發行）

六冊前金郵稅共一圓五十錢

十二冊 金二圓八十錢

文藝協會の「故郷」を見て……山の手の女

「故郷」の所感……相馬御風

自由劇場の感想……本間久雄

自由劇場と女優……中村春雨

自由劇場の話……小山内薰

二劇場の印象……小川未明

二劇場合評の批評……秋田雨雀

自由劇場と文藝協會……芹影女

各座の夢見草……幸堂得知

ベンネットの「一里塚」……坪内士行

左團次と粥五郎……林玄川

拙作「弟切草」……岡本綺堂

默阿彌著作解題……河竹繁俊

五月の脚本界……花びし生

役者氣質の昨今……山野芋作

帝國劇場と新富座……時雨女

故根岸濱吉の逸話……龜井鐵骨

各座の評判（青々園、春浦）……

戯曲 戀愛三昧……鷗外譯

本郷區湯島切通坂 畫報社内

歌舞伎發行所

電話下谷二四八三

振替口座一八一〇六

定價金廿五錢

シバヰ

毎月一回一日發行

六月號

「タンタヂールの死」と「故郷」

秋田雨雀氏
中村吉藏氏
本間久雄氏
吉井勇氏
正宗白鳥氏
岡田八千代氏
田村俊子氏
荻原濱子氏
長谷川時雨氏
中谷德太郎氏
河野讓氏
楠山正雄氏

□ストリンドベルグ紀念□

ストリンドベルグ評傳

ストリンドベルグと女性　ヘルマン、エスワイン

母の愛（一幕）　ストリンドベルグ

『伯爵令嬢』の序文　ストリンドベルグ

ストリンドベルグ劇舞臺一回『伯爵令嬢』―『火遊び』―『父』―『グスタアフ、ワサ』―其他（寫眞）

ストリンドベルグ劇の名優（寫眞）

ストリンドベルグ、その家族（寫眞）

東京市牛込區東五軒町三十七番地　シバヰ發行所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大阪出版

短檠

六月一日發行
第四號

十五錢
送費一錢
一年一圓八十錢

小說　娘　百田楓花
評論　空漠無窮と感覺　ホイツスラア　増野三良
詩　疵　久世勇三
小說　藝者の子　段谷秋洋
歌　ゆふ月のころ　西内白穗等
戯曲　題未定　武田正憲
大阪通信　同人
露臺にて　同人

挿畫

扉　鍋井克之
サボンの匂（木版二度）鍋井克之
○HANASAN（木版二度）久世勇三
カフエーの隅（石版二度）住田良三
センコ花火（木版二度）山田實

大阪市東區内久寶寺二丁目一八
電話南千八百〇三番
編輯發行所　短檠社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌

毎月一回一日發行

モザイク

定價一部貳拾五錢

六月號要目

廓……西田廻瀾

「春の目ざめ」を譯するに先たちて……野上舊川

痺れたる我……五十嵐禎夫

夜の祈禱……秋庭俊彦

土工の死……生田葵

瘡人……水島爾保布

ましらごと……大野若三郎

キリシタリンをすてた男……藤井伯民

外光と女……山本露葉

編輯の後……モザイク同人

表紙繪……小林源太郎

裏繪……小泉青堂

東京市本郷區湯島切通坂町 鼎堂書店發行 振替東京一一七三九番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六月一日發行
第四年第六號

スバル

定價金參拾錢
郵稅貳錢

本號所載要目

雁……（小說）……森鷗外
髮結……（小說）……江南文三
踏晦……（小說）……聖古府
寂しき女……（小說）……江馬修
廊下……（小說）……秋庭俊彥
墓まゐり……（小說）……松本泰

死の勝利　ダンヌンチオ作　石川戯庵譯

平女朝のまぼろし　胡人生
拔花集　堀口大學
歌　阿部省三
亞米利加振り　長沼重隆
詩　佐藤春夫
昴詠草
中の島より　平出修
むく鳥通信　無名氏

東京神田區北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四番

六月中市に出づべき新刊書

[redacted]

木下杢太郎氏著　和泉屋染物店（戯曲集）　定價壹圓　送費八錢

故石川啄木氏著　悲しき玩具（歌集）　定價五拾錢　送費六錢

若山牧水氏著　死か藝術か（歌集）　定價七拾錢　送費六錢

北原白秋氏著　桐の花（歌集）　定價八拾五錢　送費六錢

[redacted]

[redacted] 詩集 [redacted]

勿忘草

ザムボア六月號

「朱欒」六月一日號は全部を開放して三木露風、北原白秋二氏の詩集とし、最近二週日の努力になる象徴詩抒情詩、俗謠體の小歌、和歌及通信、評論等各數十篇の製作を收む。本集の出づる日、蓋し詩壇は紅紫綾なる夏草に彩らるゝの思ひあらむ。（定價郵税普通號）

東京京橋南傳馬町三ノ[illegible]　東雲堂　振替貯金五六一四

清新なる文藝雜誌

劇と詩

毎月一回
一日發行

定價一部
二十五錢

六月號要目

ある宵……（小説）……田中介二
夏羽織……（詩）……福田夕咲
鎖……（小説）……秋庭俊彦
野火と偶像……（詩）……西宮藤朝
フオルケの詩に於る技巧的方面……（論）……秋元芦風
蜜蜂の小屋にて……（飜譯）……米川正夫
「マグダ」の臺舞面……
苦き人々の心……（歌）……

同人偶語

ストリンドベルとの死　福田夕咲
土曜劇場の印象　國技史朗
葬られたる「マグダ」　人見東明
自己批評　山村暮鳥
少年と奇蹟を思ふ　佐藤緑葉

五月の創作……（評）……
赤い扉の女……（詩）……辰己善
劇壇の新氣運……（論）……平井櫻川
狂犬……（小説）……小杉實
死……（飜譯）……秦豊吉
朝……（小説）……相馬泰三
Silhouttes……（詩）……山村暮鳥
おぼろ夜……（繪）……津田青楓
郷土の家……（戯曲）……國枝史朗

編輯所　小石川區雜司谷
發賣所　東京神田表神保町

劇と詩社
東京堂

大賣捌
東海堂
至誠堂
北隆堂
上田屋
良明堂
盛春堂

白樺

第三卷　第六號

六月號

定價金三十錢

要目

■武者小路實篤……………或る若き男
■南　薫　造……………田舍より
■木　下　利　玄……………花壇と室內
■有島壬生馬……………蝙蝠の如く（續）
■小　泉　鐵……………アダムとイヴ
■十月鳥山譯……………歌劇カヴレリア、ルスチカナ
■その他柳宗悅の感想と紹介及里見弴の「食後」の批評等

挿　畫（素畫五枚）

■ミ　レ　ー……………鍬　り　手
■ドミエー……………ドンキホーテ
■ゴ　オ　ホ……………噴　水
■ゴオガン……………醒めたる心
■マティス……………裸體習作

發行所　東京麹町二ノ二　振東京二〇一九一四　洛陽堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六月一日發行

詩歌

價貳拾錢
郵稅壹錢

六月號

譯詩二篇……（譯詩）……昇曙夢
病める太陽……（譯詩）……茅野蕭々
ECSTASY……（長詩）……山村暮鳥
五月の黄昏……（譯詩）……高橋泰
頌歌……（長詩）……尾山篤二郎
わが母の庭にたてる……（譯詩）……久保正夫
惡しき夜……（長詩）……柳澤健
苦痛に集る若者……（短歌）……內藤晨露
すべて逝きぬ……（短歌）……廣田樂
壯嚴なる日沒と死……（短歌）……梶秀也
五月のノート……（短歌）……中村琢郎
日本にふる春雨……（短歌）……佐藤嘲花
逝水賦……（短歌）……富田砕花
五月の斷片……（短歌）……前田夕暮
詩壇月評……（評論）……服部嘉香
郊外より……（感想）……前田夕暮
白日社詠草……武雄、紫紘、綠雨、野菊等

定價 三ヶ月分金六拾錢
六ヶ月分金壹圓貳拾錢

社友募集
清規入用者は至急申込まれたし

發行所 東京市外西大久保 白日社
發賣所 東京神田表神保町 東京堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

北方文學

毎月一回一日發行

六月號

定價廿錢 郵税一錢

欺騙者（ニコライ・テレショフ作小説）……中村白葉
過渡期の作家コロレーンコ（論文）……瀬戸義直
蓬の芽（短歌）……松岡白虹
ヅシャウオー（アーロネアン作小説）……日野生
若き友へ（小説）……坪田譲二
初夏の山（短歌）……渡邊三角洲
勳章（チエッホフ作小説）……長澤武男
リ、エンクローンと北獨の自然（評論）……秋元蘆風
明日の信仰（詩）……廣井浩風
山を好む女（小説）……倉若梅二郎
新しき批評……相馬御風
時評……義直、直光、柳歌、SH生、
露西亞だより……たけを
北方の傳説（ロシア二篇、日本三篇）……
その他、内外の傳説民謡、エヂトリアル、ノート等

發行所 東京小石川區高田豊川町八 北方文學社

50 126CO XL 106 04/09 30016-160

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月雨や白き花見て心浮く　蕉郷

俳味

六月號　要目

極處……（卷頭語）
西鶴の俳句……淡島寒月
蕪村と漢學（其四）……久保天隨
私解芭蕉の發句（十）……沼波瓊音
俳諧七部集總論（承前）……風雷子
徵兵檢查……大倉桃郎
道了諧……森無黃
朝顏の時代趣味……有祿生
俳諧だんまり團子……花依子
續種（小說）……長尾素枝
口碑と憶側……木村稜々
舞踊研究會……左之助
をんな……もとえ
蝙蝠……（懸賞俳句）
吾が地方の俳境……（懸賞文章）
五月雨自畫讚（寫眞版）……西鶴筆

毎月一回一日發行

定價
一部金拾貳錢
郵稅壹錢
半年分前金六拾八錢郵稅共
一年分前金一圓卅二錢郵稅共

發行所
東京市本鄕區西片町十番地ろ九號
俳味社
振替口座東京三四三四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六月一日發行

アララギ

第五卷 第六號

談話會記事……左千夫、茂吉、柿人、憲吉、文明、千樫、
金槐集私抄……齋藤茂吉
表現と提供……伊藤左千夫
短歌漫言……柿の村人
童馬漫筆……茂吉
ものゝかげ……淺野梨郷
戀のあと（飜譯）……山宮允
小曲……柳澤健
夏蜜柑……柿の村人
うたゝね……土屋文明
日光……古泉千樫
埴岡漫吟……巌眞
春の日……民部里靜
四五月の歌壇……千樫
路上と牧水歌話……古泉千樫

定價一部十五錢〇半年八十五錢〇一年一圓六十錢

東京市本所區 東京根岸短歌會 茅場町三ノ十八

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和43年9月15日発行　【第2回配本】

青　鞜　第2巻（第1分冊）

編 著 者　平塚 らいてう
発 行 者　藤 原 正 人
発 行 所　(株)明治文献
印　　刷　江 明 印 刷
製　　本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
645
V.2
no. 6

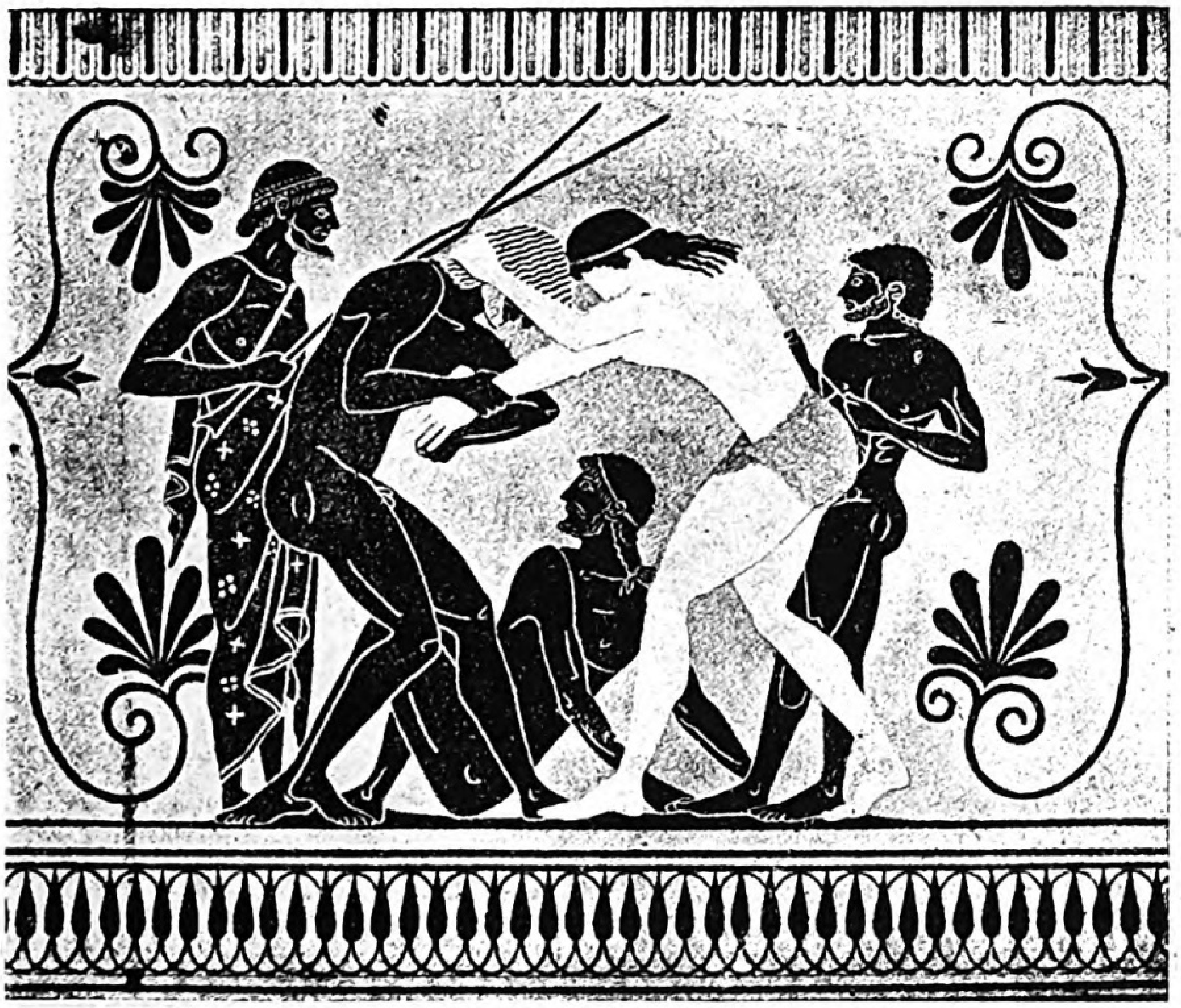
University of Colorado at [redacted]
[redacted] 6746181

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PL
756
W6
S45
v.2
no.1-6
1912



University of Colorado at Boulder
U18304 7799894
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER